女鑑
東京國光社
第百五十五號

女鑑第百五拾五號

目錄

小野小通



花咲きて

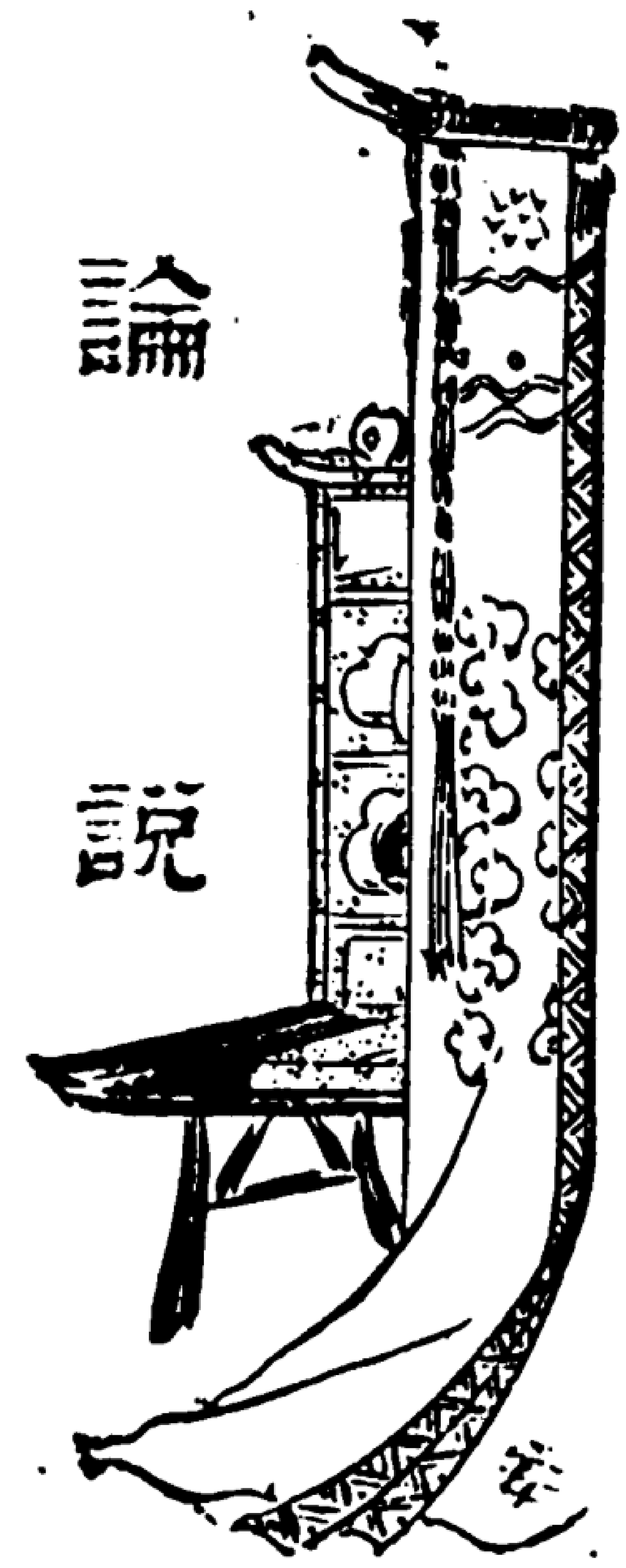
人の心は、うかれはてぬ。千金をいたづらなる粧飾に費やして、花やかに光るはかりなる扮装の美を、花下に競ひほこる者は、山と群り、數百金を投うちて、あやしき狂態をつくり、春に醉ひ花に戯れ狂ふ者は、潮とみなぎり、甚しきに至りては、數萬金を費やして、異様なる行列を整へて、大路をねりありくさへあり。うかれ心の甚しさよ。

薄く濃く紅に染め出でて、錦れりなす四方の花の色は、もとより世に美はしく、目れどろかれぬるながめなり。これはかりを見は、誰れかは心のうかれざらむ。然れども、眼を轉じて、我が同胞の一部分が菜色を見よ。げに悲しく、いとほしく見るだにはたへぬものあり。うち見る野山の花は錦の美はしけれども、我が一部

の同胞が襤褸のあはれなるを見よ、なほ其の襤褸だに容易くまとふを得ざる同胞のあはれなる狀態を顧みよ。更に心をとめて、同胞が飢餓のあはれを見よ、一杯の粗食を分けて、僅に一家が一日の飢を凌ぐものは、なほ食ありともいへ、甚しきに至りては、一箇の芋を嚙みて、辛くも親子の命をつなぐばかりの者あり。吾人は、これを思へば、實に花を見むと思ふ空だにたばらぬなり。錦なす花の色は面白からざるに非ず、然れども、この同胞の菜色の悲しげればなり。のどかなる野山の春風は、うれしからざるに非ず。然れども、この同胞の飢寒の聲の悲しくあはれなればなり。

美衣美食花をめでうかれたる都人士よ、汝が花をめづる心の一片をうつして、この悲しき同胞の菜色をあはれめ、汝が美衣の一端をさきて、この悲しき同胞の襤褸を補へ、汝が美食の一杯を分けて、この悲しき同胞の飢餓を救へ。これ、實に同胞の同胞たる心なり。同胞の同胞たる義務なり。しかして後に、汝が思ふがまゝに、春の野山に遊びもすべし、花のもとに歌ひも舞ひも樂しむべし。吾人は、決

して春をよろこび花をめで遊ぶをあしといふにあらず、これ實に人情のつねといふべきものなれはなり。然れども、吾人は、なほ人情の大なるものを忘れて、一向に春に狂ひ花にうかれはつる人の心をにくむのみ。人情の大なるものとは何ぞや。やがて、我が同胞を愛でいつくしむといふ心なり。この情義を忘れはてゝ、我が同胞が飢に泣くをも知らず、我が同胞が襤褸にやつれたるをも見かへらずして、唯我が一身に千金の美をまとひ、我が一時の興に萬金の多きを費やして、花にのみうかれはつるが如きは、吾人のみにあらず。心あらむ人は、誰れかは惡しゝとにくまざるべき。しかゝ、近く同胞の窮狀のみにあらず遠く心をとめて東洋の風雲の騷がしきを見よ、今日は、決して長閑にうかれ遊ぶべき春にはあらざるをや。あはれ、都人士よ。汝が花のうかれ心にまかす無用の費を減じて、先づ同胞の窮狀を救へ、さて進みて、國家の財を補へよ。



論説

小兒と母親と

高島平三郎

白銀も黄金も玉も何せんにまされる寶子に如かめやも

これは、只今から凡千二百年ばかり前に生れた山上憶良といふ名高い歌よみの歌で、萬葉集に載せてありますことは、私の申すまでもなく、皆さんの御存じの事でござりませう。實に、此歌は、よく人情をうつしたもので、誰れでも子をもつた親は、我子をいとをしがりいつくしまぬものは御坐りません。世間で、子寶と申しますのも、やはり此意味を申したもので、我々日本人の心は、大古より此通り、子供を寶としいつくしむ情が盛にあらはれて居ります。然るに、又以呂波がるたなぞに「子は三界の首かせ」と申しますは、全く佛教の考で、此世をいとひ、愛情の絆を絶つといふことからいひいでしことにて、決して日本人固有の考では御坐りませぬ。

試に子供のある方は考へて御らんなされ。皆さまが、日夜辛苦艱難して、各其職業を

賜まるゝは何の爲でありませうか、それは、自分の名譽の爲、又は富貴安樂の爲など、いろ／＼の望もありませうが、其大部分は、我子の可愛さに、其子の爲少しにてもよかれかし、後には立派なる人となりて、世間に功を遂げ名をあげかしとおもひてつとめられぬ人はありますまい。よし、此心なき人にせよ、自分の身につく財産は、決して死ぬる時持てゆかれるものではありませぬ、必我子にゆづるべきものでありますれど、如何なる親でも、子を思ひ、子の爲にせぬものはない筈であります。

又子を持たぬ方々にしても、考へて御覽なされ、此世の中が大人ばかりで、子供がなかッたらどのやうなものでありませうか。互に四角四面な眞面目な顏ばかりして居ること多く、子供のある世の中の賑はしさ面白さにくらべたら、誠に淋しいつまらぬ世の中となつてしまいませう。されど、今から十五六年前に死くなりましたアメリカの詩人ロングフェローといふ人は「子供の心には、樂しくさへづる鳥や靜かに琴のしらべをかなでつゝ流るゝ小川や百花の上をそよふく春風がはいつて居る、我々大人は秋の寒風や初雪の降る頃なれど、此世に子供がないならど、如何にわびしからん、未來の冥途はおそれぬにしても、我なきあとの荒埜となるを思へど、おそろしなんどいふどかりなし」との意味をうたひ、尙言葉をついで「すべて吾々の發明や書物より得たる

知惠は、子供の無心の有様や歡しき容良にくらべて見れど、物の數にも足らぬもので、子供は今まで此世に現はれた詩歌の中で、最もまさりたるものじや、なぜなれど、詩歌は、死だ命のないものじやが、子供は生きた詩歌じや」と申して居ります。實にや子供は、此世の中を柔らげる愛らしき天の使であります。

されど、古より、一人としても、亦一國としても、子供を大そう大切にして、後の世までも其ほまれを殘した人が隨分あります。これは、皆さまも多分御存じで御坐りませう。今から二千餘年前に、ローマといふ國にコルネリアといふ名高い婦人がありました、此人はシピオといふ豪傑の娘で、グラッカスといふ人の妻でありましたが、二十六歳の時夫に死別れまして、三人の子供を連れて寡目ぐらしをして居りましたが、實に賢婦人でござりまして、まことによく其子供等を敎育いたしました、之れにつき名高き話といふは、其頃ローマの風として、貴婦人方が、大さう衣服や指輪腕かざりなどに華美をきそひ、互に價高き寶玉をちりぢめてはてる有様でありました。されど、コルネリアの友も、或時コルネリアを訪ひ、四方山の話から、髮かざりの事などに話がうつり、あなたも何れたくさんのお品をお持ちで御座りませう、どうぞ拜見を願ひます」と申しましたら、コルネリアは、早速承知いたし、やがて二人の子供を呼び出し

「これが私の實でございます」とて見せましたれど、其婦人もいたくはぢ入つたといふれ話であります。又此コルネリアは、見目うるはしい婦人でありましたから、若いのに寡婦ぐらしで居るといふので、或國の王さまが妃に貰ひたいと申込まれた事がありましたが、斷然ことはりまして、一意夫の忘れがたみを育つる事に心を寄せて高尙き行が多くありましたれど、其存生中に、國人の爲に肖像を立てゝあがめられ、尙其子二人（即グラツカス。ケイアス。一人は女にて他に嫁す）は其頃のあしき風儀にはりあひ、ローマの平民の爲に高き績を立て、歷史に名を留むる人となりました。

又今日より二千三百年程前、即我　孝昭天皇の御代頃に、マセドニヤといふ國の大將にアンチパテルといふ人がありました。此人は、名高いアレキサンドル大王——即、希臘、埃及より、印度までを征服して豪傑アレキサンドルの氣に入りの大將で、其頃名高いアリストートルといふ哲學者の弟子でありましたが、此人が希臘のスパルタといふ國を征伐しました時、スパルタにては力盡きて、何でも仰に從ふから許してくれと申し込みました、そこでアンチパテルは、それなれどスパルタの子供五十人を出せと申しました——一寸考へますと五十人ばかりの子供で許さるゝならこんな易きことはないと思はれますが、スパルタは昔から武を尙び大さう子供を珍重した國でありま

すから、なか〳〵容易くは承知しません、いろ〳〵相談の上、國中にて名高き人を百人差出すゆゑ、子供の方は勘辨してくれと申し出したさうであります、ところがアンチパテルは、其數と、其名高き人といふことゝに目がくれ、此申出しを承知いたしましたさうであります。

偖、右の話のスパルタで、子供を斷りて、名高き人をかへた意味は、皆さまも多分お察しで御座りませう。實に子供ほど大切のものはありません。名高い人はいづれ年を取りて居りますから、此先も大抵知れたものでありますれど、子供は此後教育次第で、どのやうなえらい人になつて、國の汚名をすゝぐかも計られませぬ。此事は、遠い昔しの外國の事ではありませぬ、今日只今の我國に於きましても、子供の大切な事は決して昔のスパルタに變りはないのであります。そこで、かゝる大切なる子供は、誰がそだて誰が教ゆるかと尋ねて見ますと、いふまでもなく御婦人であります。實に子供を育つるといふことは、婦人第一の役目であります。父親も、固より子を教育する重き役目を持て居りまするが、其みどり子の時より最大切なる時の間は、殆まるで母親の責任でござります。一體世の進むにつれて、婦人の仕事を男子が侵すことがだんだん多くなり、婦人の仕事がなくなるといふて心配する人もあるやうで、現にアメリカ

などにては、それが爲、婦人の仕事をひろめるやうにとて、婦人をいろ〳〵の役人などに使ひまする、又西洋の或國では、隨分婦人が男子と同じやうな荒わざをして居るのもあるさうでありますが、これらは、生活上止むを得ずすることで、決して婦人は男子の通りの仕事が常に出來べきものではありません。假令出來たにせよ、婦人正當の職業ではありません。然らば、婦人に適當なる職業は何であるかといふに、それはずゐぶん數へたなら、澤山ありもしませうが、男子にどうしても出來ぬ事で、しかも、此世の中で最大切な仕事の一に數へらるゝ婦人のつとめは、生産育兒の事でありませう、此事は、昔から胎敎などいふて、隨分人も注意をいたしました、併し、母の自然の敎が「どのやうに」「どうして」「どれほど」子供にさしひゞくものかといふことを、學問上から詳しく調べた人は多くはあらぬやうに思ひます。それゆゑ、私は、只今から、子供の心がどのやうにして開けてくるかといふことを説いて、母親の身と心とが、子供に及ぶ次第を明らめたいと思ひます。（以下次號）

女德のしをり（四）

三輪田眞佐子

女德の尊き所以のものは、道を實踐し義を躬行すべければなり。若し徒らに古人の學

説を幷列し、東西の學理を比較し、以てその勝劣を品評するのみにて止まんか、露ばかりも、世道を開き、人心を導くに於て益なかるべし、果して然らむ、思を焦し時を費して女徳を言ひ將た學ぶものは、愚なるわざとなりはてん。あはれ。

外つ國の倫理學、あるは道徳學は、多く科學（サイエンス）として講究するを以て、その學理の周到なる、その分類の綿密なるは、遙に東洋の及ばざるところとかや。されど、既に科學として講究する以上は、一種の智識に屬するを以て、おのづから、實行の有無を問はんよりも、研究の精粗のみを競ふに至る傾あるべきは、をさ〳〵免れじ。これに反して、東洋の道徳を言ふものは、高妙なる學説を吐かざりしかど、多くは實踐躬行の餘を以て、世を救ひ人を敎へんためなれば、從ひて、身にうむ玉の黑き行あるものは、憚りて道徳を述べざるべく、亦心に道心盛ならざるものは、忌みて道徳の文を見、且つ説を聞かざるめり。故に、苟も、これを言ひ、これを學ぶものは、實行を期せざるはなし。

蓋、西洋の道徳説とて、實行せざるよりも、するこそその本意なめれ。況して東洋、わきて我國のごとく、臣民克く忠に克く孝に、億兆心を一にして、以て敎育の淵源をなすものは、既に建國の始より道徳を實行して、豐あし原の美風をなせしなり。今更口

説の學に流れて、尊き御國のてぶりを損すべきものかは。孔夫子は、朝に道を聞けば夕に死せんも可なりとまで道を好み給ひけり。今や、世の風潮は、物質上の智識をのみ尊ひ、遂に黄金の光に眩惑して、心はさながら、洗はざる衣よりも汚らはしくならんとせり。個々精神上の修養につきてものするものあるとも、單に口説の學にして、敢て自ら實行以て他に求むるにはあらずかし。などかこれに敬服するものあらん。殊に位置高く、あるは教職にあるものさへ、その操行正しからざるものもありとかや。誰か盜跖を上流と仰ぎ、夫子と宗むるを肯せん。あはれ、德風のなびかざるはむべなるかな。宜哉。

言の葉に誠の花のさきてこそ文の林はいやかをるらめ

おのれは、堅く、道德を科學としてのみ講究するを好まず、必ず、實踐躬行を以て先せんことを願ふなり。されば、女德につきても、讀者に科學として女德の智識を媒介するにはあらず、全く實踐躬行を促さんためなり。

されば、女德を唱道するものは、女子の良心を刺戟して、女子に善行あらしめ、又は良跡を奬勵せん目的ならざるべからず。將た、女德の説を聞くものは、その嘉言を納れ、女德の書を見るものは、その規矩に典とり、時としては今の世にある淑女の人物

を慕ひ、時としては昔の世にありける良婦を模範と仰ぎ、以て朝な夕な徳音に感化せられて、遂に豁然として女徳の眞味を自得するものこそ、始めて文よみし甲斐、又は教を受けし効驗ありと言ふべけれ。口能く聖賢の語を假り、筆能く流麗の句を綴らんも、顧みて内に疚しきところあらんには、などか有徳の女子と言ふべき。否かゝるものあらむ、女徳の賊に外ならじ、蓋、有徳の婦人は、默するも、その常の言行を見、その家庭の情態を察し、あるはその世に處する經歷に徵せんならむ、その徳光燎々として輝くならん。野に有徳の女子が、世にたちて木鐸を振はんこそ、徳風起り、天下の女子靡然としてこれになびき、以て各、守るところを知るに至るなれ。

意氣と高尚と

湘玉女史

今や社會は、事々物々、斬新を競ふを以て榮とせり。就中、人目を惹き、注意を促す者は服飾なり。況や女子の如き容儀を以て一大要件とする者に於てをや。然れど、平素服飾の如何に注意すること極めて深く、流行と云ひ、新形と云へど、其物の適否を論せず、價の高低を問はず、爭ふて之を購求せんとする傾あり。抑服裝は婦女子の注意すべき一大要件にして、其の人の品位を保つ表牌ともいふべし。人の品位の表牌な

るからは、亦最高尚ならざるべからざること勿論なり。

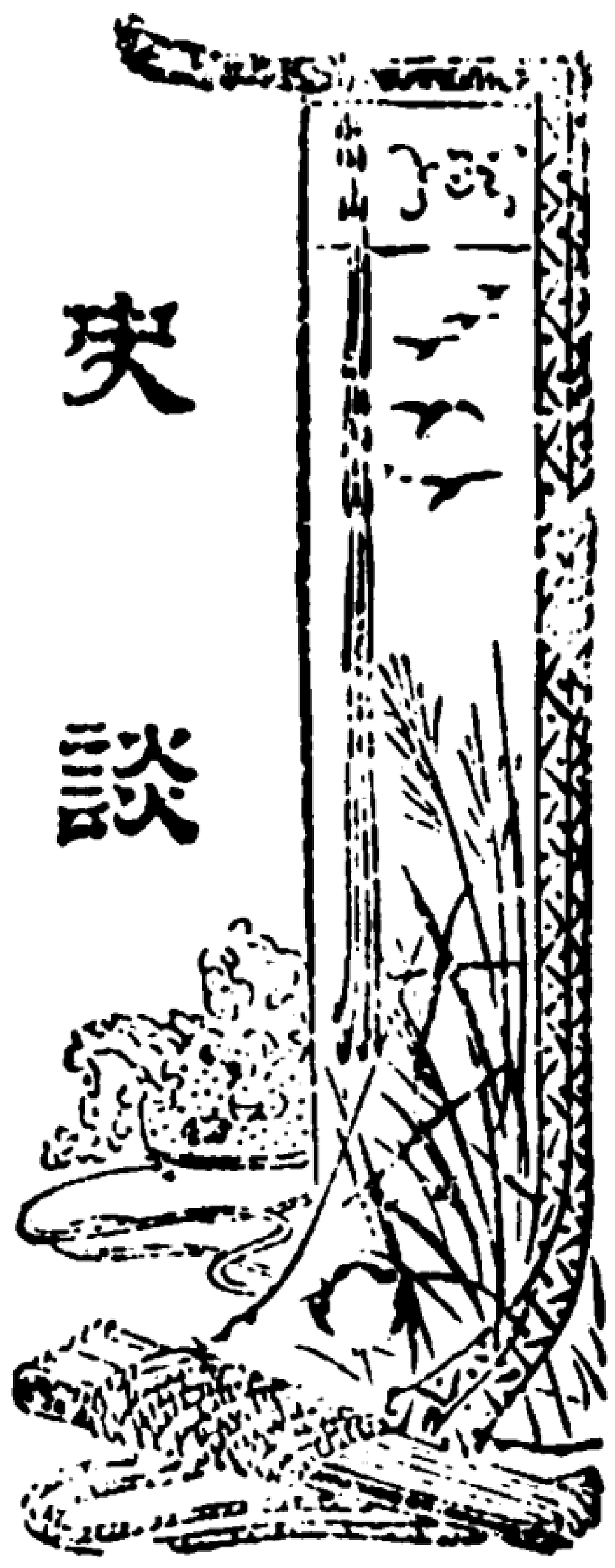
試に顧へ、世人が服飾の好尚は、如何なる原泉より流出するか。ナポレオン。スペンサー。の外套。劉氏冠の如きは、其人物を欽慕するに出づ。信玄辨當。三齋羽織の如きは、軍中に便利なるが爲なり。利休林宗の頭巾は、其風流瀟洒なるに取るなり。是皆依據する所ありて之に倣ふ。彼の歐米諸國の婦女が、交際社會の先輩に倣ふも、亦依據する所ありて然る者多し。而して、其依據する所も亦擇ばざるべからず。男女服飾の好尚を觀れば、其國の品位如何を知るに足るとは、識者の說なり。我國近く、二百五六十年間は、幕府が、一般の服飾に迄關涉し、其自由を拘束せしが爲に、特殊の好尚を見ざりしも、反て公家武家の男女は、平素の服飾も自ら一定し、一見其身分を知るの便ありし。民間の男女に至りては、其職業により、貧富により、幾分の守る所なきにあらざりしも、男子は武家と一大鴻溝あるが爲に、武家の風に倣ふことを得ず。婦女は此鴻溝なきも、武家の服飾は野樣なりとして之を斥け、其少壯のものは、俳優の服飾を學ぶに至れり。所謂團十郞格子、宗十郞頭巾、路孝羽織、芝翫茶の類是なり。維新前後より、西洋の服飾流行し、一時翕然として、婦女も亦之を學びたるも、今は寥々聞くことなし。今日婦女の意氣なりとして摸倣する所は、絃妓の服飾なり。絃妓の

服飾は、其原流俳優の打粉等より來る者多し。嗚呼、世間の婦女が、意氣といひ高尙と云ひ、爭て藝妓の服飾を摸倣するは、是果して何の心ぞや。人各身分あり、天性の寛嚴あり、身材の長短あり、容貌の美惡あり、是等の適應を考察せず、一意只流行の服飾を着するを以て風姿の美を增し、品位を高うするを得る者とするは、大なる誤想なり。

夫れ意氣とは何ぞや。人々氣の向ふ所に隨ひて意の馳出るを言ふなり。其馳出る所は、目に視ること能はざれども、必ず事物に就て其形をあらはすものなり。然れども、唯其意の馳出るまゝに放任すべきに非ず。宜しく世間全般の好尙を察し、次に時候、年齒、身分、稟生を考へ、以て服飾を想應せしめざる可らず。果して能く相應せば、是を眞の意氣と言ふなり。而して眞の意氣は、高尙に在り。高尙とは品位の自然に備はるを謂ふものにて、其人の志操鞏固にして、見識の一定せるより生ず。見識を定むるは學問にあり。學問あれば事物の善惡好否を判別し得べし。善惡好否を判別するの能力あれば、氣韻自ら高尙に至るなり。氣韻高尙なれば、かの藝妓者流の風を摸倣して以て得意とするの迷なかる可し。故に、自然の意氣と、高尙と、相待て始めて完全なる優美の服裝たるを得べし。良家の女子にして、花流社會の體を摸するが意氣なるに

非ず、町家の女子にして、貴婦人の風を摸するが高尚なるに非ず。亦徒に高價のものを纏ひたるが優美なるにも非ざるなり。殊に最も注意を要すべきは奢侈にして、服裝は最も華奢に流れやすきものなれば、宜しく身の程々を考へ、虚飾に耽らざる樣注意すべし。是、即、其の身を高尚に保つ所以なり。

今や各國との交通日々に繁盛に赴くのみならず、雜居の期も亦近きにあり。同胞相警めて碧眼婦人の嗤笑を防がんとす。聊所懷を述て、賢媛諸君の贊同を求む。文字の拙雜は請ふとがむること勿れ。



笑談

小野小通

鹽井ふく子

應仁以來、天下大に亂れ、世は武を尊び、干戈をのみきたへて、文學はさながら地に埋みはて、あはれ、詞の花も絶ねて久しき世に、ひとり、うるはしき玉の言の葉をつ

づり出で、やがて淨瑠璃の元祖とも今に傳へられたるいみじき才女こそあれ、小野小通と云ひて、古への小野小町をもあざむく花の色つやゝかに、丹花の匂ひかんばしく、心も玉の如く、しかも學ひろく、才すぐれ、よく文をつゞり、詩歌をよみ、糸竹のわざも世にすぐれてめでたく、書は殊に世になくめづらしく、かしこけれど、聖武の女帝も同じ世にましまさば、恥ぢ思ぼしめすばかりなりとか、當時其手跡を學ぶものいと多かりしとぞ。又畫にも工みにして、人物多く、花鳥は少し。世人大に賞翫したりとぞ。筆法は狩野光信に出でたるものなりとか。最も好みて天神をものしたりと云へり。さて、其世系は詳らかならず、其說もまた區々たり。淨瑠璃由來記に曰く、

淨瑠璃の濫觴は、永祿年中の頃、織田信長公の侍女に、小野小通と云ひし秀才の艶女あり。古への小野小町をあざむくばかりの美女なりとかや。信長公御生害の後は、太閤秀吉の御簾中に召し出され、近仕侍りぬ。むかし、紫式部源氏物語を作り給へる例に習ひて、草紙を作り出せり。其趣向は、往昔左馬頭義朝の末子、牛若丸幼年の間は、鞍馬山にれはせしが、御父君の仇敵平家をうち亡さんと密かに彼の山を忍び出で、金商人橘次信高と云ひし者を語らひ、奥州伊達秀衡を賴み、彼方に下向し給ひ、彼の館の娘淨瑠璃御前と契り給ひし舊事を、彼の小野小通、草紙物語に作り

給ひぬ。初め此の矢矧の長者、子のなきをなげき、同國青海郡峯の藥師如來に立願してまうけたる娘なる故、淨瑠璃御前とつけ、藥師瑠璃如來十二神將の緣をかたどり、十二段の草紙を作り、淨瑠璃物語と號せしなり。後鳥羽の院の御宇、信濃の前司行長入道と云ひし人平家物語を作り、生佛と云ふ盲法師に此の物語を敎へ、節をつけ、琵琶に合して語らせけり。彼の生佛が生れつきの聲の風を、今の琵琶法を學ぶなる由、徒々草に見ゑたり。之に例して岩舟撿校と云ひし琵琶法師、音曲に達せし名人なるが、此の十二段に節を付けたり。また瀧野撿校、角澤撿校の兩法師、三味線に合せて曲節を語り弘めける云々。

また江戸名所話にも、通女は太閤秀吉の御臺所に仕へたる、いとやさしき上臈にて、才色いとすぐれけるが、あるとき御臺所、通女をめして仰せられけるは、古への女の世にすぐれたる才藝ありしは其德を末世に殘し置しぞかし。あはれ、和御前も才藝の程を末世に殘して名の形見ともなし候へかしと御望みありけれど、小通、答ふるやう、古のかしこきは皆神佛の化身にてましますす故、さやうの事を後の世迄れかれ候へど、今拙き妾の及ぶべき事に御座なく候。されど、仰せ重ければ、よしあし、浪速入江のもしほし草あつめてさし上げ、時の御笑ひ草ともなし奉らんとて、淨瑠璃御前の事を記

し、さし上げしに、御臺所、よませ給ひて、いたく感じられ、太閤の御らんにいれしに、秀吉公、とり上げ給ひて、是程のものを其のまゝに捨て置んもをしき事なりとて、岩船撿校に節をつけよと仰せられければ、撿校仰を承り、則ち山中山城守に讀ませらるゝを、つく〴〵と聞きて申やう、十二巻、平家物語は信濃の前司行長が作にて、生佛と云ふ座頭、節を付けしと申傳へ候なり。通女の作に此の盲目が、節を付け申さんこそ末代までの譽れにて候。通女の作なくば、音曲の妙も空しからんに、よき幸にも生れあひ候とて、しばらく閑居して、節をつけ、語りそめけるなりと云へり。

昔々物語には、淨瑠璃の始りは、織田信長公、以の外の大病にて、病氣本腹に赴き給ひし後大につかれ給ひ、夜もすがらねぶらせ給はず、其折り御側ら去らずの御伽には、城玄勾當、角都。勾當、小野の小通此の三人、晝夜少しも御側を離れず。御介胞申しけるが、其時城玄、角都一同に、小通は聞ゑし文者なり。何ぞれもしろき文をつくり、御耳に入れ候はゞ、御慰にもなるべしと申上げしに、信長げにと思ぼし、小通に仰せ付けらる。小通、さま〴〵辭退申しけれど、再三の御所望いなみ難く、遂に彼の舎那王の事を記して、さし上し云々とあり。されど、柳亭翁編輯の還魂紙料には之を駁して曰く、慶安の印本、守武千句に、

前句　いとゞだに座頭まがひの杖つきの

附句　浄瑠璃かたれ燈火のもと

又付　今宵はや時は牛若ふけはてゝ

これ天文九年の千句なり。信長公は、天文元年の生れなり、此の千句の時僅に九才なり。浄瑠璃を作るべくもあらず、いといぶかしき事に思ひしが、宗長日記、京錄四年の條に、小座頭あるに、浄瑠璃をうたはせ云々とあるは、駿河國宇津山にて書るなれど、この頃はや田舎わたらひする小座頭の歌にあるにて、浄瑠璃は古へよりありしを思ふべしとあり。それも、げにさる事ながら、たとへありしとも、さまでいみじからざりしを、小通初めてめでたく作り出しにより、元祖の名小通に歸せしにやあらん。其他、小窓雜筆には、鹽川志摩守が後妻にて、其女は直田河内守と云へる人の妾となりて、信州松代へありとか。或は池田武藏守の家來鹽野喜太郎と云ふものゝ妾なり。一人の娘をもてり、喜太郎酒狂深き者故、女をつれて家を出で再び歸らず、新上東門院へ仕へたりと古今秘錄には云へり。その說まち〳〵にして何れを信とも定め難けれど、燕石十種、其他四五の書物、多く皆信長の侍女なりしを、信長死してより秀吉に召出され、淀君が侍女となりて、浄瑠璃をつくりしと云ふ說いと多し。後ち其女、河圓に

よりて信濃松本に僑居し、世、その生死を詳にせずと云へり。名人忌辰錄には、元和二年三月五日、年五十八にて歿すとあり、或は信なるか。とにもかくにも、かばかりの才女、其世系、生死の詳ならぬぞ口惜しき。されど、かく事跡の不明なるは、おのづから其才色をほこらざりしにもよるべく、その心ばへさへ汲まれて、いよ〳〵床しうなん。

孝子曾與女

山本正周

いつの世なりけん、尾張國海西郡のある村に、善六といふ農民ありけり。夫婦の間に曾與といへる女の子を儲け、老母を合せて一家四人のくらしなり。家固より富めるにあらざれども、業にさへ勵みなば、糊口に差支ふる程のことなかるに、善六天性無賴にして大酒を好み、耕作にも怠りがちなるより、漸く貧困に陷りけるが、曾與女二歲の時、母は故ありて離別せられければ、曾與女は、祖母と父との手にて人となりけり。かくて、父善六が五十三歲の時、祖母も亦死にけり。曾與女は、かく幼きより母に別れ、今は祖母もみまかりて、あはれ貧苦の間に生ひ立ちしがなか〳〵にめでたくて、十三四歲となりし頃は、身の粉裝には露心をもかけず、浮きたる世の普通の少女子の行に

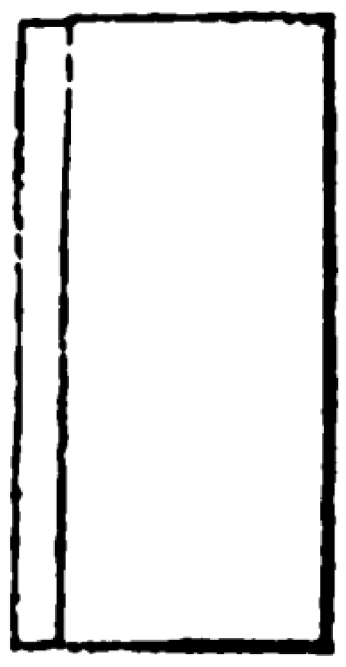
は少しも似で、家にありて苧を積み、機を織り、夜を日につぎてあらんかぎりの力を盡し、稍年長けては外に出で丶耕作につとめ、人に雇はれて僅かの賃銀を得ては父の好む酒を求めてすゝめ、父の喜ぶ色を見て無上の樂とせり。されども、餘り多く酒をまゐらせては、其の身に害あらんことを思ひ、これより後は、其の量をさだめて、己が朝まだき家を出づるとき十錢を與へ、夕に家に歸りてまた十錢を與ふるを以て例となし、ひたすら父の心を慰むることをのみ務め、已の飢寒は絶えて心にもかけず。然るに、善六動もすれば、他に出で丶酒を飲み過し、いたく醉ひたる後には、前後も知らず途上に倒れ臥して、家に歸らぬことなどありけれど、曾與は、雨ふる日には簑笠もて父の行方を探し、或る時は衣衾を負ひ行きて、途上に醉ひ倒れたる父の身を覆ひ、或る時は蚊張を携へ行きて之を蔽ひ、已れは其の側に立ちて夜を明かせしこともありたりしが、後には父善六も、娘の至孝に感じて、行を改めしとかや。かくて、此の事官に聞えければ、金を賜ひ、租を免じて、其の孝を賞したまひけりとなん。



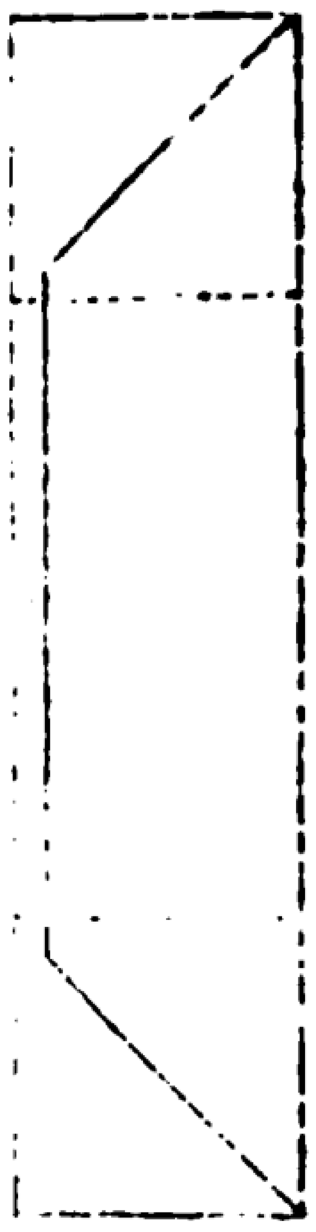
折形

有住齊

折拂包、大、小

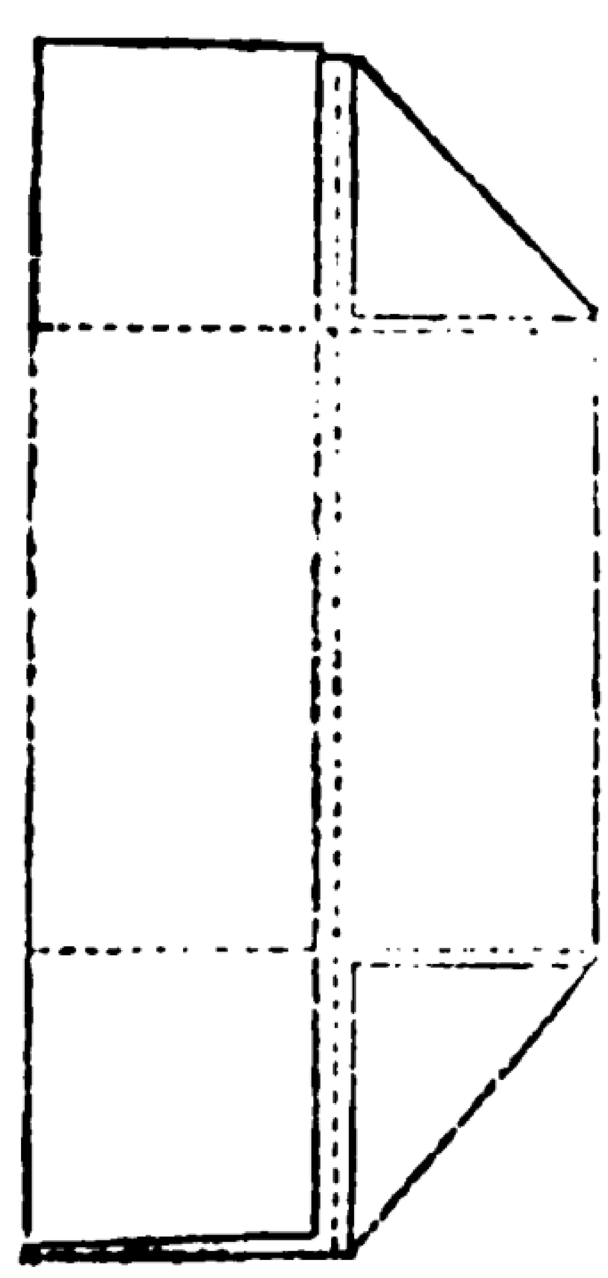


是は拂箱に入れ、大は御髪の時、髪先疊に着かざる様に敷き。小は、髪の落を入置なり。金銀の紙にて八重に重ねて折るなり。



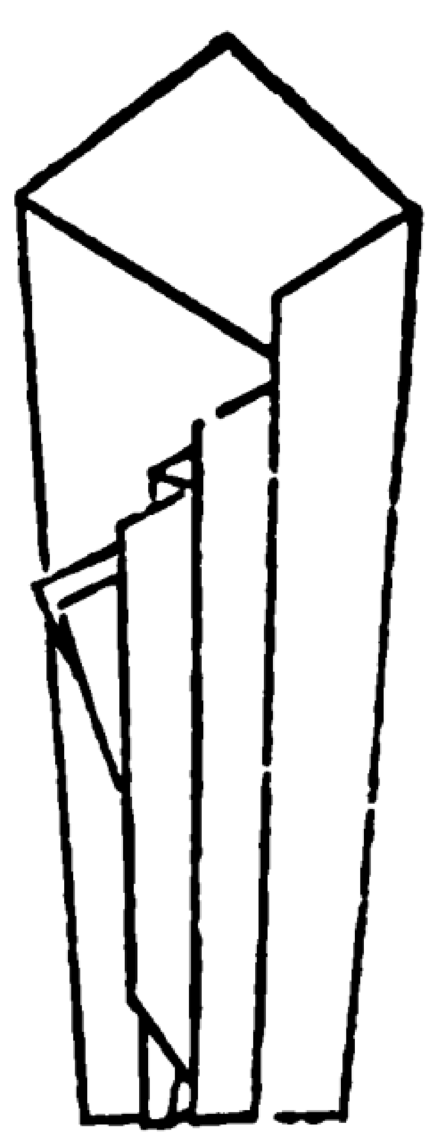
おなじく上下を開きたる處、

おなじく上下と右とを開きたる處

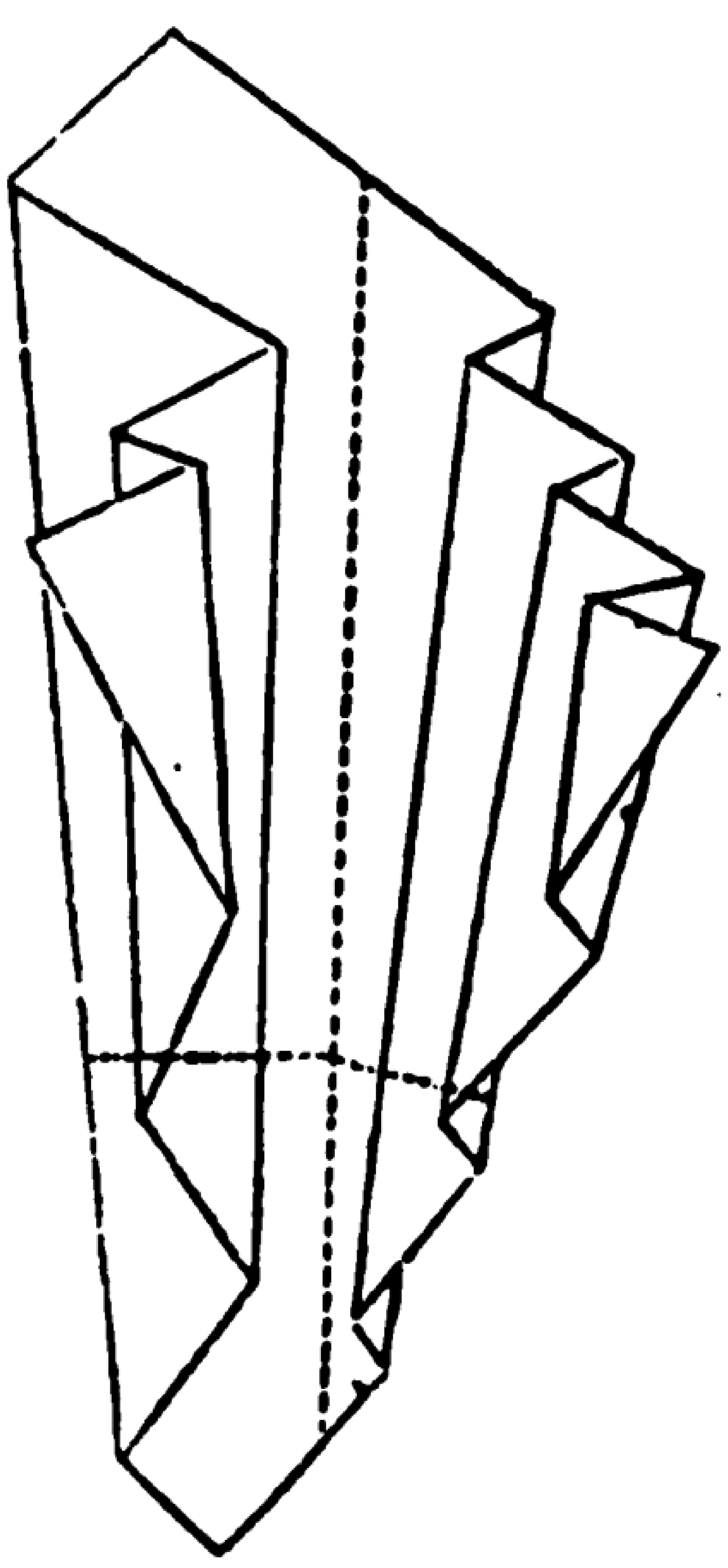


長掛包

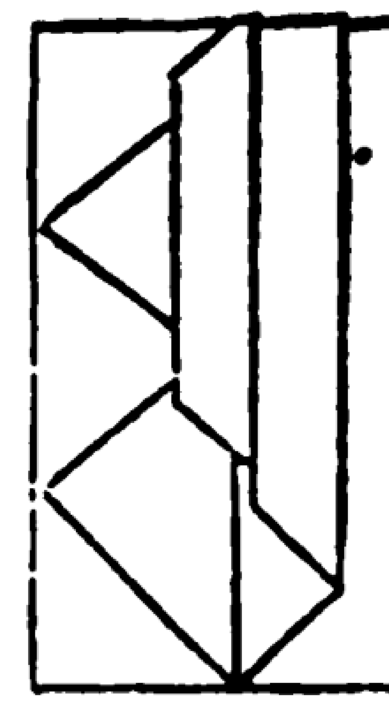
長掛の元を包みかつら箱に入れ、上書なし。又屏風にかくる時にも包む。



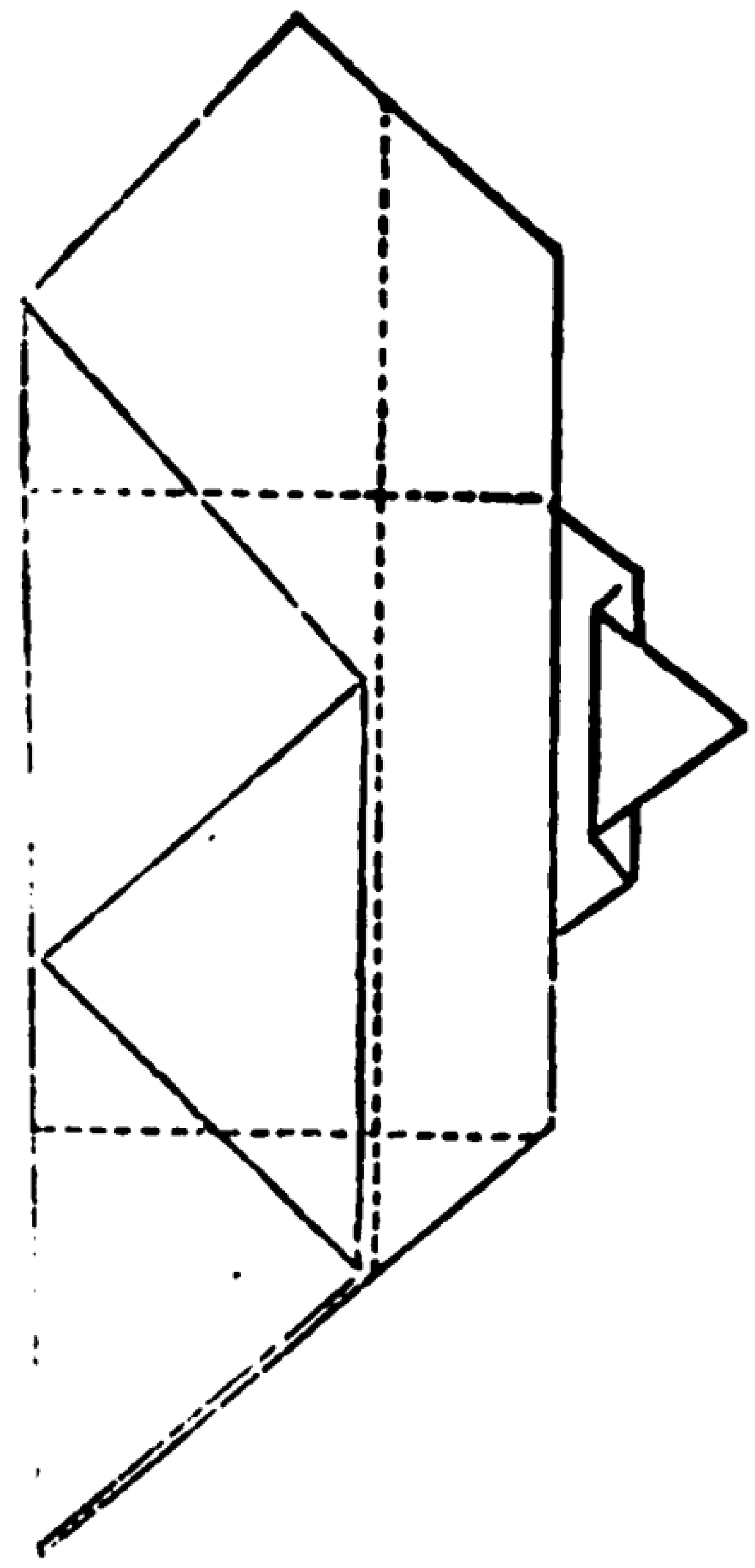
おなじく下と右とを開きたる處



京雛包



是は紙雛包なり。女中へ贈るものゆゑ、上書は假名にて書くべし。



れなしく上下と右とを開きたる處

茶の湯

茶道客方心得草

孤峯庵碌仙齋不羨　關　葦雄

次に客方菓子を喰ふべし。干菓子類は、疊紙の上にて折取て喰ふべし。蒸菓子の類は、紙の儘手の上へ載せ、餡のこぼれざる樣注意して喰すべし。(但菓子を取は、點前の人茶杓を取るを相圖に取べし) 次に亭主茶具を運び點前からば、主客相互に清談閑話すべし。寂寞ならざるを要すと雖、餘り滑稽洒落に流れ、或は政談に亘り、劇場俳優の醜美を爭ひ、淫風に流れ、他流他人を罵詈惡口し、高聲に成る等は古人も禁止せられし事也。苟も茶談學問上、或は花鳥風月の談、歌道の評論、風流談にて終る樣勉めてこれを爲すべし。次に亭主點前の茶碗例の處に出したらば、上客は次客へ挨拶し、又亭主へも先づ如何に抔と世辭を云て、先々と亭主云たらば、茶碗の方へ僅少進み出(但し膝行)右にて茶碗を持、膝の前に置、元席に復し、茶碗を取、左手の掌中へ載、右

手を茶碗の横に當、茶碗を持捧げ、恭しく戴くべし。是即主人鄭重に點らしたる茶の忝を謝するの意なり。(但し山田宗偏の著茶道要錄には、喫茶咒文あり。參考のため爰に掲ぐ、凡飲酒喫茶之時各咒文あり。是先師代々の傳へなり、尤覺悟有べし。按ずるに、是皆其事之眞實也。其咒に云く、若飲茶時。當願衆生。供養諸佛。掃除睡眠。此文を念じて飲む時は、則誠心にして他念を失すべし)次に、椀中茶の點たる哉否を能見て後、右手にて茶椀の向の方を持、前の方へ廻し、(但し是は茶椀の呑口を我方へ振向るの意なり。又判然呑口不レ分も、形容不レ全圓形ゆがみ有レ之、又は破損し繼修繕の處有レ之、或は繪樣有レ之等、何れも其個所にて不レ可レ喫)呑よき所を前にして茶を喫すべし。三口半に喫し終るを定規とす。先一口喫して茶の味ひを能認め、是は只口舌にて不レ味精神にて能味ふべし。故に呑と不レ言して喫の字を用ゆるは此故也。則一口喫したらぜ、主方へ對し服加減の宜しき事を挨拶すべし。(但し服加減宜しきと云は、茶の度量と、湯の入加減と、其分量能調ひ、茶の能點たるを賞讃して云言葉也。又、御挽も結搆に有レ之美味に戴く杯云べし。三口半に呑み切り、椀中に茶の泡の殘無レ之樣すべし。椀中に呑殘りの見ゆるは、亭主へ對して失敬也。次に茶碗の緣に、口唇の付たる處を、外の方は右手拇指の腹にて、左の方より右へ撫で廻し、緣の內の方は、名差指の腹にて右より左の方へ撫で、露を切べし。次に茶椀を前に置て、兩手を突て、全體の形狀を能見て后、右手にて取、左手の掌中へ載て、土の生質、何形と云事、和漢樂燒何れも有べし。十分に見て不分明の緣わらぜ、亭主へ糺問すべし。(但し

茶碗を見るには、泑藥複藥　濃淡、碗中茶溜りの取方、口造り、高臺の作柄、切り廻しの巧拙、樂燒物は捺印の影跡に代々の差違あり）茶碗見終りたらば、茶碗を手一杯に出し置、初め亭主出したる釜の鐶付を見當に返すべし。此時我呑たる時、口の付たる處を呑口と稱す、此呑口を我よりは左の方へして返すべし。亭主よりは右の方にある也。（但し此呑口の處にて、濯ぎの湯を飜へ、明る時、爰よりこぼす故也）次に、亭主は此茶碗を取、前に置、再服を點べし。又三客以上ならば、替茶碗を持出、交々點ること有べし。何服點るも不ㇾ苦と雖も、餘り數服に相成ては、亭主も迷惑を感ずべし、多くも五六服に留るべし。

（以下次號）

三月三日草餅の樣

有住敎場にて　某の女

やよひみかの日の、上巳のはらひの日のいはひ、ひゝなあそびのことは、五節句の事とさだめられたる、いまも、なはうち／＼に、をみなたちの、ないたまふ。

かしこきあたりにもときくに、ちかきよの、この日のそちひのさまも、とりいでまほしうなりて、こゝにはものしつ。

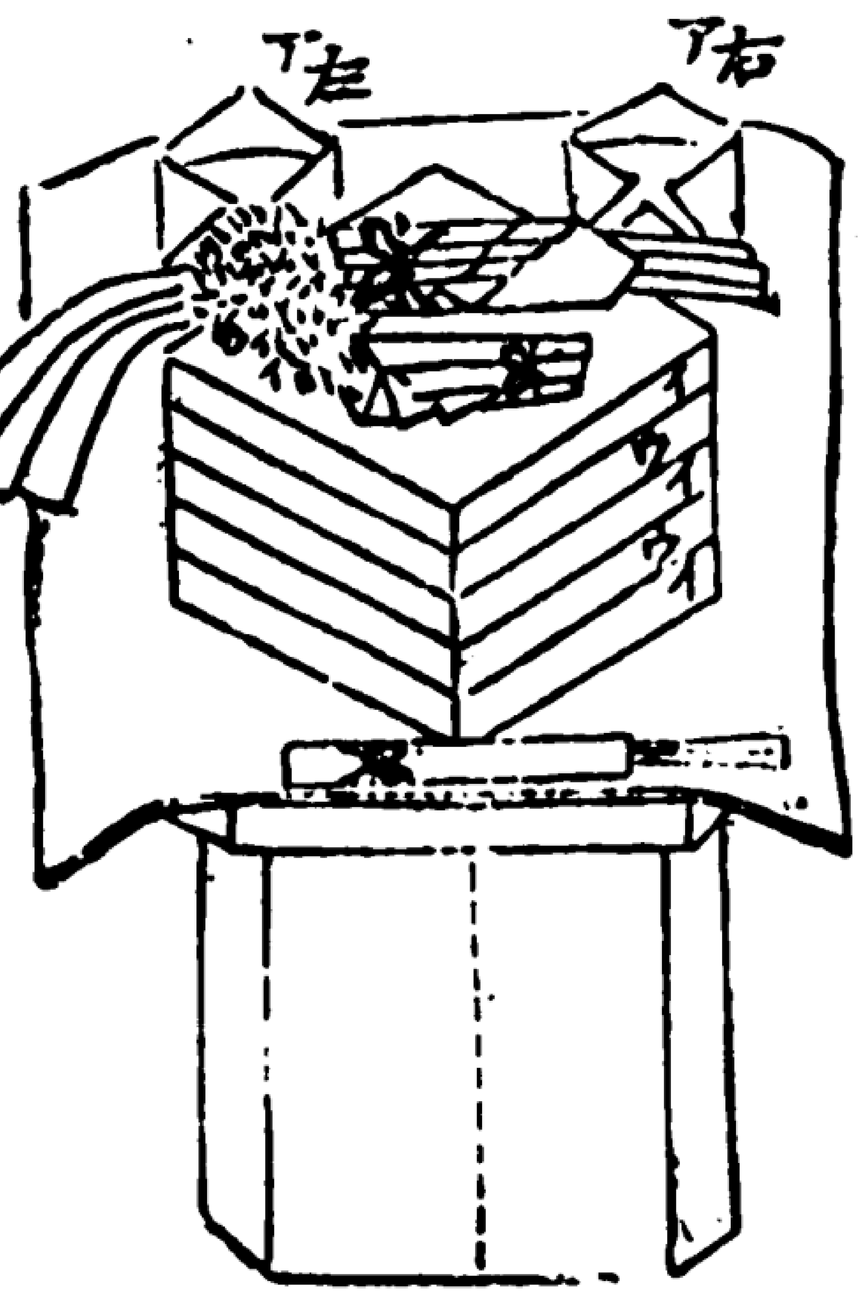
三方は　尺にても、またちひさくても、白木のまゝなるを上とし、次には、いろへたるもよろし。

餅は、菱花びらの形にて、草と白とをもちゐ、

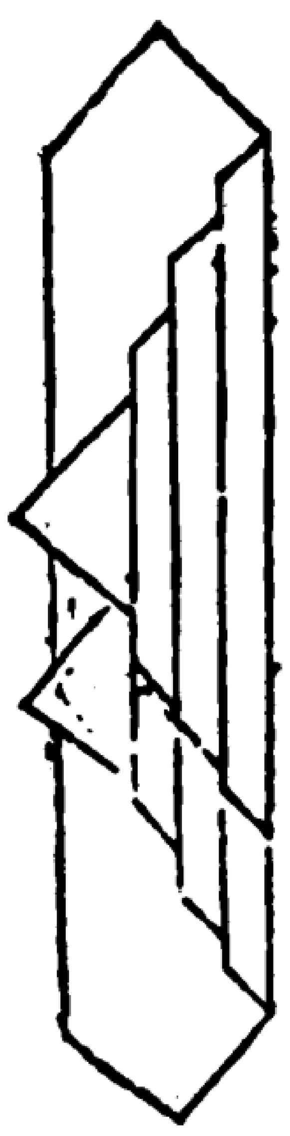
のしあはび包の紙は、表大奉書紙、裏紅奉書、ま

たは、表裏ともに、白きもよし、又さま／＼の色なるもよし、熨斗鮑は三本いる、桃花包も、平甲立も、箸包も、紙の事は、あはひつゝみのれなしなみにてよろし。

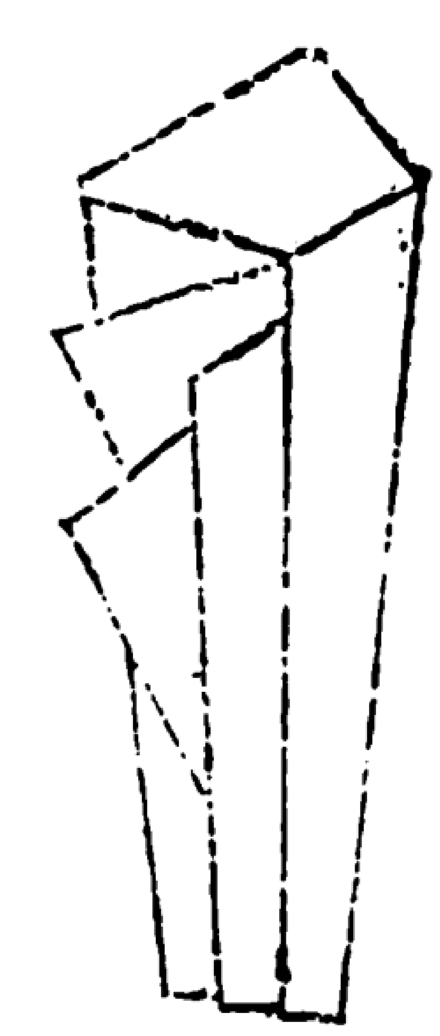
されど箸包のみは、白ばかりなるかたよろしとぞきゝ侍る。



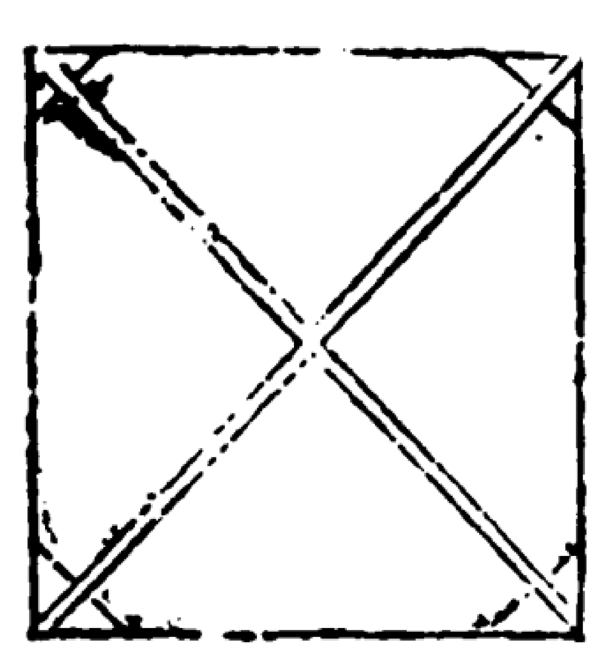
イ草の餅　ウ白餅ナリ
ア右平甲立小角　赤粉アヅキノコナリ
ア左平甲立小角　白粉マメコナリ



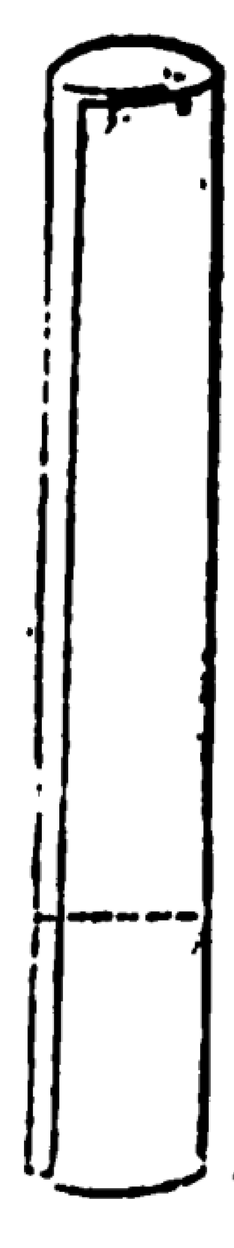
眞の熨斗鮑包



桃花包



甲立



箸包　折込三寸



女中行列長刀立傘の花結

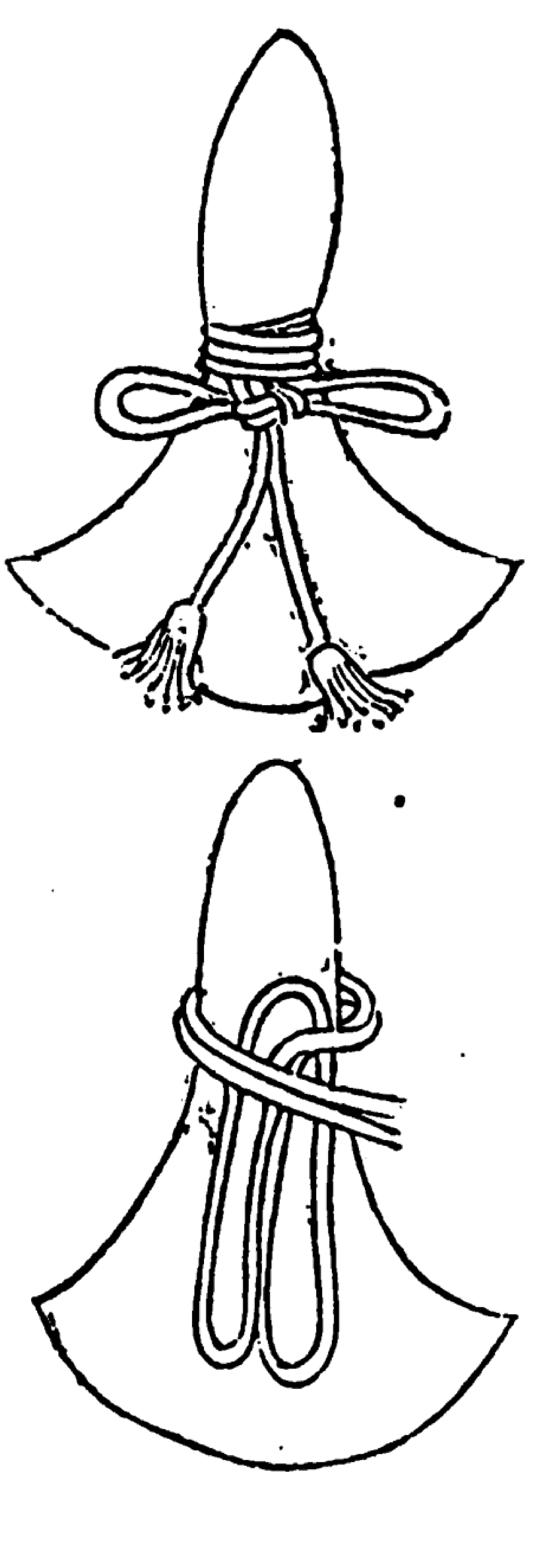
有住致塲にて　某童

奠都三十年の大御祝につきて、其ひとつの設したりける、祝會よりつくりいでゝ、其生日の足日の、も

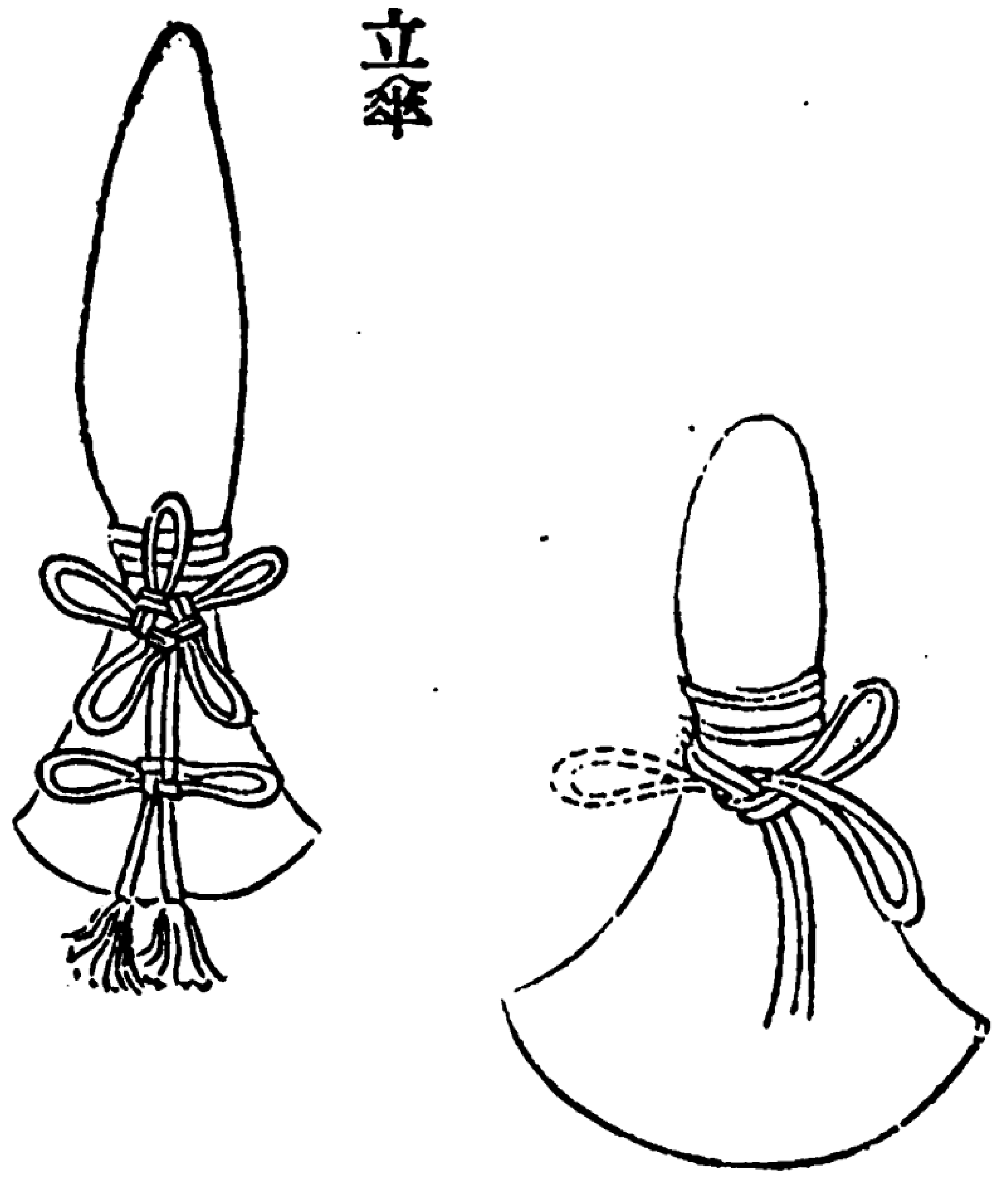
てなしになせりける物のなかに、ひときはめだゝしう、しなしたりと、たれもかれも、語りつたへ、見めであへりしは、近世様の、大名の行列、又奥女中の行列なりけり。其様はつぶさに、くさ〳〵のふでたくみもものかきとゞめけん、
其行列の中にて、女のてわざまなびたる者の、まづ心にとゞめたりしは、女の長刀の袋と、立傘の袋とをゆひとめたる花結の様なり。
さるをいかにしたりけん、よくもとゞめあへざりけり。
此さまは、いかにありけんと、ともだちにとへど、友もまたしらざりけり。
されど、童がをしへられたる形につきて、結びいでゝ、人にとはましとおもひなりぬ、よく見たりし人、をしへてよかし。

其袋の花結と、なは男方の行列にも見えたりし物の袋の花結とをものにしるしいでゝよ。

長刀



立傘



なほ其つらなる挾箱、守刀の花結等つぎ〳〵にかゝげん。その結様もよく見し人、敎へてよ。

（未完）

たちぬひ

西山たい子

今度は巾着をものせんと思ひしに、前回に辨當袋をものしたれど、なほ今一度學校用の物をつゝけものするなり。

（八十八）箸袋

之も幼きもの學校へ行くに箱にてはかさばり、紙にては切れ安くして何れも便りよからず、されど布にて作るが尤もよろしかるべし。

まづ長さ六寸ばかり、巾二寸ばかりの布を、裏表同じやうにたち、少し厚げなる紙を心とし、まづ口にせんと思ふ方を、表と裏と合せて、兩側を一寸ばかりぬひたる、それより、表も、裏も、縦に二つに折り、四つぬひにして引きかへし、口の上を絎るべし。また或は、厚紙を、長さ六寸ばかり、巾一寸より、一寸五分ばかりに裁ち、千代紙をはり、また、別に、厚紙を長さ四寸ばかり、巾は同じく一寸より一寸五分に切り、それの表側に切れをはり、但し、切の巾を一二分廣くなしたる、厚紙を包むやうにして、のりもてはり付くべし。また、其間に綿少しばかり容るゝもよろしく、上の方を少し斜めに裁つもよろし。然して、千代紙をはりたる物と、下の方を合せて、まはりをかゝりつくるべし。のりもてはるもよろしけれど、はがれ安し。

その図



だいどころ

一さより

十二月より翌年の三月までを節とす。甘酸、しほやき、てり焼、刺身、其他椀種に用ひ、又た鮨の種に使かふ。

一しらきす

十一月より翌年五月までを旬とす、しほ焼、あます、煮肴、其外椀種に用ひてよし。

一やきす

七八九十月の四ヶ月を節とす。使ひみちはしらきすに同じ。

一虎きす、ぎす、べら

専ら蒲鉾の種に使用するものにして、三種とも同様のものなり。

一鰆

十二月より四月までにして、其他は味なく、食するにたへず、てりやき、しほやき、あんかけ、味噌漬等に用ゆるをよしとすれども、椀種、刺身等にも用ふるなり。

一しら魚

一月二月に限きる、鮨種、天ぷら種、むま煮、椀種等に用ふべし。

一はせ

十一月より二月までを節とす。甘ろう煮となすを最よろしとす。又た天ぷらの種にも用ふ。



秀歌集（二十）

鹽井正男

櫻さく比良の山風吹くまゝに
　花になりゆく志賀のうらなみ

○これは、千載集の二の卷にありて、左近中將良經のよめるなり。良經とは、後に攝政太政大臣となりたる人にて、藤原の兼實の子なり。普く才藝に達し、歌にも殊に堪能にして、此の集に入れるものより新古今集に載れるなど、皆いづれも誦すべく、よく歌の美を得たり。この歌も、また誠に面白し。○比良の山風。比良山より吹き下す風にて、比良山は近江にあり。○吹くまゝに。吹くに從ひてといふ如き意なり。○花になりゆく。志賀の浦の水面に、わびたゞしく花のちりたるけしきなり。志賀の浦は近江に在り、やがて、琵琶湖の事なり。

○一首の意は、櫻の咲きたる比良山の山風の吹き下すに從ひて、麓なる志賀の浦わの波は、花に成りたりといふことにて、比良山の櫻が、琵琶湖上に、わびたゞしく散りしきたるけしきなり。花の散るといふ詞は、一首の上に見えねども「櫻さく比良の山風ふくまゝに」といへる上句に、櫻さくといひ、風吹くといへる詞にて、花の散るけしきを含めて、云はせたるなり。湖上一面に花のちりかゝりたるけしきなるを、其がまゝにいはずして、浦波が花になりゆくと形容したる手なみの面白さ

よ。歌の美は、誠にこの形容にありといふべし。

○

三三 花さそふ比良の山風ふきにけり

漕ぎゆく舟のあと見ゆるまで

○これは、新古今集の二の卷にありて、宮内卿といふ後鳥羽天皇の官女のよめりしなり。宮内卿は右京大夫師光の女にて、鴨長明の無名抄にも「今の御所には俊成卿の女と聞ゆる人と、宮内卿といふ二人の女房こそ、昔にも恥ぢぬ上手ともなれ」とさへ、賞美せられたるほどの女流の作家なり。餘りに歌を深く案じ暮らしたるものから、そが爲めに、心をいためて、いとわかくして、はかなくなりしといふこそ、殊にあはれなりしか。巨勢宗義の外孫にて、巨勢流の畫をも、巧みに畫きたりといふ。○花さそふ。木ずゑの花をさそひて吹きちらす意なり。○比良の山風。前の良經の歌に全じ。○ふきにけり。吹いたワイと感歎したる詞なり。○漕ぎゆく舟のあと。湖上を行く舟の、漕ぎ通りたるあとをいふなり。

○一首の意は、花をさそひて吹きちらす比良の山風が、甚しく吹いたワイ。湖上を漕ぎゆく舟の、漕ぎ通りたるあとが見ゆるまでに、湖上一面に、みごとに花の散りしきたる事よといふことにて、湖上に、一面の比良山の花の散りしきたるけしきなり。湖上に花の散りしきたりといふ詞は、一首の上に、それとあらねども、花さそふ比良の山風吹きにけりといへる詞にて、そのけしきをいはせたるなり。なほ良經の歌に「櫻さく比良の山風ふくまゝに」といへる詞にて、花の散るけしきをいはせたる手ぶりに全じ。比良の高嶺の花が、琵琶湖上

一面に散りしきて、漕ぎゆく舟のあとが、浮かべる落花の漕ぎわけられたるあとにて、それと見ゆるさまにて、誠に面白き湖上の落花のけしきなり。前の良經公のと共に、面白くも妙くもすぐれたる湖上落花の吟といふべし。此の人の歌に、なほ一首の秀逸なる落花の歌あり。

○

あふさかや木ずゑの花を吹くからに
嵐ぞかすむ關の杉むら

○これも、新古今集の二の卷に、前の歌と並びにたり。宮内卿のよめるなり。○あふ坂や。逢坂にてはといふ如き意にて、且つ、語勢に感歎の意をこめたる詞づかひなり。○吹くからに。吹く故にといふ如き意なり。○嵐も霞む。むら〱と落花を吹きませたる山風のけしきを、かく形容していへるなり。

○一首の意は、逢坂にては、櫻の花を、嵐が吹き散らす故に、關の杉むらあたりは、むら〱と吹きませたる花ゆゑに、嵐までが霞みて見ゆるといふことにて、山風に紛々と亂れかゝる落花のさまなり。「嵐ぞ霞む」と形容したる手ぶり、前の良經公が「花になりゆく」といへると共に、古今の絶句とも稱すべし。此の歌、誠に花やかにして、しかも、れはきやかに壯んなる拔群の姿にて、千古に朽つべからざる名吟と稱すべし。

○

さゝ浪や志賀の都は荒れにしを
昔ながらの山櫻かな

○これは千載集の一の卷にありて、故郷花をよみたる歌なり。讀人は知らずと記しあれど、こは、平

忠度が都を落ちむとて、俊成卿の許をとひ、敕撰集もあらむに、一首なりとも載せられたしとて、云云とゞめたる歌の中なる一首なり。俊成卿が、此の千載集を撰びたまふや、平家は敕勘の身なれど、わざと名をいはずして、讀人知らずと記したまへるなり。○さゞ浪や。志賀の枕詞なり。もと、其のわたりの地名なりしより、うつりて枕詞となれるなり。やは嘆息の意をこめたる詞づかひなり。○志賀の都。近江の志賀なり。もと、天智天皇の都せられたることあれど、志賀の都といへるなり。○荒れにしを。荒れたるにといふ意なり。○昔ながら。昔のまゝなるといふ意にて、且つ、ながらに長良山をいひかけたる詞づかひなり。細にいふ時は、昔ながらの長良山の山櫻といふべきなり。○一首の意は、志賀の都は荒れはてたるに、長良の山の花は變はらずして、昔のまゝなるけしきであるワイとながめたる意なり。殊に心をこめたる所なくして、反て、限りなき感慨こもりて、えもいはず、身にしみてれぼゆる歌なり。

○

吹く風をなこその關と思へども
　道もせに散る山櫻かな

○これも、千載集の二の卷にありて、源義家が、陸奥にまかりける時、なこその關にて花のちりけるを見てよめるなり。○なこそ。關の名のなこそと、來る勿れの意とをいひかけたるなり。○道もせに。道も狹きまでにといふことにて、れびたゞしく花の散るけしきなり。

○一首の意は、こゝは吹く風を來る勿れといふ關なりと思へども、ふしぎなるかな、道もせまきま

でに、わびたゞしく山櫻が散るワイとながめらたへるにて、なこその關といふより巧みてよめるにて、さまでにすぐれたるにはわらねど、かく地名などよりいひかけてよむも、文章上の一種面白き技にて、殊に、此のなこその關のいひかけざま、自然に出でて、調もすなはに、殊に、武將の吟としては、面白けれどわげつ。

源氏物語講義 第一稿

下田義天類

本書を講義する目的は、本書記載の事項を明にし、合せて其の文法を講明して、以ちて高尚なる國文を書かむとするもの丶模範とせしめ、また普通國文を書かむとする者の準繩とせしめむとするにわり。紫式部が本書を書き記したる用意は、第一に朝權の衰微を挽回し、合せて藤氏の跋扈を抑へむとし。第二に文弱の極、閨門の漸漸亂れむとするを矯正し、かたはら婦女子の心得草とせむとしたるに有りしことは、先哲諸氏が此の書の註釋どもに、かへす〴〵辨し置かれたるがごとし。されど、其の第一の目的たりし、朝權の衰微と、藤氏の跋扈とは、今は昔の物語と成りにたれは、間接には當時の情態を知るべき一助とも成りぬ可けれど、今この書に付て其の邊の事を再演する必要もなかるべし。第二の目的たりし閨門の紊亂をいましめたると、かたはら婦女子の心得草とせむとしたるとは、今日の世にも猶多少の參考とすべきもののなきにしも非らざる可けれど、行文の間、往々猥褻に流れたる所もわりて、かへりて讀者を誤らしむる媒介と成りぬ可きもののなきに非ら

されど、完全なる教草とは云ひ難かるべし。此の書の精神、即著作者の用意と云ふものは、今詳にこれを說き明さむとする望みも甚薄弱なるものに似たれども、其の文章の優美なる、用語の自在なる、思想の豐富なる、排列の巧妙なる事等に至りて、既に先覺者が、口を極めて稱揚したるが如く、古今の定論とも云ふ可きものなれど、國文の摸範としては、今世には云ふもさらなり、今後千載の後と雖も、捨難きものなるべし。これ、拙者が、今此の書を講義して、高尚なる國文を書かむとするもの〻摸範とせしめ、また普通國文を書かむとする者の準繩とせしめむとする所以なり。

この書に就きては、古來より、絕對的にこれを歡迎せむとする論者あり。また、絕對的にこれを擯斥せむとする論者もありて、兩者各氷炭相容れざる姿あり。これは、いづれも、餘りに一方に偏執したるものなり。その甚しきに至りては、まだ一回の通讀をも試みずして、猥りにこれを擯斥せむとする、いはゆる喰はずきらひの論者もあり。また一圖に、この書に讀み耽りて、猥りにこれを經典のごとくいひの〻しる、いはゆる惑溺論者もあり。これらは共に論ずるに足らざるものなれども、これは擯斥せむとする議論にも同意を表すべき點少からず。また、これを歡迎せむとする議論にも同意を表すべき點少からず。先第一に、此の書の講義を聞かる〻に付きては、この書は修身書に非らず、文學書なりといふ事を常に胸中に忘れざらむことを要す。

さて、また、この書は、女子の作なり。女子の文範とせむには、その儘にこれを學びてこよなきものなれども、男子の文範とせむとには、其の必なかるべ

からずといふことをも亦忘る可らず。この二事を能々心得て、さて後講究する時は、大きなる誤りは蓋なかる可きか。

或人のいはく、此の書女子の手になれるものなるが故に、女子の文範とせむには、その儘にこれを學びてよきものなれども、男子の文範とせむには、其の心せざる可らずといふ說は然かもあるべし。また、此の書は修身書に非らず、一部の文學書なりと云ふことも、あるひは然らむ。されど、文學書なりとて、風敎に害あらむものをは、成し得る限りはこれを避けたる方、敎育の上に完全なるべきか。この書さる嫌のあるものとすれど、これを避けて、他に完全なる書を求めたる方穩當にあらずや。凡國文の摸範とす可き物、猶他にあまた有りぬ可きを、好みて此の書の講說をなさむとするは、他に說れるかといへり。此の問ひ誠に一理あり。されど、わが國の文學書中、男女みなの中らひを說かざるものは、一部としてあることなし。たゞ、其の攻擊の聲の高からざるは、其の文辭の拙劣にて、世人の稱揚も少かりしが故に、其の聲の高からざるのみ。ひとり源氏の物語のみこの事あるにあらず、男女の戀情を序列せるを厭ひて、一切これを排除する時は、彼の三鏡のごとき、榮華物語のごとき、若くは空穗狹衣のごとき、皆以ちてこれを排除せざるべからず。かくのごとくして國文の摸範とすべきものを撰むとする時は、遂には一部も得難きに到るべし。彼にゆるしてこれに許さゝるものは、所謂はずきらひの論者の徒のみ。この書一方にその攻擊の聲喧々たるものは辭文の微妙にして、世人の喝采高かりしが故のみ。最、わが國、中世には、この書を稱揚して、一部の經典の

ごとくもてはやしたるが故に、朝野この書の講讀に耽りて、其の弊害或は世道を亂し、人心を弱めたるが如き痕跡もなきにあらねど、これらは必竟この書の罪にあらず。この書をよみひがめたるもの丶罪なり。讀み僻めたるもの丶罪を以ちて、此の書を罰せむとするは、猶彼の燒傷に懲りて羹物を癈せむとするものに異ならざるべし。それも、他に喉を潤す可きものあらむ、燒傷の恐あらむ羹物は、成る可くこれを近付けざる方の安全なるには如かざる可けれど、我が國文中には、前にも云ひしごとく、この書のたぐひより外は、社會百端の事情を微細に記したる書は、絶えてあらざるをいかゞはせむ。これまことに止むことを得ざるよりのしわざなり。

(以下次號)



漫録

眞龍院君(鷹司公御息女加賀金龍院公御内室)御道の記(つゞき)

金子みどり寄贈

十六日　空も心地よげに晴渡るに、今日や領國に入ぬらんと、從ふかぎり打ゑまひて、いさみたちて、眀はなる丶をまち佗び、卯の刻過る頃出立ち、姫川の邊りにいたりぬ。海路につゞく大川なれど、水いとふかう波あらかなれど、風靜にて名にも似ず、船を綱もて渡すといふ、河端いと賑へり。

名にも似ず水すさまじき姫川や

　　　　　綱手ゆたかにわたす船人

須磨遠海などたどり行に、鹽燒の家居數たあれど、けふの見るめにすつらひしつるもいと詫しくればね侍りて、

　かり初の浪のみるめをそへよとや
　　　かきわつめにし浦の捨くさ

濱邊に船のあまた行しを見て、

　いさり船はすかと見ねて白浪の
　　　遠き磯邊に立つゝくかけ

青海に晝の休らひしつ、猶海邊を行に、かたへは山岳峨々として、けうとき事言もさらなり、巖の上より丈餘の瀧落る。これなん落水といふを聞て、

　名もに似ぬ瀧の姿をいつよりか
　　　落る水とは誰名づけけん

どれもひつゝけ行に、長はしり、駒返り、などして實に越しがたき所々なれど、波除とやらん海際に人もあまた並居る、ことに波風も靜なれど、いく歸り行かふ人の、今日の如く海づらのなぎたるはあるまじなど言かへる儘に戯に所の名を寄せて、

　長はしり駒かへりこそ爰ならめ
　　　實立岩は出さきなりけり

爰にもすむし休らひて、猶行末も右は峨々たる巖窟れはひ、左は滄海漫々として荒磯岩濱の眞砂の數々かぞへは盡し、中にも親不知とて、越路の難所と人の言あへるに、海の面なぎたれど、何方やらんと爰かしこみるまに、彼の波除の人多くつどへる所あり爰ならんとれもふに折しも浪いと靜なれたうれしくて、

　聞つとふあら磯岩の波の聲
　　　たねて靜に見ゆるうな原

沖つ浪かけし磯邊の巖さへ
見るめそへたる旅ぞたのしき

市振に休らひ、關路越行に猶濱邊なり、佐渡能登珠洲の御崎見えて絶景なり。しぜし海つらを余所に見て、山の麓を行に上なるはわけろの山といふぞ聞侍りて、

秋風の聲をわけろの山高み
生しげりそふまつすぎのかげ

夕つがた越後越中の境川にいたりぬ。

岩波の音さへ高き境川
かりそめながらわたす板ぞし

此河水早く、石高ふして船も通ひがたし、常はかちわたりなれど、爰より領し給ふ國なれど板ぞし掛渡しなどして、武士どもあまた並居つゝ先追聲もいかめしく心地よし、暫く行程に堺の關あり、いと嚴重の固めなり。旅屋に休らふに、困もくつろぎ、嬉しさいふ斗なく、從ふ限りも怡ひあへり。爰かしこ詠むるに、木々の緑もそふる心地して、

常住の松の木立もすなほなる
かげふみ初し國ぞゆたけき

爰より右は鹽濱眞砂地、左は山岳いと類なうして漁船もあまた浮べり。

詠めやる限りやいつこ白浪の
沖に數そふあまのつりふね

鷗のあまたゐるを見て、

越の海やみるめ塁らぬ浦波に
なれる鷗の立居隙なき

分行まゝに千町田の稲のいとよくみのりしを、

稲むしろ敷かさねつゝ海山に
つゝく詠めのあきの千町田

申の半過る頃泊の驛に着ぬ。けふは名にしれし山の下の難所も越來にし歡もいと取添へて賀しあへり。

長在他鄕意不休　今宵初入國郡中
好兼侍臣廻杯酒　乘興題詩暑歲器

れさまれる越の中山ふみ初て
心ゆたかに廻るさかつき

幾千たび酌かはしぬるに此宿のあるじいと風雅なるものにて、まめだちつかへぬ、さて家立も古めかしく、茶室も此方彼方にしつらひ、古より傳へし珍器などかざり、露地もよし有げなれど、旅のやつれも打忘れつゝ、れもとゝもをそゝのかし、茶遊に時をうつし、子の皷に驚き打臥し侍りぬ。一夜かり寐のやどながら、名殘盡せず、再び茶室など見めぐり侍りて、

採返しよりくることもかた糸の
いとをしまれてやどや立うき

かくれもひつゝけ立出行に、幾むら／＼曠々たる野邊折しも秋の半なれど稻葉の雲の風に靡く心地よげなるに、

豐年のたのみも深き時ぞとや
稻の穗なみのこがね色そふ

橫山川見渡し廣く美景いはんかたなし、

河つらや見渡す末もはる／＼と
眞砂につゝく水のしらなみ

れもひつゝけ行まゝに、雨ふり出しぬれど旅の粧ひ見んとて諸人袖をつどへり、入膳にやすらひ出行に、黑部川とて大河あり、四十八瀨の渡りと言、右は河邊近く左は大山なり、流れ出る水なれど水いと早し、數十艘の舟橋かけ渡す、

四十餘り八つ瀨の波も此國の

恵みにかけてわたる舟はし

雨のうちの眺めながらゝにもいへぬ

黒部川原の四方の見わたし

沓掛村袋村など左右に松並びて眺望類ひなし、三日市に晝の休らひし、幾村里を分行つゝふせ川に至りぬ。

舟橋をかけてそいたる河つらや

菅の小笠は波にひたして

夕つかた雨もそほふれど、片貝川ふな橋かくれどわやふげふなく打渡り、未半過る頃魚津の旅屋に着ぬ。此宿りは海への見渡したぐひなけれど、やゝ打詠め、盃など廻らし、興をやり、夜もふけぬれど、當所在番の武士共嚴重に打守れり。いと心易く思ひ、打解け休らひ侍りぬ。

十八日　けふけ道の程近ければ、見渡しの浦にて網引見んとて催し侍るに、きのふの雨の名殘もなく、海の面晴渡り、波靜なるに船をうかべ、磯邊にをのこどもの打つとふもをかし

此浦の波しつかるなる朝まだき

あみ引海士の聲いさむなり

うろくづのあまた網にかゝりしを見て、老たるも若きも打興じぬるに時も移りぬ。爰にて晝の餉たうへ、午の皷かぞへて立出ぬ。野路濱邊行程に、早川といふ河の面いと廣し、船橋かゝる

よる波もはや月川の名に高く

幾瀬わたりの末ぞ遥けき

猶村つゞき湊田など分行末ゝ限りしられず、稻の穂波秋風に靡き、又苅あげしもいとゆたかなり。

千々の秋言葉の種はすきじ猶

越のたつらの廣きながめに

苅わけて所々にはし渡す
たいみに深き越の千町田

滑川はいと廣き驛なれはと近頃の火災にて休らひがたく打過侍りぬ。此川舟入とて賑はへりに、かもの宮河橋あり、打渡り行程に、社頭に神樂の聲たふとく聞ゆれな、

旅衣ぬさも取のへずすゝしめの
聲を手向の加茂の神垣

行過るもれそれみふれど、心に額づきて打通りぬ。東水橋に暫し休らひて河橋に至りぬ。例の舟どし數十艘かゝる、

岡崎村といふを過行に、風に靡く湖を見て、

旅人の道の行手の糸湖
たちとまれとやまねくわきかせ

此はとりより立山見ゆ、

白雲も絶々はれて彌高き
光りを見する雪の立山

高麗野といふに千種の花咲みだれたるを、

こまのなる野邊は錦のいく千種
織かさねにし花の百草

東岩瀬の旅屋へ申の刻に着侍りぬ。庭上には木高き松數本生ぜげり、外面は河波いと廣し、夕日の影のうつろふもいはん方なき旅屋なり。

水の面に入日の影のさし添て
みどりを波の松のむら立

夜もすがら漁火の影見ゆ、

暮るより曉かけていさり船
こぎ浮べたるわきの川なみ

すなどりし魚の數々見ゆるも珍らし、

雨夜燈

扶草禰麻呂

秋雨の夜半に寒燈を剪て古き物語を書集めぬれば、是なん雨夜の燈とはいふべき。

(一)佐文山戯書　近世奇跡考

佐々木氏名は襲、字は淵龍、文山と號し墨花堂と稱す。俗稱百助玄龍の弟なり。西の窪に住す。志風流に厚く、兄玄龍とゝもに書を以て名高し、ゆゑに都鄙、神社佛閣の一遍額、背書を文山にもとむ。性甚酒を好み、酔口筆をふるへは殊に絶妙なり。世に酔龍の後身と云。榎本其角は玄龍に書を學ぶ、故に文山もしたしく酒友と交りふかし。一日文山富家の主人一說一紀文云およひ其角と花街に遊び酒たけなはなる時、揚屋の主人文山の書名高きを知りて、春山櫻花を畫ける屏風を出して賛辭を乞、文山筆をとりて、此所小便無用と書す。主人これを見て頗不興の色あり。其角筆をとり、これにつぎて、花の山と書。つひに俳諧の一句となる。

此所小便無用花の山

主人大に喜び、つひに家寶とす。其頃わづま童の口さかなきが、此所小便無用佐文山とたはぶれいひけるとぞ。

此事世に傳へて風流の話柄とす。文山享保十年乙卯五月七日病で沒す。享年七十七、芝増上寺塔中淨蓮院に葬る。

(二)紀文傳

紀伊國屋文左衞門は材木問屋を家業として世にきこえし豪家なり。性活氣にして、常に花街雜劇に遊び

て任俠をこと丶し、千金をなげうちて快しとす。故に時の人紀文大盡と稱して嫖名一時に高し。寛永の頃まで本八町堀三丁目すべて一町紀文の居宅なり。毎日定りて疊さし七人づ丶來りて疊をさす。こは客をむかふる度にあたらしき疊を表きかへたるゆゑとぞ。此一事をもつて、その豪家たるを知るべし。其頃紀文が家に出入せし疊屋の子孫、今猶本八丁堀二丁目にありて此事をかたりしとぞ。又一時揚屋町泉屋半四郎がもとにて、舛に小粒金を入て散きあたへしと云傳ふ。正徳の頃家おとろへ、剃髪して深川八幡一の鳥居の邊に住しが、享保十九年四月廿四日其宅においてて身まかりぬ。深川靈巖寺搭中淨等院に葬る。法名を歸性融相と云。

紀文俳諧を其角に學び千山と稱す。

【菊のちり】三德の摺も御無事で裏の菊　千山

【香非時】に其角一周忌に紀文が手向の句あり

黑方や年は經れども朧月　同

(三)阿州祖谷山の住

阿佐只之助成立

壽永元年初秋の頃、平氏悉く都を落、一ノ谷備中の水島、鴨越、播磨の室山合戰以來、讃岐八島に內裏を定めけり。元暦二年初春の比、源義經馳向ひ、同高松の庄より寄せ、八島の城に火をかけ丶り。平氏內裏を燒れ、皆船に乘り、八島の沖に漕退き戰ひせしより、同く志度浦に渡り、暫くやすらひける所、源氏八十余騎志度へ追懸る、平氏是を見て、源氏は小勢なり、中に取籠て討やとて、千余人汀に上り、我討取んと進みける所、八島に殘り留りたる門脇平中納言教盛の二男越後守平國盛何としてかは舟に漏させけん、二百余騎の勢にて八島より後れ馳せに

馳せ來る。平氏是を見て、おはや源氏大勢續きたるは何十萬か有ん、取てめられては叶はす迚、皆船に乘引退き、元暦二年三月下旬の比平氏の船幾そくの勢とも、豐前の國田浦、門司か關、長門の國檀の浦、赤間か關にて源平□處平氏危く思ひけん、門脇平中納言教盛、修理大夫經盛、小松新三位中將助盛、新中納言知盛、能登守教經、當坐の侍是皆入水し訖。又爰に内大臣宗盛、平大納言時忠、右衛門頭清宗、内藏正信基、讃岐中將時實、大臣殿父子、兵部少輔雅明、二位僧都専親、法勝寺能口、中納言律師忠快、阿闍梨融圓、其外の士、元暦二年の春の暮、東夷西戎の手に隨分下、卿相數萬の軍旅にとらはれて舊里へ歸りけん。扨門脇越後守國盛、二百余騎の勢にて志渡に馳向ふ。源氏八十余騎志に撫へ、互に勝原を决せんと戰ひける所に、源氏も數多討れけれとも、平氏の勢百騎計り船には乘後れ、國盛危くや思ひけん、讃岐の白鳥へ引移り、其より水石庄に渡り暫く經、月阿陽大山越、元暦二年極月下旬、金丸稻持庄、并に井川、井内を打越へ、月晦日祖丹大枝岩屋に引籠り、其夜越年、俄事なれど松を間めあらそこそ、檜の枝を門松に飾らせ、明る元日早天に大枝名主打破り其家に引籠り年月を經れども、以後同谷阿佐の庄へ引移る。承元二年卯月十日崩死、法名定福寺殿前越州從四位歸眞順照尊儀と號す。即ち阿佐庄定福寺にて葬す。

天文頃、細川讃岐守持隆、阿波板東郡勝端に在城せり。假名御屋形とも號す。家臣三好筑前守之長、持隆嫉を請け、筑前守は則三好の庄に在城しける所に、持隆より備中の國の住人高橋孫六を大將にて三百騎ばかりして馳向ひ、筑前守は美馬三好を守護し

けれど、隣江足代の城主足代肥前守、白地の城主大西角簽、金丸の城主阿佐紀伊守、同與力の侍久米形馬、加藤主水家臣貞廣、肥後三木六之亟、山口の城主篠原三河守、稲持の城主青野道意、此人々兼て筑前守守護するに依て、三好の城へ詰、互に勝負決せんと戰ふ所に、寄手二百騎計り討れ、三好勢百八十騎計り討れ、續く勢大勢なれど筑前守叶はずとや思ひけん、阿佐紀伊守に防矢射させ、金丸の奥小高山下まで落行ける所に、高橋多勢にて追ひかけ、筑前守已に危く見ゆる處、阿佐が郎等下瀬出雲弓の名人たり、阿佐紀伊守の下知を受け、栗枝の渡し福留が矢を借り受、十三束三ッふせ引て兵と放つ、備中高橋が肝のたぞねを射落す、其外の軍勢指詰、引つめ射落しければ、殘る續勢是をみて、東西へ颯と引にけり。其際に筑前守を阿佐紀伊守が守護し、祖谷阿佐の庄に引籠り、三年阿佐にて年月を送り、天文二十一壬子七月末に筑後守土佐勢を催し、幷に阿佐一門の軍勢都合八百騎計にて南方上郡口二手に分け、○○勝端城へ押かけ戰ひける所に、持隆叶はずとや思ひけん、同八月廿九日板東郡見性寺に落て自害し給ふ。○○筑前守之長則ち勝端城へ押入り、國家を守護す、富岡の城主、其外隣國の司皆之長に隨はんと云ふことなし。扨阿佐紀伊守には其時之長恩賞として稲持、半田、北山三ヶ庄拜領、郎等下瀬出雲には三好郡高野原にて七十貫被遣る

人は雪我は花身に　ころぶまで　　某名

浮世いかた舟（續）

作者不詳

鳫鴨の稻をくらふなんぎの事

今はむかし、あるとき、主君の仰に、鳫は、おもしろき物也。いきながらとりよせて庭にかひ置べしと有けれど、代官に仰せて百姓にとらせらるゝに、其のまゝ取て奉りぬ。はやく取て參せたる事神妙也。やがて年貢をも、未進なく皆濟すべしとの御事なり。浮世坊申けるは、ねんぐの事はがんかもにはからせらるべし。其のゆゑは、わせおくての穗並いづるより、北風にさそはれて、がんかもみなみにかけり、田におりていねをくらふ事いふばかりなし。百姓共はめいわくがりて、おひたてんとすれど、御たかゞりのためとて、所々に鳥見をおかれ、くわせんをかけてとらるゝゆゑに、追ひたつる事もならず、追ねど稻を一夜のうちにみなくらひつくす、さるほどに、百姓共は、此鳫を代官のごとく、地頭のごとくおそろしがりて、田のわせにたゝずみ、血のなみだと共に、いかにお鳫さま、おたちなされて給はれ、さやうにいねをあがりては、我等は水籠にかくるゝか、妻子を沽却いたすにといへ共、ひたくらひにくらふほどに、一畝二畝は今の間にわらばかりになす。是をかりとる田のかなしさ、思ひやるもあはれ也。さらばとて、主君よりその宥免もなく、こぎ取ねぢとり、とりあげてたらぬ所をみしんになし給ふ。しかるに、某思ふには、御鷹狩も、いにしへより三國にわたりてある事なれど、とゞめられよと申にはあらず、たゞしむかしのたかゞりは、國主みづからその民百姓のよしあしを見そなはし、政道たゞしくせんがため也。けだもの狩もかくのごとし、今のたかゞりしゝがり

を、たゞなぐさみのためあそびのためにして、田共いはず、はたけ共いはず、とりをだにとりぬれば、ふみたをしをしふせて、でんばたをそこなふ事、百姓のためには、いくばくうらめしかるらん。其の御ためとて、とり見を、田をくらふ雁鴨を追たつる事をもさせねば年貢はとかくがんかもにはからさせ玉へ。むかし、もろこしの晋といふ國の大王、がんをおもしろがりて、おほく飼せらるゝに、糠を餌にあたへらる、糠すでにみなに成しかば、市に行て買もとむ、後には米とぬかとのねだんおなじ物になる。臣下申やう、米と糠とのねだんおなじきならば、ぬかをもとめず共、すぐに米をくはせよと申されしを、君仰けるは、米は人の食物也。ぬかを食することかなはず。がんはぬかをくらふことなれば、米と糠とおなじねだんなり共、米にかへて雁にあたへよ、百姓のためよき事なりと仰られし。米をいだしてぬかにかへしかば、國中にぎはひてよろこびけり。是を思ふに、國主のこのみ玉ふ物あり共、國家のためにつひゑならず、百姓のいたみうれひにならざるをこそ、仁政共いふべけれ。わがおもしろきあそびのため、人をいたむる政はよき事にあらずと申ければ、主君大に感心有て、その年の免ゆるく、未進をもゆるされたり。

萬事心得ちがひの事

今はむかし、うき世坊未明におきあがり、目をする〱門外に立いでたれば、歩わかとう一人そばに立よりていひけるやう、それがしは、はるかに遠國かたの者なるが、主君の御用として都がたへのぼり侍る、その道すぢ無案内に侍る、をしへて給はれといふ。浮世坊聞て、是より京橋に出で、てのゐ森口を

さしすき、佐田のみやを右に見て、ひら潟はしもとうちこゆれど、淀のわたりも程ちかし、水のよこれち鳥羽をこゑ、戀塚も右に有、城南寺もこゝなれや、秋の山を過行ど、東寺口に出る也、それより左に行どかつら川にさしかゝり、山崎たから寺のかたにゆく、右にゆけは都大宮のすそ也、それを北にのぼれは、すなはち京のまんなかに出るといふ。わかとう大によろこびて、ねんころにをしへ給ふかな、是にてはまがふ事有まじ、論語に、朝に道をきいて、夕に死す共可也といへるは此事なるべしといふ。うき世坊こたへていはく、されどこそ、中庸に、道は須臾もはなるべからず、はなるべきは道にあらすと侍べり、かまへて京がいたうは、是より糸を引たるごとくにすぐなる道也、わき道へゆかせ給ふな、それがしのをしへ侍る道をはなれ給はゞ、是道にあらずといへど、わかとうはかしこまり侍るとてわかれぬ。

さる物しりたち、論語中庸のかたはらを、心得ちがへてれはゐられしも、かたはらいたしといへど、そどなる人のいはく、論語中庸の道は仁義の道也、人のゆきかふ道にはあらずと心得られたり、人の行ふ道のごとく、仁義をはなれては、人は身をはたらきうごかすべからず、此ゆゑに、仁義をも道とはいふ也、さだまれる道をすてゝ、よこしまなる道にゆけど、まことの心ざす所へゆきつかぬごとく、五常の道すぢをわすれてよこしまなるをこなひにれちいれは、聖賢の所をうしなふ。爰を以思ふに、此文を引たるがあやまりにはなるまじ、それより、あやまりて心得たる事有。れのれにしかさる者を友とする事なかれといふ文を聞ては、我よりまさりてよき人にともなはんとして、れのれよりした目なるものにはま

じらはず、かへつてればへい緩怠をいたす。又とんでれざる事なかれといふ事をればなては、金錢たくさんにもちながら、石かわらのごとくつみをきて、つかふすべをもしらず、無性にきたなく、しはき田夫となりはつるやから有といふ、所へ家老衆たち出給ひ、れの〳〵かやうに門たちして、萬事無奉公の談合めさるゝかとねめつけられ、浮世坊小ごゑになりていふやう、かまへてめん〳〵はらたち給ふな、論語に、人しらず、しかるゝいからずといへり。いか程しかられても、はらをたてぬが道ぢやといへど、それ〳〵といふてはいりけり。

才くらべ（廿一）

蓬生屋女史

渡小右衛門の頓才

文化四年丁卯八月十九日の事なり、深川八幡祭禮の日、朝四つ、今の十時頃にやわらん、貴重の御船、永代橋の下を通るとの事、さらでも物見高き都人の習ひ、殊に珍らしき祭禮も時刻も十時頃、人の出る盛り、千家、萬戸、老幼、男女、をしあひ、へしあひて、見物に出づるもの、皆永代橋へとかゝるに、番人、繩を橋のきはにひきはへて、よせくる人をとゞむる事半時ばかり、待ちくたびれたる頃、それ通れとて、繩を引くを見て、數萬の人、我れ先きにとかけ通る足力、体の重み、數萬斤の物をまろばすが如くなりしに、なにかはね堪へん、永代の名も空しく、橋の眞中より深川の方へ三間ばかりくづれおちし



に、忽ち数百の人、一度に入水し、前なるものこそあはやと見れど、後ろなるは、是を知らず、只はやく渡らんものとなほれし／＼押し行けど、前なるものは、退くに由なく、重なり／＼て水に落ち溺死するもの、忽ち千人にもあまりけるを、遠きはなほ知らず推しあひけり。此の時一人の武士、腰なる太刀抜きて、高くひらめかしけるに、あとなるも、之を見て、喧嘩はじまりて、刀をぬきあふと見て、皆恐れてあとへ逃げかへりけれど、此やら／＼道開きけり。あはれ、此の一刀にて多くの人をぞ助けけ

る。かくてぞ日本刀の鋭利、武士が拔くべき魂魄と今も世に傳へけると云ふ。其人は南町奉行組同心、渡小石衛門と云ふ者なりけりとぞ。

或醫師の妻女の才

むかし或る醫師の家に、妻女を娶れども〳〵、如何にしけん、皆居つかず、はては、人々うはさなすに、また其家に嫁がんとする人さへ絶えてなきばかりになりけるが、なほある家の娘を、娵せんとする人ありけり。親は之を聞きて、二もなく辭みけるを娘は聞きて、さるは何故に、さやうに妻女の居つかぬならんと問ふに、殿なる人、あまりに嫉妬深う、よるもの、さはるもの、皆疑ひて無き名をとらする困しさには堪へで、おゝは居つかぬなりとの事なりと聞くや、そはおもしろし、妾は、其人に嫁ぐべしとあるに、兩親は何事ぞとて再三止めたれど、女、ひたすら乞ふに、さらばとて、仕度をとゝのへ、日ならず其家に送りにたり。

此娘とつぎて日ならず、如何にかしけん、また〳〵離縁のさたあり。されど、今迄は妻女の方よりいとまをとるものゝみなるを、此度ばかりは、夫より去るにてありけり。そは何故ぞと云ふに、此妻嫉妬の心ふかく、診斷を乞ふもの毎に、あなやあやし、彼の女はをかしき眼して殿を見しよ、彼の若き女に、殿はあやしき目して顧みしよ、彼の女もあやし、此若もけしからぬ。さては夏すだき、秋風の吹き入りてすだれ動すも、そよよろこびぞ、誰がうらふく風ぞととがめ、曉近う、くだかけの聲はるかにたどろきても、たゞならぬ水鷄の叩き方やとばかりに恨み、嫉妬のさぎりむらだつに、秋風は立つにもあらねど、夫はたゞうるさくうつとうしく、はては去らんとす

るに、妻女はおどろき、こは〳〵何故の離縁ぞと問ひかこつに、されむなり。嫉妬は七去の中のおもなるものならずや、汝の如くにうらみ疑ひては我が命もつゞかずと云はせけるに、妻女は形を正し、妾、實は、嫁がんとする前、君が嫉妬の御心のあるよしを聞き侍り、素より人言信じまつるにも侍らねど、女心の淺くも萬一の事もと思ひまゐらして、只今迄心にもなく、わざど御恨み申しき、殿が御心に何とか思すらんと、ひき奉りし物体なさ、只今よりは必ずつゝしみ申すべしとあるに、夫も感ずる所やありけん、そのまゝ去らんともせずそひけるが、後は兩人とも、また嫉妬の心なく、いとむつまじう世を送りけるとなり。

笠子笑談集

金津常十郎

人相書

楚國の王、人相書を國中に令して曰、眉高く眼中光あり、鼻準頭、四字口、耳魚尾を過ぎ、威有て猛からざる人もし爰に至らむ、早速に報ずべし。是、則魯國の聖人孔夫子なりと。扨て又ある日、陽虎といふ大惡人、楚の國を過ぐ、國人、先に王より令する處の人相書に違はざるゆゑ、其旨國王に告ぐ、王則幣を厚ふし禮を卑ふして、大夫二人を使とし、往て國政を任せん事を請ふ、爰に於て、陽虎其大夫二人を殺し、幣を奪て夜中に逃去て、終に其行方をしらず。陳國の王是を傳へ聞て國中に令して曰、眉高く眼中光あり、鼻準頭、四字口、耳魚尾を過、威有て猛からざるもの來らむ、すみやかに殺すべし。是惡

人陽虎なり、恐らくは害あらんと。此時孔子陳蔡の際を過ぎ給ふ、陳國の民、其王の令する處の人相に同じきゆゑ、大勢孔子をかこみて殺さんとす。ある日孔子琴を彈じ給ふ。圍む人是を聞て謝して曰、我ら皆惡人の陽虎なりと思ひしが、誠に子は聖人なりといひて、圍を解て去る。

註に曰、此段は、人の容貌を以て目利しがたきを云。相法の書に曰、眉高きは貴相、眼光四方を射るは貴相、耳魚尾を過るは貴相、鼻間滿準頭なるは貴相、口四の字の如きは貴相、此魚尾と云は即眼尻のことなり。威有て猛からず是皆聖人の相なり、然りと雖ども、孔子は聖人、陽虎は惡人なり。孔子と陽虎と容貌相似たることと是實事。又孔子を陽虎と思ひて、陳蔡の間に圍みしことと是亦實事なり。人皆其平生の言行を以てせざれば、善惡はしれざるなり。陽虎は大夫を害し、幣を奪て後惡人と知り、孔子は圍みの内に在て、悠然として琴を彈じて天命を期つ。人見て聖人なることを知る。諺に、馬には乘て見よ、人には添て見よ。と。是なり、聖人と惡人との異はあれども、容貌は相同じ、是を以て見れば、世人碌碌の相者を賴みて、漫りに金錢を費し、身の吉凶を問ふは危哉。石をいだいて深淵に臨み、薄き氷を踏むが如し。

異性

草中に猫居て青蝦蟆を喰ふ。側に犬在て問ていふ、貴殿其虫を何の効有てくひ給ふやと。猫が曰、我この比病つようして活がたし、ゆゑに是をくらへば病を去り命を助かる妙藥なりと。犬是を聞て甚よろこび、友の病犬に右の話をいたしければ、いざやわれも食して、命を助からんと思ひ、草原を尋ね歩行き

やう／＼一疋探しあたりて喰ひけるが、其犬たちどころに死す。

註に曰、萬物性質何れも異にして、一定ならず。故に毒も毒ならず、藥も藥ならず、猫に藥なるも犬には毒となり、人に藥なるも蟲には毒となる。又人同士にても、性質皆同じからず。下戸あり上戸あり、亦藝能にも然り、吾能する處にて人の能せざることあり、人の能することも吾能せざることあり。本文のたとへ、世俗一概の心を開きて廣くせんことを欲するなり。古語に曰、不レ可下以二己之所一レ能而責中人之不上レ能。不レ可下以二己之所一レ長而責中人之所上レ短と、人も長ずる所あり、吾も短なる所あり、是皆人の上につきて謂ふなり。又曰、天覆不レ能レ載地載不レ能レ覆。と、天地すらかくの如し、況んや人に於てをや。

結髪

白魚女史

第三回

さつとひとしきり庭の木枯のふきけたて、さや／＼とおとして、木の葉か、時雨か、ほと／＼と窓をうつ音高し。

やゝ栗がおちぬと、ねどこより寝まきのまゝにて飛び出でたるは春子の弟の次郎とて、まだいたづら盛りの少年なり。

今日の、坊樣のおはやきことは。それに引かへておあ姉さまのめづらしきわさい、まだ夢さへ見そなはしをらるゝやうなれど、戸も引きあけずに參りしほど。さるからに、雨もふるにやあらんと、たはぶれながら、いざ坊さまおめしをもかへられて、今日こそは

阿姉様を驚かして、上げあそばせと、物馴れたる下女の言葉にひかれて、衣ぬぎかゆる次郎、姉上を起しこむかとて椽に立ち出で、やがて目にかゝる鳥籠ひきおろせば、雀の兒の仆れ居るに、あら／＼僕はいやだ／＼、雀がしんだとなきまどふに、朝まだきより何をさやぐぞ。姉上のいつになくねておはた、さめぬやう靜にせよと、母親の制するに、でも雀が死んだものとむづかるを、何ぞ、雀が死にしと、さらば早う知れぬ處へ捨ておきね、姉上の起ぬ間に、もし死にしと知らば、姉上のさこそはあはれがるらめ、知らぬ間に捨てゝにがしやりしといへ。よき子よ、次郎は男なり、泣きなどするものかはと母親のすかすに、むづかり居りし次郎、いつしかおのがなげきも恨みも忘れて、とく雀のなきがらをかくさんとする折りふし春子が窓をひきあくるけはひに、次郎の思はずふりかへりて、あわてゝ走りゆくさまいとをかし。

母親はさすがにはゝ笑みしが、やがてまたうちよする眉、ほんに春子のやうにあまりに情ふかくても困りぬ。などあの子はあゝならむ。鳥につけ、虫につけてのなさけはよけれど、己が一生をも忘れて、おろかなるあの千太郎をあはれがりて妻にまでならんとするはあまりなり。こればかりはと泣きて止どむれど、母様の心をいたむるもかなしけれど、妾は戀しうて、なつかしうて、如何しても外にこゝろのうつらぬとは僞り、たゞ人なみならぬをあはれにおもひて工み云ふにやあらむ。父親がいつものやうに、嚴重に叱りこらしなば思ひかへすこともあらんに、娘の好むまゝにせよ、まして淺川は祖父の二つなき友達にはあり、春の好みなれば、愚なりとて、人並



ならじとて是非なきことど、あのやうな子には、このむまゝにさせんが親のなさけとて、日來にも似給はぬ御言葉、されど何とてあのかしこき子を、あのやうな人に、如何にしても人並ならぬあの千太郎などに、如何に祖父様の二つなき友なれどとてと、かきくれ、かきくどく母親の心は、いづれ子故のやみなるべし

第四回

さらぬだに露しげき今日此頃、時雨さへにふりそひたる朝の窓ひきあけしまゝ、力なげに軒の玉簾をつくづくとうち守る春子。如何にしても、如何にしても、今朝のゆめ、ゆめとは思はれじ、祖父様が枕のもとに立ち玉ひて春よゆるしてくれ、いたうなげきをかくるよ、嘸祖父が憎くからむ。祖父も祖父が憎くし、其方の袖の乾かぬを見ても、祖父の草葉の蔭はひまなき露ぞ。のう春、とてもかくても此の祖父はやみに迷ふ餓鬼ぞ、義理も信も用なき身なり、其方は生ひ先きある花の少女、祖父が最期のくり言につながれてよしなき義理に一生の花な散らしそ、何事も母の云ふ如くになれよとて、やせおとろへし御手に、我が春を撫で給ひて、よは／＼と出でゆき給ひたる御姿、今もまのあたりに見ゆるやう覺ゆなり。曉のゆめにはまことのありとかきけど、誠に祖父様のこされしにや、もしさらむ勿體なし、今日此頃のわが涙、妾が一生をかこつとおぼしてならむ。祖父様ゆめ妾はさやうなること思ひてにはあらず、昨日今日妾がうちかこつは、たゞ／＼教の師が妾をあさましう、うぬぼれの奴とおとしめ給ひしならむと思ひて、それがかなしさに泣きまどひしなり、はんに、彼の時、へだゝらむよかりきどうして、やー、

妾は、など人の如くうちとけられぬならむ。祖父さま、決して、自らは、祖父様を恨みまゐらせしにはあらず、いかで〳〵此の身こそはうるさきゆかりの色もたる身と生ひ出でゝ、御身を人知れずくるしめ奉りし、なくなられても草葉の蔭に、御袖をぬらしまつるかなしさ、勿體なさ、何とわび奉らむ道も言の葉もあらじな。のう祖父様、妾と千太郎様とのゑにしは、祖父様の結ばせしにはなく、自らがさやうのゆかりに生ひ立ちしは、まだ自らが生ひ出でぬ間に、もしも行末御子息に嫁御をとられて、女子の御孫をもうけられなば、今年生ひの我が孫の若竹と千代結ばせ給はゞ、黄泉の下の心も嬉しうなんと仰せられし淺川の祖父様の最後の御言葉、ゆかりなきものならば、妾は此方には生ひ出でまじ。何の祖父様の罪ならむ。妾が罪、祖父様を人知れずくるしめし妾が不孝、妾がたゞゆかりあるやう覺えて戀ひしとのみいひて、お約束のありし事を母様に包みまゐらするは、親をなかせまじと思ひてばかりにも侍らず、たゞ祖父様の、十八年此方忍び給ひたる御心をつがむとするのみ。のう祖父様よと、ひとりもらぬ時雨にぬれまどふ折りふし、人の來る足音、母親かといそぎ涙を收むれど、母にはあらで下女のお鶴の郵便もて來るにてありけり。是れは師のもとより、手紙にて、昨日今日いたつきも全く忘れ果てたり。不德をいとはずば、いつよりにても來られよ。明日は午前にても宅に居りぬとあるに、春子はうれしく、にはかにうれひの眉ひらきたるも不思議。下女あやしみて、それほどまでに先生がおなつかしうございますか、先生もいたうお顔がよくて、學問が出來て、そして發明なお方なさうでといへば、思はず顔を紅う

去たりしが、春子、みな何を云ふ鶴。けしからぬ物の云ひさまや、さやうなるうきたるげなる事な云ひそ、たゞ先生は數ならぬ此身を、妹の如く、娘の如く、心より深くやさしく、誠の學問の道を敎へ導かるれど、己れも二つなき師の君とたのみて、なつかしうするのみ、まして兼て人に聞しに、先生には何處にか結び給ひし人のあるよしにて、誰が薦むる縁談もことわりたまうときくものを、何の自ら如き數ならぬ身があやしからん。自らとて、さる事を聞きたれどこそ、かやうに心安く通ふなれ。口は禍の門とか。みだりにもの云ひてあらぬ名をとらするな、祖父様に對しまつりても、先生の結髪に對しまつりてもすまじと、まじめにのべながらも、何となう心はむせぶ如くなりけり。

文林



岡梅　徳大寺實則

春かすみにほふゆふ日の岡のへに
うすくれなゐの梅さきにけり

花宴　久我建通

さかつきに散くる花の木のもとに
心もうきてあそふはるかな

夕蛙　長谷信篤

夕月のかけおほろなるいけみつに
そこともわかかすかはつ鳴なり

暮山花　長岡護美

ゆふ日さすはなの梢はみえなから
霞にくるゝはるのとはやま

朝春雨　前田利鬯

天の戸の明てもあけぬこゝちして
はるさめくらき朝ぼらけかな

垣春草　高崎正風

なか〳〵に雲かきよせし垣根より
もえいでにけり春のわかくさ

春海　宮地巖夫

立こめしかすみのはてに出る日の
ひかりのどけき春のうなばら

故郷山吹　北郷久政

ふるさとのあれし垣根に咲にけり
昔ながらのやまぶきのはな

春舟　阪正臣

いそ山の花の木のまにうちかすみ
行ともくともわかぬふねかな

土筆　植松有經

我やどのかきのうちまで里の子が
つみつくしたるつくづくし哉

苗代　遠山英一

つばくらめ軒ばに通ふかげみえて
苗しろみづのそこすみにけり

駐橋夕照　小出粲

こまどめの橋の夕日はさしながら
木かげくれゆくうしごめの里

重野博士の七十の賀に　大畑弘國

武藏野によはひもたかきひとつ松
道のしをりとなりにけるかな

豐太閤　三輪義方

わゆちだにこの玉苗のひいでしも
瑞穗のくにのほまれならずや

金　下田義天類

くちなしの色と見えても世の中に
　ものいふものは黄金なりけり

玉　仝

夜ひかる玉のちからも世のひとの
　心のやみはてらしかねてき

友なる某熱海に居てつれ／＼なれば來よといひおこせたるに到ればやたへかねて歸りつといふおとにてよみおくりけり

五十嵐徳文

來て見れは古巣なりけり鳥ならは
　君はうくひすわれはと〻きす

温泉をあみて

ゆあみせしすか／＼しさは現見の
　身を經ふるまに忘れざらまし

かへるとて

今日よりは熱海のうみのたきつ波
　たちかへりつ〻幾たひも來ん

觀花　渡邊光風

けふもまた小ふねうかへて隅田川
　なかきつ〻みの花をこそ見れ

桃　足立正枝

うちかへす山はたつ〻き春見えて
　ことしも桃のはな咲きにけり

名所松　荒波直方

高砂のをのへにいくよしけりあふ
　松のすかたはあかぬなりけり

初花　伊藤純三

としことに咲くとはすれと櫻ぞな
　こ〻ろつくして春はなかめん

梅花浮水　　伊藤祐賢

うめのはな浮きてながるゝ玉川の
水のゆくへはにほひてぞすれ

寄花懐舊　　石原均

ともに見し昔のひとのおもかけも
さやかににほふはなのしら雲

奠都三十年祭　　安齋篤敬

三十年をことほぐ春のわさひかけ
くもらぬ御代を空にしるかな

河水流清　　木庭芳香

かつらかはつきの雫のなこりにや
なかれの末もにこらさりけん

花みありきて　　蜂須賀隨子

咲つゝくのへよりやまに分いりて
はな見歩きのはてそしられぬ

野遊　　柳原愛子

わらびをり菫つむまにくれにけり
野へは日かけやみしかゝる蘭

雨後花　　小池道子

春雨ははれにけらしなおほろよの
つきこそ匂へはなのこすゑに

行路落花　　北島以登子

まかね路をはしる車のまどのとに
花ちりかゝるゐなかはのさと

春天　　松平健子

打かすみのどけかりけり此ころの
そらのくせなる花くもりして

豊公　　税所敦子

もろこしのあるじとなりて大君に
つかへんといひし心たかしも

河落花　南郷柳子

河みつになかるゝ花をくみわけて
くれゆく春のかたみとも見ん

遠山霞　中牟田常子

うす墨にゑかけることく見ゆる哉
霞のうちのをちのやまやま

里春月　原田蒼生子

まはらなる里の家居のかすたにも
讀れぬまてにかすむつきかな

望遠帆　大谷籌子

利田の原はかけ遙かにみえそめつ
わかまつ船やかへりきぬらん

池蛙　小川直子

ちる花のうきてたゝよふ池の面に
跡さへみえてゆくかはつかな

霞中月　土岐いく子

さく花もおほろにかすむ尾上より
にほひていつるはるの夜の月

盛花　遠山いね子

遠近のはなのさかりになりしより
まつちるものは心なりけり

雨中蛙　中島歌子

春雨のふる田のつゝみよるゆけは
くつるゝはかり蛙なくなり

寄花懷舊　高橋みよ子

植ゑおきしやへやま櫻ありなから
君ふるさとになきそかなしき

尋花　長谷川靜子

みちかへていつこたつねん白雲の
たなひく峯ははなかあらぬか

春雨夜話　　清水きく子

おきふしのまどの呉竹おともなく
　こゝろのどけく春雨のふる

籠中の鳥を見て　　藤井行麿

おのれ東京に在し時、浅草公園花屋敷の向ふに住めりしかば、徒然なるをり／＼はなやしきがりあそべるに、糸がねもて廣く高き伏籠を造りて、其中に枝さし、をかしき枯木を立てとまり木となし、下には清らなる眞砂をしきなどして、よきほどにしつらひ、亞細亞洲のものはさらなり、歐米濠洲のものまで、世に珍らしき小鳥をあまた放ち飼ひてあンなるを見れば、さも睦しげにをちかへり、餌ばみなどして飛びかふさま、いとおもしろく飽かざりければ、しば／＼ゆきてなつかしみ愛づるに、春の彌生四方に花咲く頃さかりつきて、巣をくみ、卵うむ時などまくばひするに、見るに、おのがしゝ其ともがらにあらざれば、雌雄のまじらひせず、夕つかたねぐら定むるも、おなじどち叢りて、猥りに入りまじらず、あめつちに備はる神ながらのさがをまもりてみさをたゞしきは、人よりもなか／＼に道あることゝちしてやさしうなん、さるをもの好みする人、鷄犬などあながちにかけ合せて雛をうましめ、其かたち本性にたがひたるを見て歡ぶやからもあり、如何なるしれこゝろか、さる人どもに、鶴燕など、雄鳥死にて雌鳥のみさをまもりし昔ものがたりなどすれば、未開の世のたはれ言と嘲り、耳にも止めず、今は開明のときなりとて、兎にも角にも外國ふりをうつして、改更せんとおもふ當世學者、代議士などの中にもありとか、なげかしうれたきことになん。老はれの寢言といひ

棄ん人も有べけれど、よその事のみ精しくて、おのが生れし國の事にうときは、いかにも口惜しき事故、言擧していはんとするに、からこゝ、から文字をまじへてものすれど、ことはやくなるべけれど、文のふりを改むるなり。見る人ゆるし給へ。

抑吾皇國は、萬世一系にして天照坐日大神の御孫命降臨ましくしより動なくしろしめす神國にして、世界萬邦にたぐひなき獨立國なれど、異邦の事をとりてうつすには、取捨せざれど、所謂杓子定規となりて合がたきこと多し。是則菅家遺誡にのたまへる和魂漢才、近世いふやまとこゝろ大和魂にして常住座臥一心をこれに定めて何事もなすべきなり。すめら大君の御系統のみならず、補佐の臣民もとこしなへに永續してかはることなし。されど、わが國は、太古より門地門葉を重みして尊むゆゑ、異邦の如く成り上りの國王にして、豹變する卑地とは反對せり。天神の詔命有りがたき國柄わするべからず。いまにみよ明治三十二年七月雑居の時いたりなど、中等以下の人はともあれ、中等以上の人は、筋目正しき結婚して、猫子鳥眼色毛髮かけ合の鷄犬にひとしき異様の子孫造りな出しそ。さてこそ大日本日高見の國の國人とはいふべけれ。はじめにいへりし如く、小島の雑居を見ておこりし感情とゞめがたくてかくなん。あなかしこ。



雜報

●大御惠　去月廿三日、府下本郷區に大火ありしを聞召し、罹災窮民御救恤として、畏くも、
天皇　皇后兩陛下より金六百圓を下し賜ふ。

●奠都三十年祝賀會　は、去る十日、宮城二重橋外に式場を設けて擧行せり。
天皇　皇后兩陛下には、德大寺侍從長以下扈從し奉りて御出門　式場に臨御あらせられ、玉座に着御あらせ給ふや會長子爵岡部長職、陛下に拜伏して頌德表を奉る、

奠都三十年祝賀會會長子爵臣岡部長職等頓首頓首
上表す欽で惟るに
天皇陛下
皇后陛下
德陰陽に配し
明日月に並び
大寶を承け鴻圖を弘む明治紀元江戸を陞せて東京と爲し翌年鑾輿東幸其後
皇城新に成り
丹闕空に聳ゆ此に靈瑞を呈す今茲戊戌實に三十年の佳期に遇ひ四月清和謹んで萬歲の
聖運を祝す
陛下幸に衆庶の情願を容れ辱く
臨御の恩命を賜ふ臣等恭く
九重の至尊を二重橋に奉迎し一代の盛典を千代田に擧行す扶老携幼遐邇の臚情期せずして相同く擊壤鼓腹都鄙の頌聲唱ふるあり皆和す
聖德の民心に浹洽する和風の萬類の發育するが如し臣長職等踴躍欣抃の至に堪へず頓首頓首上表す

次に岡部長職、東京市參事會を代表し、澁澤榮一、東京商業會議所を代表して各々上表する處あり。
右畢りて　兩陛下は　便殿に入御あらせられ、御小

憩の上、還御あらせられたり。尙當日、畏こくも兩陛下より特旨を以て金五千圓を、同會に下し賜ふ。

餘興として、大名行列、奥女中行列、武士の行列等あり。頗る盛會にして市内雜沓を極めたり。人ありいふ、此の國家多端のをり、斯如千金を餘興に擲ちて、徒らに遊樂をなすは、果して陛下の鴻恩に報ずるの誠意に叶へるかと。

●女子高等學校令　文部省にては、過般來女子教育上に關し、種々の調査をなしたるが、既に奬勵誘導方法等の取調結了せしを以て、近日中に學令を發布すべしといふ。

●女子高等師範學校卒業證書授與式　去月三十日擧行せし仝式に於て、校長の告辭、及文部次官演説の大要、并に卒業生の氏名は左の如し。

女子高等師範學科（姓名いろは順）

東京府平民	岩本　ふく	福井縣士族	長谷川　照
鳥取縣士族	林　ふみ	東京府士族	丹羽瀬　その
福島縣士族	富岡　むめ	東京府平民	岡田　文
東京府平民	岡田　みつ	石川縣士族	金岩　燕
高知縣士族	依岡　愛	千葉縣平民	田邊　喜
愛媛縣平民	土取　信	熊本縣士族	野原　つれ
香川縣士族	野口　ひさ	和歌山縣士族	松村　ひさ
靜岡縣平民	福地　くま	京都府士族	福田　美尓
香川縣士族	寺島　さみ	高知縣平民	足達　安
和歌山縣士族	安野　美知	福島縣士族	秋月　耕野
山梨縣平民	齋藤　敏	福岡縣平民	岸高　たき
千葉縣士族	野口　なほ	廣島縣士族	天　こう
和歌山縣平民	平野　てふ		

女子高等師範學科撰科

福島縣士族	川島　よし	新潟縣平民	雛田　千尋

附屬高等女學校補習科

東京府士族	渡邊　わか	東京府平民	松野　せん
三重縣士族	島川　たけ		

附屬高等女學校本科

長野縣士族	伊藤　淑	東京府士族	石川　田鶴
東京府平民	市田　登代	東京府平民	今村　喜代
東京府平民	萩原　ここ	兵庫縣士族	濱尾　淳

東京府士族	萩　直	新潟縣平民	濱野　聿
静岡縣平民	西尾　つね	東京府士族	彭城　きん
東京府平民	別宮　愛子	山形縣士族	中條　熙
大分縣士族	小川　富	千葉縣士族	和知　輝
東京府士族	和田　峰	新潟縣平民	渡邊　いち
東京府士族	渡邊　訓	高知縣士族	甲藤　喜美
東京府士族	櫻村　たま	東京府士族	片柳　さし
和歌山縣平民	荊谷　せい	岐阜縣士族	高橋　世喜
山形縣士族	高梨　ます	三重縣士族	立見　はな
東京府平民	綱　さだ	東京府士族	永井　しめ
東京府士族	中島　梅	東京府士族	村上　雅代
東京府平民	向笠　貞	神奈川縣士族	村田　美代
新潟縣平民	室　志津	東京府平民	植村　八重
東京府平民	大貫　ふゆ	茨城縣平民	大津　勝
岡山縣平民	大江　仲	神奈川縣士族	大澤　琴
千葉縣平民	大須賀　伸	兵庫縣平民	久保田　恒
埼玉縣平民	久米　紀伊	静岡縣平民	山田　登美
福井縣平民	山田　久仁	群馬縣平民	山崎　刀爾
群馬縣平民	山崎　志滿	島根縣士族	松原　けい
東京府平民	松浦　ゑい	東京府平民	福岡　樂
東京府士族	藤岡　繁尾	福井縣士族	江守　美津
愛知縣士族	安藤　辰	東京府平民	天野　久子
宮城縣士族	佐藤　秀	東京府士族	阪田　保
富山縣平民	澤井　美代	福島縣平民	榊　まつ
東京府平民	里見　太郎	福島縣士族	木村　早苗
東京府平民	宮部　岐	東京府平民	三浦　いし
岐阜縣士族	宮島　千代	東京府平民	首藤　俊
東京府平民	首藤　純	東京府平民	関谷　[illegible]々
東京府士族	須川　安		

高嶺女子高等師範學校長告辭

諸氏は爰に成規の課程を卒へて各々其證書を受く諸氏の榮とする所本校の賀する所にして又實に國家のために祝すべきなり然れども其祝すべく賀すべき所以を思へば諸氏亦小心翼々自ら省るべきものあり凡そ家國の富强と貧弱とは其因る所最も教育の如何に關し就中女子教育の適否に基す是れ女子の學德あるは一家の繁榮人物養成の基礎にして亦實に一國開明の起因なればなり即ち一國一家に於て女子に待つ所のものは之を男子に求むる處のものに比して更に重且つ大なるものあり此任を負はんとする者愼まざるを得んや夫れ人を教育する者は須からく深切懇到なるべし忍耐剛毅ならざるべからず家を治むる者は勤勉なるべく節儉なるべし學びて厭はず教へて倦まざるは諸氏の宜しく體すべき處恭勤にして用を節するは家を保つの要道なり諸氏既に高等の教育を受く今より後は進みて

其研究を計り其實行を勉め身を以て摸範とせんことを期せよ一言以て告辭とす

菊池文部次官演說大要

文部大臣は本日の盛式に於て諸子のために祝辭あるべき筈なりしに生憎病氣のために出席せられざるは誠に遺憾のことなり依て本官大臣に代りて聊か一言を述べ以て諸子の卒業を祝せんとす

諸子今日卒業の榮を荷ふは多年の勉學と忍耐とに對する報酬にして誠に賀すべき事なり然るに諸子の前途は頗る悠遠なるのみならず平穩無事と謂ふを得ざるべし古き譬喩乍ら今日の卒業は恰も船の進水式の如し鍛に鍛たる身體は譬へば堅固なる船體の如く此健康なる身體に宿れる確乎たる意志精神は船長の如く又知識藝術は水先人又は船員の如し而して今日は艤裝既に整ひ愈々人生の海に乘り出す盛式なれば慶賀すべき事は勿論なり然るに大海に於ては常に順風穩波の時のみあらず或は暴風怒濤を凌がざるべからざることあり或は暗礁砂洲の間を乘り回さゞるべからざることあり或は敵の彈丸水雷の衝に立たざるべからざることあり若し此時に當りて船體に弱點あるか又は船長に於て運用の術を誤るか如きことありては十分の働を遂ぐるを得ずして折角苦心製造したる堅船も海中の藻屑と爲るか又は敵軍に破壞せらるへし若し此の如き不祥の事あらは今日盛大なる進水式を行ひたる效なかるべしされは一旦乘り出したる上は益々身體及精神の健康を進めて二六時中油斷すべからす

抑々女子教育の必要を唱ふる聲は近來漸く高まりて女學校の數も增加し又教育の方法も稍々正當の方向に嚮ひ來れるに拘はらす尙今日の如き微々たる有樣にては不都合なり翻て社會現時の狀態を觀れば多數の男子は決して女子を同等視せさるのみならす甚しきは之を玩弄せり隨て女子の地位は甚た低し此悲しむべき社會の狀態は之を一新せさるべからす女子の地位高まらすして決して社會圓滿の發達を望むことを得さるなり

偖て女子の地位を高くするには教育ある女子を社會に多からしむる事最良の手段なり性行と云ひ智識と云ひ十分に女子の本分を盡す事を得る者社會に增加せば女子の地位は自然に高かまるものなり數年前には女子教育の方法宜しきを得さるがため

少しく教育を受けたる女子にして僅々の學問に誇り長者と爭ひ輕躁なる擧動を爲して以て識者のために指彈せられたる者ありき是れ實に嘆すべき事にして之れがために女子教育の發達を妨けられたることなきにしもあらず

今日卒業せらるゝ諸子は本校に於て善良なる教育を受けられたる者なるを以て固より斯の如き虞あるべからず昔羅馬の「シイザル」は其妻に附きての風評を聞き直に離別したることありき或る人怪みて其故を問ひたるに「シイザル」の妻たる者は露程も世人の嫌疑を受くるが如きことあるべからずと答へたりとぞ諸子も亦斯の如し最も縝密なる注意を加へ如何なる點に於ても世の惡評を蒙ることあるべからず

諸子よ世波は實に險惡なり諸子は多年校長教官諸氏が勞苦と又自己の並々ならぬ勉强と忍耐とに依て製造せられ爰に艤裝の整ひたる船と爲りて此險惡なる世海に乘り出すものなれば種々の困難に遭遇することもあらん此時に當りては學校に於て授りたる方針に從ひ運用の妙を盡して天晴立派なる航海を遂げられんことを切に希望するなり

●山形高等女學校　は、五月一日より開校する筈にて、目下假校舍の工事をとり急ぎをるよしなるが生徒は凡百二十名もある豫定なりといふ。

●貞女の賞　和歌山縣小松原通り五丁目に住む林ゑい（三十五年）は、孝貞の廉を以て、今般仝縣知事より左の通り賞を受けたり。

和歌山縣士族江馬正壽母

林　ゑい

稟性温厚志操堅實孝順舅夫に事へ敬愛小姑に接し一家和睦し隣人之を羨む夫虎之助嘗て和歌山市書記となり明治二十二年八月紀の川洪水の時公事に鞅掌し非命の死を致す爾來節を守つて寡を養ふこと愈厚し祭祀を敬んで故夫に事へ良家を擇んで小姑を嫁し舅壽を以て終り二孤長育す其志行洵に

奇特とす因て爲其賞木盃一組下賜候事

明治三十一年四月八日

和歌山縣知事正四位勳四等　久保田貫一

●孝女　廣島縣宮野菜の養女とくは、克く養父母に仕へて孝養八年一日の如し、一郷皆その至孝を賞しあへりと。

●奇特の少女　京都府久世郡視學小谷時中氏の女に清子といへるあり。今年八歳なり。此の一月十日のことなりとか、清女は學校より歸りて、獨り内に遊び居けるが、折節門口に、小兒の啼く聲聞こゆるに、清女、何心なく出で見れば、年四つ許りなる女兒の、母を見失ひ、啼き迷ひて尋ぬる樣子なるに、清女も徐ろに憐れを催し、なだめすかして、邊りを探せども見當らず、困じはてゝ、其の兒のいふまゝに一町ばかり行きし程に、折りよく、尋ぬる母に出會ひ、其の兒を渡しやりたりと。清女は、今、京都市錦林小學校の一年生なるが、校長此の事を聞きていたく感じ、紀元節の日、生徒一同に此の談話をなし、清女には賞品を與へて其の善行を表はせしといふ。

●子孫百餘人　宮城縣原田正太郎の母は、年九十九にして猶矍鑠、日々農作に從事し、すこしも勞苦の色なし、其の子孫は百餘人に達せるが、今回相謀りて壽筵を開かんとすといふ。目出たし〳〵。

●壽命算定法　英國リチャードソン博士の壽命算定法といふものあり。こは祖父兩親共に身失せたる後に知るものにして、往々當れることありといふ。其方法は、四人の祖父と兩親の年齡を合せて、之を六に除し、其商を其人の壽命とするものにして、例へば、第一祖父は八十三歳にて沒し、第二は九十歳、

第三は七十二歳、第四は六十四歳にて沒し、又父は七十五歳、母は六十歳にて死したりとせん、此合計四百四十四歳にして、其子の壽命は、之を六にて除したる七十四歳なりと豫知するなりと。

●大島の方言　伊豆の大島にはあらず、鹿兒島縣下の大島なり。內地の言葉と餘り違ひてをかしければ、其の一二を示すとて、同島に在る笹森鶴子の君より送りこし給ひしものにかゝる。

祖父	フシユ
祖母	ホンマ
父	ジユウー
母	アンマ
叔父	ウジッソワア
叔母	ハッケイ
若き男子但兄にも云ふ	ヤクメ
若き婦人但姉にも用ゆ	アセ
兄	メイエー
私	ワン
朝	ツカマ
夕	ヨネ
他家へ行き案內賴む時	キヨヲーロ
御出成され	イモヲーレ
誰樣と人の名を呼ぶ時	誰カナ
來レ	カンコヲー

又普通婦人の名は

愛千代	吉鶴	杉松	松代
貞鶴	市松	吉千代	岩鶴
宮松	豐千代	藤鶴	末鶴

など呼ぶ。

（鹿兒島縣大島名瀨港金久にて笹森鶴子通信）

●女子電話交換手募集　東京電話交換局に於ては、事業擴張の爲め、多數の交換手を要するに付、目下其募集中なるが、是迄交換手の給料は最高日給二十五錢なりしも今回是を改正し、日給四十錢までを

給することゝなり、且同局にては、婦人の監督者を置きて、風儀品行の取締を為すといふ。

●女鑑月並兼題

五月五日	歌……朝顔	文……汐干狩の記	四月廿五日〆切
五月廿日	歌……農夫	文……人に別る	五月十日〆切
六月五日	歌……螢	文……夢	五月廿五日〆切
六月廿日	歌……軍人	文……官位昇進を祝する文	六月十日〆切
七月五日	歌……夏泉	文……玉と瓦と	六月廿五日〆切
七月廿日	歌……新田義貞公	文……友の病氣を其近親に報する文	七月十日〆切

歌文原稿は必〆切期日までに本社に到着する樣送らるべし。遲れたるはすべて沒書とす。

◎宛名は國光社女鑑編輯部とせらるべし。

◎投稿歌文中より天地人の三才を撰り、天に該號の女鑑三部。地に二部。人に一部を送呈す。又他に秀逸を撰び。

◎兼題當選者に告げまゐらす

今回の兼題當選者には、豫め告げまゐらせし如く、賞品の内既刊の分、即、皇朝婦女鑑第一篇、瓜生岩、常陸帶は、それ〳〵送呈せしも、皇朝婦女鑑第二篇は未だ編纂中にて、發行するは來月の末なるべし。元、本月中に發行の豫定なりしを以てかく約しゝも、あまりに遲れて心もとなければ、本社發行ものゝ内、三輪田眞佐子女史の著女子の本分、女子處世論、女子教育要言、及、修身百首、の中何れにても望みにまかせ送呈すべし。猶又皇朝婦女鑑第二篇の發行をまたるゝとも、そは御望みに任すべくなん。



教の庭

四月廿日兼題　蝶戯花

天　青森縣弘前市　阿保松子

花の上に眠ると見れはたちまちに
羽風ゆかしく舞ふこてふかな

地　東京本郷區駒込西片町十番地　高島竹子

さく花をおのか羽風にちらさしと
つはさかろけにとふこてふ哉

人　東京麻布區笄町九番地　山中佐和子

咲きにほふ花にむつれてとふ蝶は
誰が夢路よりかよひきにけん

秀逸（廿五首）

たのしけに戯むれなからまふ蝶も
こゝろや花にいとなかるらん　浦井豊子

とひかはすおのか羽風にちる花を
ともとなしてもむつふてふ哉　名取正代子

いかはかり樂しからまし香を止て
はなより花にあそふ胡蝶は　名取よし子

さきにほふ園生の花にうかれつゝ
おもしろけにもあそふ蝶かな　金森俊子

花の香をかろき羽風ににほはせて
こゝろのまゝに蝶そたはるゝ　河野文子

あたにちる心もしらてうれしけに
はなのこすゑにあそふてふ哉　石井豊子

咲き匂ふ花よりはなにたはれつゝ
蝶やいかなるゆめむすふらむ　遠藤らく子

咲きにほふまかきの花にたはむれて
はかせゆかしくとふ胡てふ哉　後藤のぶ子

ちりそむる花かと見れは二つみつ
こすゑにくるふ胡蝶なりけり　羽田三緒子

花のかを羽風にしめてゆくはるを
をしみかほにもとふこてふ哉　鹽井梅子

ともすれはさくらの枝にとふ蝶を
ちりゆく花とおもひけるかな　山田璋子

ふく風に散るかと見れは山さくら　工藤　仁子
花にむつるゝ胡てふなりけり

永き日を花にくらしてとふてふの　田代　艶子
ふるゝ羽袖や香ににほふらん

永き日を花よりはなにたはむれて　武田　榮子
遊ふてふこそうらやましけれ

花見むとむれくる人におとろかて　諸井くら子
くるふ胡蝶のさまそをかしき

花の香にゑひやしにけん咲しより　石川とよ子
こすゑはなれす蝶そまふなる

まひあそふ蝶はとこよと思ふらむ　佐久間八重子
いろかゆかしき花のほとりを

ちりゆかむはなに心のれかれてや　三幣みさを子
こすゑはなれすまふ胡蝶かな

風もなく庭のさくらのちるみれは　春永己巳子
はなにむつるゝこてふなり鳬

咲きにほふ花よりはなを傳ひつゝ　野中あさ子
れもひなけにも遊ふてふかな

風なきにちりくる花と見ゐつるは　由井　浪子
こすゑはなるゝ胡蝶なりけり

咲きにほふ花のこすゑを慕ひきて　日野まさ代子
あたりはなれすとふこてふ哉

ちきりにし友まつ庭のはなの上に　林　久子
はやたはふれて舞ふこてふ哉

さきしより遊り離れすまふみれは　岸田はつ子
こてふそ花のあるしなりける

花にれくきみか恵のつゆを浴みて　藤井　芳子
羽かせしつかに蝶のあそへる

（以下原稿到着順）

咲きそろふ花のいろ／＼ひら／＼と　田部　里子
ちるかとみしはこてふなりけり

すゞしろの花のあたりをゆきかへり　住山　親子
みれともあかすとふ胡てふかな

花あやしかせはこひしきかけろふの　住山　靜子
もゆるはるのにこてふとふなり

とびかはす蝶の羽かぜもあたたかれや　佐々有鄰子
みつよつふたつはなぞちりくる

庭の面ににほへろはなをたづねきて　高橋きむ子
なつかしけにもてふそあそべる

さきにほふあまなの花にまひあそふ　佐々小琴子
てふのすがたのおもしろきかな

山はたのすゝ菜さきちるあきかせに
うちみたれてもきふこてふかな　永井るい子

さきかゝるさくらの花にたはふれて
こころはかほにさふこてふかな　樋野龍子

のさかなる春のみそらにきふてふは
はなをめてつつあそふなるらん　堤彬子

あなゆかしわれをたつれてきふ蝶は
はなにたはむれまひあそふなり　佐々値嘉子

さくら花手折りててふにおはれけり
ふさにきはしきしつかさこのへ　小田中靜子

くれぬれさそのしたつゆに宿しめて
ひれもすはなにもふこてふかな　浦井きよ子

花はてふてふははなかさくら木の
ねたをはなれぬ今日ののさけさ　濱口貞子

咲きにほふ花よりはなにたはむれて
あそへる蝶やたのしかるらん　大熊つれ子

そよ風にちるはさくらさより見れは
はなにあそへるこてふなりけり　大熊よう子

野邊みれはつかひ離れぬてふくの
はなにたはれてあそふころかな　大谷友子

おくつゆもまたきはやらぬ花そのに
はやまひあそふてふのいくむれ　井田みさ子

さきあまり風のまにく散るはなを
惜しさやてふのこゝに舞ふらむ　三谷越美子

うるはしく咲きてし花にたはふるゝ
てふのこゝろやうれしかるらん　中山さみ子

さくら花咲きみたれたるはたの上に
むれつゝあそふてふの數くたさ　所佐以子

ひもすからあそひくてはなの邊に
こゝろやすくもねむるてふかな　佐々木はつ子

はかなしさこゝろつかてや徒らに
はなにたはむれあそふてふかな　藤村幾子

さくや菜の花のさかりをわかものさ
羽かせかろけにあそふてふく　杉浦よし子

さきにほふ庭のさくらをわかものさ
こころもさらすてふそあそへる　小澤ゑん子

咲きにほふ花のあたりにたはむれて
さひかふてふやいかにたのしき　德永蔦壽子

のさかなる春のかきりをさくはなに
なれもあくかれあそふてふかな　尾立さみ子

長閑なるはるのひよりにさそはれて
胡てふぞのへのはなにあそへる　森江綾子

はる風の吹くかさみれはさくらきの
はなにまかひてさふ胡てふかな　荻原章子

こゝかしこ咲くやすゝなの花のへに
れふる胡てふのかけそゆかしき　渡邊まさ子

さくら花さけるかきれにたはむるゝ
てふの羽そてや香ににほふらん　綿野りき子

あれはてし宿のさくらになれそめて
　あるじがほにもまふ胡てふかな　登能くめ子

かすみより出つる朝日を待ちさりて
　はなのこかげに舞ふこてふかな　淺谷きよ子

しづかなるあしたの花のわりなくも
　散るがさみしはこてふなりけり　淺谷いく子

いろいろの花にたはむれさふてふな
　みるもたのしきはるのそらかな　澤田裕子

黄金なすその〻なのはなさきしより
　つはさやすめすさふこてふかな　松本その子

はなこしれ友さなれみていくはるも
　あかぬいろ香にてふのたはむる　淸水ふさ子

さほひめの琴のしらへやきこゆけん
　こてふはかろくはなにまふなり　丸橋なへ子

はたなかの黄金のはなをさもさして
　たちまふてふやたのしかるらん　藤川りか子

なの花にあきもやしけんわがその〻
　さくらのはなにあそふてふかな　志岐榮子

春かすみたなひくはたの菜のはなに
　こ〻ろのさけくてふのたはる〻　西艷子

すがのれのなかき日れもす咲く花を
　さもさなこつ〻てふのおそへる　坂田きみ子

さきつ〻く花よりはなにうつりきて
　まひつのほりつあそふてふかな　降田滿超子

をさまれる御代を祝ひてこてふさへ
　こ〻ろしづかに花にたはむる　永島幾久子

さくはなにたはる〻蝶のすがたこそ
　のさけきはるのこ〻ろなるらめ　村上鋭子

やがてこん秋のあはれはしらつゆの
　はなにたはるこてふそうたてき　杉村貞子

てふさへも君か八千代をいはひつ〻
　はなにむれきてたはむる〻かな　井川すみ子

ひさにたをぬしなき花さなりたれせ
　てふはおひきてはなれさりけり　折田さい子

風もなくはなの散りぬさおもひしは
　した枝にくるふ胡てふなりけり　伊藤はん子

なしへくさ花さくなかにてふ〳〵の
　こ〻ちよけなるあそひふりかな　碓田文子

みやこ人ちるさなけきしひさひらは
　はなにたはふるこてふなりけり　矢島はい子

あさひさす園生のはなになれあそふ
　てふのこ〻ろやたのしからまし　谷口ふさ子

や〻こてふさかりの花にたはふれて
　おのがはかせにふきな散らしそ　大寺濱迷子

さきにほふ花のあたりにうちさけて
　さひこふてふのなつかしきかな　失名

さく花のちるかさはかりみゆるかな
　にほひゆかしきてふの羽ころも　尾越斑子

香にゝほふ花をたつれて飛ふてふを
あはれひさひら散るかさそ見し　塙　いさむ子

朝日かけつはさにかけてのさかにも
はなのくも間な飛ふこてふかな　佐藤喜代子

菜のはなにくるふこてふの夫婦つれ
見るもわか身のしのはるゝかな　押元紘子

ふかみくさ咲のこゝろにさきいてゝ
くるふこてふははなれさりけり　加藤さく子

やかてちらん花の色かになひしれて
あそふこてふのあはれはかなき　杉村對子

少女子はたちもね去らすなかめけり
はなにこてふのくるふすかたを　石井信惠子

咲き匂ふはなのいろかにあくかれて
はなるまもなくあそふてふかな　稲塲ふく子

いつしかさ待ちにし花のさきいてゝ
くるふ胡てふの世さなりにけり　石井幸子

こむらさきいろから深きすみれくさ
むつるゝてふをいかにさか思ふ　野間紫子

あさひさす花のこすゑにうちむれて
あそふこてふやたのしかるらむ　野間錬子

こゝかしこつかひはなれすうちむれて
はなのこすゑにまふこてふかな　竹村竹里子

我か宿のかきのやまふきさきしより
たねまもおかすてふそさひ來る　高島松子

風にちるはなのあたりをまふてふは
なこりをしみてまさふなるらん　高島千代子

咲きに匂ふ花よりはなにたはむれて
てふさへはるはゆめこゝちせん　高島梅子

外つ國のひともうらやむはなの枝に
うれしかほにも飛ふ胡てふかな　鈴木このの子

我やさのはなに胡てふのあくかれて
今日もかきつをはなれさりけり　長島はつ子

たはむるゝてふおもしろし咲く花の
あなたこなたにねたうつりして　高砂き代子

さくら花ふたひらみひらちり初めて
たはるゝてふそしつこゝそなき　高須奈しづ子

飛ふ蝶のさまおもしろしはなかけに
あそふをさめのそてにたはれて　高砂菊代子

菜の花の咲きつゞきたるあいだをは
のほりつおりつてふの飛ふなり　中西しか子

なか空のはなにたはれてまふてふの
かへすはそてもかすむのさけさ　河田いし子

さきつゝく花のこすゑをこゝろよく
ぬひゆくてふのおもしろきかな　河田ふく子

花さそふかせのまにまにうかれつゝ
つかひはなれすまふこてふかな　佐々木せつ子

あさいふに花のこすゑにまふてふは
こゝろもいかにゆさかなるらむ　田口泣子

ちりそめしこすゑの花のひさひらは
むつるゝ蝶もしらすやあるらむ　大村八代子

里の子におはれてもなほたちかへり
はなの枝さらすさふこてふかな　奈良坂喜美子

咲きにほふ花のいろ香にうかれつゝ
こゝにかしこにさふこてふかな　小松靜子

あくかれて野ろゝもしらす飛ふ蝶は
いかなるはなのかにやしみけん　錦織さち子

はなの香になかき眠やさめにけん
さくらのそのにてふそあそへる　白梅園君子

たのしけに花よりはなにうつりきて
よれつもつれつてふるあそへる　眞島てる子

さきにほふ花のあたりをたのしけに
あなたこなたへあそふてふかな　眞島千鶴子

わかやさの花のさかりをたつれきて
いさたのしけにまふ胡てふかな　遠藤千代子

わかものさはなにれふれるみ園生の
てふはいかなるゆめかみつらん　山田玉枝子

大御代のひかりをうけてさくはなに
たはるゝてふやうれしかるらん　高砂秀代子

治まれる御代のめくみをほきかほに
はる野のはなにてふのたはむる　小杉ひさ子

花そのにねならぬかをりしたひきて
さもたのしけにまふ胡てふかな　岡本好子

こかれしくのへかさみゆる菜の花に
さひかふゆきはこてふなりけり　小松好子

もゝさくらさかりの色のゆかしさに
あはれこてふもあくかれにけむ　雨谷つぎ子

ちりみたる花かあらぬかたはむるゝ
こてふもそれさ見はわかぬなり　河村君子

霞ひつゝさけるさくらをわかものさ
いはぬはかりにあそふてふかな　大井以志子

幾はるもいろ香かはらす咲くはなに
たはるゝてふのなつかしきかな　野口まさ子

まふ蝶もこゝろうれしくあそふらん
もゝ木のはなをわかものにして　江間醇子

はにれむり花にたはむれ遊ふてふの
つかれしはれのおもけなるかな　伊丹秀子

たはれつゝ花よりはなさまふてふは
ゆめむすふまもあらしさそ思ふ　林環子

ふたつ三つ花のちるかとまかひつゝ
はかせかろけにさふ胡てふかな　竹村貞子

風もなくちりくるはなにさふてふは
こゝろやはなにたちそはるらむ　高松貞子

咲きつゝく花にうかれてかはひらこ
いかにのとけきこゝろなるらん　太田さき子

春の日に野への保さりにまひ出てゝ
はなにむつるゝてふそやさしき　生熊つれ子

ふたつ三つあたりはなれす戯むれて
羽かせゆかしくまふこてふかな
酒井美佐子

うくひすのうたふまかきの花にきて
そてうちかへしまふこてふかな
關　みつね子

さきにほふ花のこすゑにたはむるゝ
こてふはいかにうれしかるらん
佐々さし子

はるのゝにこゝろのさかにひら〱さ
はなにたはれてくるふてふかな
前橋友子

はなの上にたはむれ遊ふてふのかけ
あきまつむしはうさくみるらむ
小坂つれ子

うらゝかに朝日にほへるさくらはな
てふもつとひてたはむるゝなり
押元榮子

あかつきのさくらの花をよく見れは
つかひはなれすてふそくるへる
石井清子

敷しまのやまとこゝろにさくはなの
ちらなるてふはたくひなきかな
地曳ねん子

八重櫻香にあくかれてさふてふよ
おのか羽かせにはなちらしそ
岸みな子

はるかせに散るかと見れはさくら花
かにあくかるゝ胡てふなりけり
皆川清子

ひさふたねみねつかくれつさく花に
ほれてむつるゝのへのてふかな
筧　茂子

さく花をおのかすみかとおもひてか
あたりもさらてゝふのまふなる
大柳さよ子

あたにちる花としらてやてふてふの
けふもひれもすむつれまふなり
竹田碧子

ふかみ草めてたくさきしいろかなそ
めてゝやてふのむつれさふら舞
市橋さし子

ふかみくさ北のやかけに匂ひいてゝ
さきをねかほにてふのむつるゝ
筧　皓子

のとかなる春のけしきにうかれ來て
ひれもすはなにあそふてふかな
白川喜代子

さきつゝくはなより花にたはむれて
おもひなけなるてふのやさしさ
大海原芳子

うちむれてたはるゝ蝶のはかせにも
こゝろおかるゝはなさかりかな
大海原久子

わかものと花の元さらてしめてぬる
てふはさくらのあるしなるらん
林　のよ子

風にちるはなをしたひてゆくてふは
いつれをそれと見わかさりけり
山根久子

のへみれは色なつかしき菜のはなの
なかにこてふのむれあそふなり
岡上延子

思はすも手折りしはなをたつれきて
あゆむまに〱とふこてふかな
駒澤まつ子

さき匂ふはなにむれきてたはむるゝ
こてふもはるはうれしかるらし
穗積稔子

咲きにほふ花のさかりはとひまよふ
てふのはかせもいさはしきかな
穗積早苗子

花の枝なくゞりつまひつたはむれて
なかきはる日もあかぬてふかな　柳田さと子

たはむるゝ胡蝶のさまをゆめならて
はなのこすゑに見るもうれしや　舘脇ます子

戯むれてこころもさらぬてふ〳〵は
はなのつまとも見ねにげるかな　池谷宮子

花の枝のこころもさらすたちまよふ
胡てふのさまのおもしろきかな　吾妻ちか子

咲きにほふ花よりはなにたはむるゝ
てふの羽そてや香ににほふらむ　戸塚てつ子

はなの枝になかき春日をかされても
あくさま見ねすまふこてふかな　中桐杏子

ほつ枝下枝かはるかはるに飛ふ蝶の
あかぬやはなのちきりなるらん　太田さと子

夕あらし散るはなひらにすかりつゝ
ゆめのあとゝふてふのひとむれ　太田淑子

いつれをかまさる花とやおもふらん
たはむれあそぶてふのこゝろは　今泉ちか子

まるかりはきのふのゆめとちる花に
たはむれつゝもとふ胡てふかな　青木たま子

少女子におはれてはてはとふてふも
はなに見ねすもなりにけるかな　日高秀子

なかの邊のすゝ菜のはたに花さけは
いまをはるへとこてふとふなり　賀屋壽子

さくらさく花のありかをしたひきて
あそひもあかすてふのひとむら　失名

たのしけにとひかふ蝶はさきにほふ
はなのあたりをはなれさりけり　重松たか子

ちるはなさたもひけるかな枝ここに
てふのたはれてあそふすかたを　近藤よし子

みなひとのうかるゝ春のこゝろこそ
はなにあそへるてふとなるらめ　淡さみ子

ちるはなの枝にかへるとおもひしは
ふたゝひとまる胡てふなりけり　白石梅子

さほひめの春のつかひかさくはなの
あたりをさらすあそふこてふは　上野君子

咲きにほふ花のこかけにきてみれは
のどけさそへてとふこてふかな　下元もと子

うら〳〵とかすむ春野のはなの香を
したひててふのむるゝのとけさ　平野靜子

糸さくらはなにこゝろをつなかれて
てふはこすゑをはなれさりけり　由井澄子

咲きにほふさくらの枝にむつれつゝ
はなとみだれてとふこてふかな　森こと子

家つとにはなは手打れといかにせん
ねたにたはるゝてふのすかたを　城利惠子

さくら花ひとねならむとときてみれは
あるしかほにもてふのとまれる　宇高まつ子

春かせにこすゑはなるゝさくらはな
つちにおちぬやこちふなるらむ　二宮春枝子

うらやまし胡てふは友なさそひきて
ひれもすはなのかけにあそへり　廣田さめ子

ちるはなを巴かともさやおもひけん
よろこひかほにまふこてふかな　岸江さよ子

うすくこく千草のはなのいろにかに
まよひうかれててふのたはむる　梅園ふみ子

百くさのはなにむつれて舞ひあそふ
こてふや野邊のあるしなるらん　鏑木香芽子

いつるひな花のこすゑにまちさりて
あしたしつかにとふこてふかな　齋藤歌子

ふきかよふ風のまにまにわかそのに
はなにむつれてさふこてふかな　三井信子

さきにほふ花にたはれてはるのひの
なかきもあかすまふこてふかな　市來すゑ子

咲きに匂ふはなの色香にうかれ來て
たはれつまひつあそふてふかな　菊池さき子

よのうさなしらぬ春日にうまれきて
はなにあくかれあそふてふかな　室井美濃子

さき匂ふはなよりはなになつさひて
うらやましくもあそふてふかな　金原吉子

はらからか妹脊かしらすかはひらこ
はなをむしろさなしてうかるゝ　小山しきみ子

花かけをこなたかなたとうかれつゝ
やさりさためすとふこてふかな　外川さい子

さき匂ふはなよりはなにあくかれて
しつこゝろなくさふこてふかな　外川益子

咲きに匂ふさくらの花にたはふれて
わかものか匂にあそふてふかな　山崎恵子

嵐あるなしるやしらすやてふくの
はなにたはるるすかたやさしも　大橋靜子

花をそふあらしに散るさおもひしは
はなにたはるゝこてふなりけり　志較久子

永きひなひめもすはなにたはふれて
よもまたはなにやさるてふかな　岡山ふち子

いかはかり樂しかるらん咲きに匂ふ
はなにたはふれあそふこてふは　香川穎子

少女子か持ちゆくはなのあさになり
さきになりつゝさふこてふかな　金森登志子

いひしらぬ花のに匂ひにけふもまた
あたりはなれすさふこてふかな　魚住愛子

さき匂ふはなにたはむれのさかなる
ひかけをひろくこてふまふなり　北村左枝子

はなかけにれふれる蝶のひさつかひ
いかにのさけきゆめやみるらん　大竹治子

ひさもさの花にたはれて日れもすに
にはのをもあらすまふこてふかな　遠山清子

てふ〳〵のむつひあひつゝ咲き匂ふ
　はなにあそふやたのしかるらん　長松かれ子

ひくゝまひたかくあかりてさき匂ふ
　はなの木かけにてふそたはるゝ　山鹿さら子

こちに酔ひこゝろも空にかはひらこ
　はなよりはなにゆめと行くらん　原田きわ子

うら〳〵と匂ふさくらのはなかけに
　こゝろのとかにあそふてふかな　柳島ゆき子

かけろふのもゆる春日の菜のはなに
　つかひたのしくあそふてふかな　池田みさを子

うら〳〵と朝日うつらふはなの上に
　かけおもしろく、こてふとふなり　佐藤玉子

さくらきにねふるこ蝶はうらやまし
　のとけきはなのふすまかされて　木村みさ子

うちむれてはなにたはるゝ蝶みれは
　御代ゆたかなるこゝちこそすれ　片桐ひさ子

八重さくらさかりにほふ花の上に
　羽かせゆかしくて蝶のあそへる　進藤敏子

咲きにほふ花のかをりをしたひきて
　あたりはなれすてふのたはるゝ　進藤遊喜子

おほ君の御代のさかりのさくらには
　すかたのとかにてふもまふなり　田中静子

來つ行きつすゝなの花にたはむれて
　さころねかほのつかひてふかな　菅沼妙子

花の上にまひつとまりつたはむるゝ
　こてふのはふりゆかしくもみゆ　河原よし子

わか世ともいはぬはかりに咲き匂ふ
　はなにひねもすあそふてふかな　菅沼

かくはしき花のこころをしたひきて
　あたりはなれすあそふてふかな　服部かつみ子

とひわかれ飛ひ集まりてさくらはな
　にほふあたりにてふのむつるゝ　山崎しつ子

おもしろくたはむれ遊ふてふ〳〵の
　こゝろやはなにいさなかるらん　濱田直

睦ましきいもせのみちのほとみゐて
　はなよりはなにあそふてふかな　藤井芳子

時のまにうつろふはなのさかりとも
　しらてこてふのあくかれぬらむ　小村信子

花の上に今日はひねもすうかれつゝ
　ゆめもむすはてあそふてふかな　高石さ代子

たかくひと低くおりつゝさきにほふ
　はなのねさらすまふこてふかな　前野壽衛子

ともすれは蝶はつかひをはなれても
　はなのこすゑはわすれさりけり　秋元楠衛子

麗はしきはなにたはむれをちこちに
　とひかふてふのおもしろきかな　志茂多廣子

をちこちのはなをたつねてまひ遊ふ
　てふのこゝろやうれしからまし　佐々木鷹子

きにほふ花よりはなにうつりきて
　いとたのしけにあそふてふかな　岡田臨子

咲く花にたはるゝてふのひとつかひ
　みたれもつれてゆきつかへりつ　田中みつ子

さかりなるさくらの枝にむつれつゝ
　ところゑかほにてふそまふなる　高橋兼子

ゆめのよとしるやしらすや咲く花の
　にほひうれしくまふこてふかな　林麻子

きのふけふ笑ひそめにしはなの香に
　こゝろひかれててふそあそへる　熊田艶子

ゆめのまと思ひわきてかけふもまた
　はなよりはなにあそふてふかな　橋本たつよ子

のとかなる空にゝほひて咲くはなを
　いかにうれしとてふの舞ふらん　飯塚むつ子

あましけに咲きしほたんの花ひらに
　あそふこてふやたのしかるらん　尾澤知子

いろ〱のはなさきにほふ春のゝに
　こころさためすとふこてふかな　仲田ゑい子

花やちるとさくらのもとに立よれは
　かせにみたるゝこてふなりけり　中澤千野子

戯るゝおのかはかせに散るはなを
　ともとやてふの追ひて行くらん　星野なみ子

はなにあけはなにくれつゝまふ蝶は
　のとけきはるを知らてすくらん　笹子しげ子

たはふるゝこ蝶とともに手折りつゝ
　かさしてかへるやまさくらはな　大友倫子

咲きにほふはなをたつれてとふ蝶の
　ゆくとおもへはまたかへりきぬ　岡澤信子

さきにほふ庭のさくらにあくかれて
　羽そてかろけにてふのくるへる　櫻井藤子

ものいはぬ花のこゝろをしりなから
　いふせきまてにあそふてふかな　加藤寛子

こゝにまひかしこにとひて胡蝶さへ
　はなのいろ香をわけまよふらむ　日高かず子

さき匂ふはなにあそへるてふみれは
　荘のむかしもおもひやらるゝ　小田中靜子

八重さくらうつろひそむと思ひしは
　はなをかそふるこてふなりけり　沼越むら子

春日野のはなをかそへてとふてふの
　やさしきこゝろこゝろともかな　加藤ます子

うなゐ子かくるひてあそふ花そのに
　てふもたはれてとふはる日かな　三浦さき子

いかはかり花にこゝろのうかるらむ
　たはれてのにも飛ふこてふかな　平山房子

ひら〱ととひつとまりつなの花の
　はたたちさらてまふこてふかな　仁保しま子

うちなひく野邊のかすみを押し分て
　はなよりはなにとふこてふかな　山内蔦子

おもしろく二ひら三ひらはな散るさ
見しはくるへるこてふなりけり　飯塚　みづほ子

咲き初めてまた日もへぬにちる花は
たはふれあそふこてふなりけり　丸山　かつ子

一ひらのまふさはかりも見ゆるかな
さくらにあそふてふのつかひを　今福　いま子

ゆたかなる御代を仰ぎてこてふさへ
はなに八千代を舞ふぞたのしき　福原　菫子

れふろかさおもへば花にたはむれて
すゞなさく野にこてふなりけり　仁保　基子

四月廿日兼題　試驗及第を祝す

天　甲府市山田町　名取正代子

實に一年はゆめのやうにて、去年の春、第二學年の御試驗に、なみならぬ御ほまれを得させ給へりしも、いまだ此程のやう、ればに侍りしに、はやも一年の月日めぐり來て、此度亦しも數多の人の中に、一の位をしめ給ひ、ことにほまれあるしるしの書をさへ得させ給へりとか。誠に、一たびならで、二度三たび御成績のいちじるきは、日頃の御いそしみによるとはいへ、君が御天性のすぐれさせ給へる故ならんと、御うらやましうこそ。さても、君が親ぎみはらからの君たちの御よろこびは、そもいかぞかりぞや、御いつくしみの程も、一しほと推しはかられてなん。ますます更なることながら、猶ます／＼はげみ給ひて、來ん年は御卒業と承り侍るに、いよ／＼高きほまれをあげさせ給へかしと、ねぎまつるになん。あなかしこ。

地　福島縣信夫郡福島町東種一ノ十三番地　鹽井梅子

承れぞ、御孃樣には、今度の御試驗にて、滯りなう殊に御優等にて、高等女學校を御卒業遊ぞされ候よし、誠に／＼、めでたう、よろこぞしき、御事にぞんじまゐらせ候。これ、多年螢雪の功、今日に顯れたるにて、御本人の御悦びは、申す迄もなく、御兩親、其他の御滿足、さこそと、御察し申上げまゐらせ候。猶此上とも、御在學中の苦を、忘れ給はず、かねて、御修めなされし、學藝を、益々御研きなされ果ては、國民の大本たる、忠孝の德を始め、修身、齊家、處世、交友の道、など、實地に、御施しなされ候ひて、適れ、世の良妻、賢母たる、御資格を、備へ給はんことを、くれ／＼も、御祈り申上げ候、先

は、御祝ひ旁々、今後の希望まで、此の如くに御座候、めでたくかしこ。

人

東京本所區新小梅町一番地　佐藤喜代子

朝日子のきら〳〵として、晴れたる空に、千代をことほくむら鶴の、聲きゝつけたらんは、いかに珍らしうめてたからんを、夫にもましてめでたきは、春もなかむの心地よき此日頃、あまたとし螢に雪につとめたまへるしるしあらはれて、いや高き月のかつらを手折り給ひ、卒業のみしるし、文受け得給ひぬるよし承りつるにてそ。たらちねの君の御喜び、いかむかりにおはさらんと、おし計りまつりぬ。されどもと御許様の、さかしくおはしましぬるゆゑにて、いと〳〵嬉しう、悦び參らするなり。されど此白縮緬一匹、そしなにはあなれども、御いはひのしるし迄にさし上げ奉る、餘は近きほどにまうで聞え上ぐべけれど、うれしさのあまり、取敢へずかくなむ。あなかしこ。

（以下原稿到着順）

中山さみ子

雲井の雁の、はしり書き、亂れ〳〵し筆のあとも、うれしさのあまりさ、ゆるし給へ。さても、年頃の御いそしみの、なみならぬば、けふの御式の、まさしくて、此度の、學年試驗に、殊にすくれし成績もて、及第せさせ給へるが、第一の席を、しめたまひて、優等の賞をさへ得させ玉ひしなど、承はる事よ。こよなき、御ほまれ、又此校の光さもいはましや。あど一年にて學の業も卒へたまへる事に侍れば、猶一しほはげみ給ひて、ゆめな、たゆみ玉ひそ。げに、めでたしさも、めでたきは、御一族の、御悦び、いかばかりならん、折すぐさず、參りて、御有樣も、うけ給はらまほしけれど、いさゝか事のしげくて、一言きこゆあぐるになん。あなかしこ。

三谷起美子

花のあしたも雪の夜も、一すぢに學びの道をたどらせ給ふさ、承り侍りしが、こたびは、數多き受驗者の中にて、いさもすくれし御しるし文をうけさせ給へるよし、承り侍るおのれさへ嬉しさ、たぐひなくなむ。さるは、もとより君の御才、世にすくれさせ給へるによる事なれども、師の君の淺からぬ御心づくしの程も思ひ知られ侍りて、この後の御いさをの程も、今より待たれ侍るになむ。あなかしこ。

畠山百合子

日頃の御いそしみの程あらはれ、めでたく及第せさせ給ひ、今日しもみゆるしの御文たまはりたる由承り、いはひ奉り候、これまことに御自身ばかりの御よろこびのみかは、御兩親の御名をもあらはし給ふ御事にて、御一族樣も、さぞ〳〵御滿足の事と御喜び申上參らせ候、是と申すもひとへに君の御勉強のみならず、御兩親の御志の淺からぬ故にしあれば、尚この後も御いそしみの程專一と、祈り上

げ、拙なき筆もかへりみず、御及第を祝し奉らんとてかくなむ、あなかしこ。

奈賀井　滿梨子

げに月日のたつぞ早きものなる。されどかゝる月日につれて、進み行く人の栄こそめでたけれ。常々したひ参らする姉君には、すぎにし春高等小學校のわざを終へさせけるも、尚學びの道の奥かをきはめ玉はんとて、都なる女學校に入らせられけるが、出來朝夕ほたるに雪につとめはげみ給ひし御いさをのまさしくて、此度の大試驗には、數多の人にすぐれ玉ひし御成績にて、御及第あそばされ候よし、あはれめでたきこと、何かこれにすぎん。猶此後とても、かはらぬみこゝろもていそしみつとめ玉ひて、とく寶の玉を得させられ、今一とせの春秋はや立ちて、つゝがもなく長閑けき風に、錦の袖をひるがへしつゝ、歸り來まさん事を、いまより指をりかぞへて待ち奉るにこそ。數ならぬ我ら、をこのわざなれど、いさゝかことほぎ奉らんとて、花も實もなき深山木の、葉ばかり事をかへりみず、かくば物しつるになむ。

綿野りき子

ひさ／＼音つれもつかうまつらざりしは、例の事繁ぎにさりまぎれてさ、廣きみこゝろにみゆるしたまへや。今日ほのかに承れば、此程の學年試驗にはめでたく御及第にて、殊にくさ／＼のかずけもの賜せ給ひしとよ、日頃なみ／＼ならぬ御いそしみのいさをしと、友人のすゑに、つらなりはべるおのれらまでも、覺えずほまれを得し心地して、いとも／＼うれしきかぎりにこそ。猶此後とも、ゆめ怠りたまはで、いよ／＼、文のはやしに進み入らせ、女德を磨き、才をやしなひ、御卒業のあかつき、うるはしき錦きて、故郷へたちかへられ給ひてよ、さては、日本女子百傑、ほかに消息集二部、ことほぎのしるしにまで、贈りまゐらするになん。めでたくかしこ。

澁谷いく子

四方の山べは、白くものたなびけるかと、まがふ、ばかりに花も開きて、草のいほりも、春の光りの、さし渡りて、何となく、たのしう思はれ侍る折柄、いよ／＼御きけん、うるはしう渡らせ給ふとよ、こよなう目出たき事になん。御もと様には、此度御校の試驗に及第させ給ひ、ことに、あまたの人を打ちこはさせ、第一の席にのほらせられし由、いとゞ嬉しう賀し上げ侍り、御兩親樣には、いかばかりよろこばせ給ふらん、これ皆かれて御さかしこくあらせられて、たゆます怠らす學のにはに通ひて、ふみの林をわけられしみしるしのあらはれつるものならん、と、いたうかまけられ侍り。尚御身を大切にせさせ給ひて、いよ／＼おくふかく、文の林に、わけ入りて、めでたき花をおならせ給へや。あなかしこ。

藤川りか子

彌生の空のうらゝかに、晴れ渡りて、日毎に、さへづる、鳥の音も、わきて、心地よう聞ゆる此の比は、君には定期試業を首尾能う濟ませられた由。細々との御消息、いとも、嬉しう拜見致し申し候。御兩親樣始め、御前樣の御喜び、さこそと、存じ候。さりながら、學びの道は、果てしなきものに候へば、朝夕師の教を、いそしみ勵みて、御兩親樣の御滿足を、得させられ候樣祈上候此の皇朝婦女鑑は、大に面白く、その上教育にも、益ある書に候間、御悦のしるし迄に、御目にかけ申候、何卒御學びの、御余暇に、御ひもとき遊ばされて、

親とし、從々婦徳を、備へられ〻あはれ數ある、婦女の鑑と、幾千代迄も、香しき御名を、止められ候樣、偏に祈上候、先は右御悦までいあら〳〵かくなむ。

坂田きみ子

一年の學のわざをなしをへて、しるしのふみを賜はりしけふのめでたさよ。學びやにあるひめだち、たれかはよろこび給はざらん。さるが中にも、君には、なみならぬ御成績にて、殊に優れたるしるしのふみをさへ得させ給へりさい、實にうれしさもめでたしさし、いはひまつらん詞の葉もなし、これ、日頃いそしみつとめ給へる驗の、けふにあらはれしものにて、つれ〴〵怠りがちの妾どもは、今更になどかつとめざりけんと、くやしう思ふさへはづかしうなん。いかで、今よりは、君をかゞみとして學げましさおぼひ侍るに、君もいよ〳〵つとめ給ひて、やがて高きほまれをあげさせられ、我日の本のひめかゞみともあふがれ給はんことを、ねぎまつるになん。かしこ。

降田滿超子

あはれ君よ、君が螢雪の効、むなしからで、こたびの、試驗には、首尾よう、及第せさせ、玉ひしのみならず、其成績あだし人に、立ちまさりて、最優等におはしきとか、いとも〳〵めでたき限になん。こをきゝたる、妾がうれしさ、とる筆もをどるばかりに覺え侍り。たらちねの、君の御よろこびも、さこそと、推しはかり侍りぬ。なほこの後は、いやはげみに、はげみ給ひ、學德并び進みて、一日も早う業を卒へ玉ひ、錦をかざりて、古郷に歸りまさんことをのみ、ひたすらにねぎ奉るになん。からてかぶとの緒をしめよとかいへば、ゆめな爲りたまひそ、など、きこゆ上ぐるは、いさをこのわざなれど、思ひし事云はぬは、例さかや、申すことの、侍れば、なめげの罪は、ゆるしたまひねかし。あなかしこ。

いや高くのぼり〳〵てみねにさく
ほまれの花をたをりてもこよ

佐々衍部子

家の風をおこし、桂ををるべき秀才の、あらはれいづるも、梓弓春の末つかたの試驗に、及第したるたびごとのいさをになんありける。賤山がつが住める里をも落さず、小學校の設けあれば、今年も秀才のいづるをまちつるに、はたせるかな、今度は妾が斷金の友とたのみし貴孃も、試驗を及第したまひぬとうけたまはる、あなうれし、よろこばし、かゝるたのしき大御代なれば、貴孃の及第の祝ほぎ、いさゝかかゝくなも。

塙いさむ子

いつしかと、花を下まつ心より、降るもなつかしき春雨の、惠の露に沾ひて、角ぐむ岸の青柳に、うら〳〵と明けの霞、立ちこめて、楢打けぶり、げにものどけき春景色になんなりぬる。こなたにいとも樂しく、嬉しく眺めつるに、まいて、こたび、君はしも、學窓を設ぎ、百花に魁けて、咲匂ふ梅が花の、色も香も深く身に負はして、殊に一級のをさにて、めでたく玆に、學びのわざを卒へさせ給ひしさよ。けに〳〵こよなうよろこばしく、めでたき限になん。これまたし〳〵、其許君の、日頃螢に雪に、こゝらの年月をつみて、いそしみ勵みたるみしるしの、今日春の日に顯り出でゝ、花にも勝るみほまれに、御館のはゐある、何かはこれに勝るべき。あはれ、是よりは

浮世の波に漕出でゝ、眞楫正しうなり、國つ船なる海人子らを、文明の港に導き給ひてよ。さてこそ、久方の月の桂も折るばかり、家つ風をも咲かせてめ。妾は悦びの心の中に溢れて、思の一ふしをも、言の葉に、え盡し難く侍れば、希くはくみしり給ひてよ。くれ〱も、きみが、學の窓に在りし時の御心もて、よく〱世のなりはひを務めなし給はんこと、偏にねぎ奉らするになむ。

森江あや子

いつれの業を修め、いつれのことをなすも、などかたやすく、遂げ得らるべき。ましてや、高きこと、雲井の限りなく、深きこと、千尋の底も知られざる、學の道こそ、まこと[illegible]身[illegible]、力をも、これにまかせて、舟をこぎ、帆をかけて、いさゝかのたゆみをもなさで走らすば、望む彼の岸に、近づくことを得ざらめ。されば、夏は河流の汀にとぶ、螢の光りをたよりとなし、冬は降り積もる窓の雪を友として、花に遊ぶ、胡蝶の姿にはそまで、朝な夕なの、けぢめなく、怠らず勵みてこそ、はるかに、見えし荒波をも越えて、靜かに、ほがらかなる、よき日をも、得て、嬉しさ限りなからめ。さはいへ、思ふ岸は、程遠く、過しなだよりも、いやまさる、大灘をも越えゝ強き大風をも、しのがざらめや、されば、いにしへより、高き山も塵のちりより起り、堅きつゝみも、蟻の穴よりぞくずるゝとかや。今日の芽出たき日は、學の業を修めて、茲に、及第の式を擧げられし、はいと〱忝なくなん。これ全く綾に畏き大御代の、御威徳と師の深き恩の露とに、よれることなりかし、いさゝかこゝに、祝ひ心にかゞらくなん。

山方蕗子

まなびの庭に入りそめしより、たゞ卒業のときをのみ待ちはべるは、なべてのならひなるに、わきてあなた樣には、御ふたおやの御とし つもり居させたまへば、ひたすらわざを卒へつる時をまちたまへるが、いよ〱このたびの春季試驗にて、高等女學校を御卒業あそばされしよし、よそなるわらはさへ、とるふでもをどるばかりにうれしくこそ。さるを、まいて、御本人は云ふもさらなり、御父君御母上さまには、いかばかりよろこばしうおはしますらん。なほ新聞紙上に承れば、御行ひたゞしく、學びのわざも優れしとて、級の首席を占めさせたまへりとか。これ師のきみの御をしへあつかりし御たまものとはいへ、年ごろ、おん身の、熱心にまなびのみちにいそしみたまひし効のまさしくて、いまにあらはれたまへること、わきめもおうらやましきばかりにぞんじはべり。さてかゝることをきこえあげんは、なか〱にをこがましくはべれど、ことわざにも、油斷大敵とまをす、ごとく、なにごとにまれ、小成にやすんじては、志をはたしがたくはべれば、此ののちいづれの學校にかよはせたまふとも、御油斷なく、ます〱はげみたまはんやう、ねんじ上ぐるになん。

およろこびのしるしとして、懷中時計ひとつ、おくりまひらす。こは時計のはりのたゆまなきにあやかり、はげみたまへることをほぎまつるこゝろざしになん。うけをさめたまひてよ。あなかしこ。

小松好子

其後は、打ち絶え侍りて、いと恐れ多うこそ、さては、昨日何某の、君より承り侍りつるに、御身には、此度の定期試驗に御及第遊し、殊に、御優等におはせしよし、此上なき、めでたきと御祝ひ、聞え上

るになん。我身日頃より、師の君さも、姉君さも、たのみ參らする、御身の譽さて、一しほ、嬉しく、陰ながら、いさ〳〵喜び、侍りぬ。されば、我身のみかは、國元におはする御兩親の君の、如何ばかり、喜ばせ給ふらん、御さつし參るだに、いさ淡しう、こそ。されさ、こは全く、御身の、つれ日ころ、品行正しう、且つ學ひの、わざないそしみ、給ひし、いさなの外、侍らずならん。倘、なこかましう侍れざ、此後共に、つれに、かはらせ、給はで。よろづ、いそしみ給へや。此皇朝婦女鑑、一部御祝ひの、しるしまでに、御すゝめ參るにこそ。あなかしこ。

鹿島よし子

今をさかりさ、咲き、出でたる、梅花を、見るにつけても、勉めて、たゆまさるは、尊き事、なめりかし。此花も、風雨、雪霜の、月日を重れ、吹きわれ、降しきる、中に、たゆます、忍びて、此のどかなる、春に、あひ、かく、清げに、咲き出、に係ひ、床しくのちには實さへ、むすびて、世の人々に、めで、はやさるゝ、も、皆、勉めて。たゆま、ざりし、いさなり。君も、此花の如く。野の夕夏の日盛りをもいさはず、いそしみはげみ給ひしかいかであらはれさら鉄。この度の定期試驗には、級中一の成蹟なりきさ聞く。其のかんばしきほまれは、あたりにみち〳〵て、世のおぼはは更なり、君のめいほくのみかは、友なるわらはまで、人々に對して肩身廣く、このよろこび、何にたさへてまし。さはあれざ、學ぶてふことは、坂に車をおすごさしさの古きをしへもあれば、よく、心にきさみて、殊な怠り給ひそ。卒業試驗のおかつきは、梅の實のすゞなりにむすべるこさく、いやましの光りそへ給へかしさ、いのらるゝにこそ。

河村君子

空の數色のどかに、なかざりし島もなき。さかざりし花も咲きいで一際心の浮きたつ今日此頃、たれこめてのみおはして、影だにみねさせぬは、いかゞし給ふらむ、姿すこやかに、物し侍るを、たいくしけれど、おぼしけち給はらばや。さて、おもさには、きさらぎの末つ方よりの試驗、漸く終へられ、日頃花紅葉をよそに見そなはしつさめはげみ給ふしるしにや。首席にて御及第あそばされ、更に東の都の敎の庭にものせらるゝよし、御兩親樣の御よろこびも、一方ならず侍らむ。こはおもさにみせまゐらすべうも侍られざ、故郷より送りこしゝ品に侍り、ひなびたる笑ひなさめ給はむには、いみじきほいになむ。まづは蚯蚓のはしりがきをかへりみず。御及第をことほぎ侍るにこそかしこ。

佐々さし子

きのふさ、くらしけふさすぎ、別れはべりしより、はや一させを過しぬ。そののちは、如何に、暮し給ふらんなど、思ひはべれざ、家事の忙はしきまゝに、取りまぎれ、御景色も伺ひまつらぬこころ、ほいなさ、わざなれ。さて此度の、定期試驗に、及第さならせ給ひしさ、聞きはべりぬ、これ常々、御いそしみの、いさをさ、まごさにうれしう、何に例へんすべもなし。定めし御兩親樣の、おんよりこび、いかならんさ、身は、白雲の幾重のよそにて、推しはかりまつるになん。一家の御榮譽のみならず、御一身の幸さ、御祝ひ申し侍り。此後も、たゆみなく、いそしみ、給ひ、目出たく、御卒業

なされ、故郷に、錦を着て、かへられんことを、祈りまゐらするになん。

白川濟代子

其許様の才學は、かれ〱人々の賞揚するところなれば此度の試驗き聞くからに、必ず最優等を以て御及第在らせらるゝならんとは、母上とも御噂いたししに、果して第一の坐を占めらせ、御及第遊ばされ候のみならず、名譽ある優等の賞をさへ賜はりしとの事、なんの喜びかこれに過ぎたるはあるべき。これ天賦御才智のしからしむるところとはいへ、かれ〱人に勝れ御勉學のいたすところと、實に〱感佩の外なく候、此品甚だ粗末のものにはあれど、此度の御祝のしるしまで、お目に供へまゐらせ候、おんをさめくだされ候はゞ、此上もなき喜びにこそ。あなかしこ。

三瀦みさを子

きのふけふ、空のけはひ、いとのどかに、垣根の八重櫻、咲きそめて、百鳥の囀ること、をちこちに聞ゆれば、心もそゞろに浮き立ちて、御もとの訪はせ給はむには、庭逍遥も、いかに心ゆくらむ、と思ふ折しも、日頃、親しう睦びかはせる、友どちのとひきて、語るをきけば、こたびの試驗には、滯りなく及第させ給ふ上に、第一席をしめられ、師の君より、あまたのかづけ物賜はりぬ、ときゝつるうれしさよ。なべての人は、及第をさへ、こよなう嬉しう思ひて、月の桂にても、手折りたらむが如き心地すめるを、上なき名譽を、え給ひし御許の心、まいて親君はらからの君たちの御心やいかならむ。天性とはいひながら、雨のあした、月の夕も怠らず、學の窓に螢をあつめ、教の庭に雪を積みて、いそしみ給ひし、いさをのあらはれつるにて、庭の櫻を見るにつけても、御許の上の思ひいでられて、いと羨しうなむ。されど、學の道は、遠くして限りなく、文の林は、深くしていと高く、そを究めむことは、容易きわざにあらず。之をたとへむに、いかに麗しう花咲きに匂ひて、あまたの人に、めではやさるとも、空しう山の嵐とちりゆきて、實を結ばず、あたら芳草佳木も、しばし人の目を喜ばすのみにて、何のかひもなきやうに、あまたの學の徒の中に、誰も〱もほめたゝへぬ者なき御許も、若し驕の心いできて、學の道のたど〱しく、文の林にわけ入りて、高れの花を手折らずば、けふの譽も、いつしかあせりゆきて、かひなきに至らまし。されば、いとなめげには侍れど、はえある御許の、けふを祝ふと共に、今より益々利心をふり起して、いや勉めに勉め、いや勵みに勵みて、行を愼み、學を修めて、御兩親さては師の君の、恩に報いまつらむことを、切に祈るも、隔てぬ中の心しらびにこそ、尚逢ふ日程にさふらひて、盡きことはあげ、喜び申すべくなむ。あなかしこ。

佐久間八重子

蒔かぬ種は、生ひ出づべきよすがなく、培はぬ草木は、秀づべきかは。秀でぬものゝ、色香ゆかしき花を開き、善き實を、結ぶべき事やはある。人の身を修め、智を學ぶも、亦此くのごときものにやあらむ。我がめでいつくしむ御許は、さが、いみじくあるを、日頃、雪の窓、螢の光りに、物學びを、いそしまれしかば。其のてがらあらはれて、こたび、師範女子部、三とせの業の試驗に、さはりなう、殊に、同じ學びの、朋どちにも、打まさりて、身の行ひ正しく、學びの業の、いと秀でられて、香はしき名を、久方の雲井までも、あげ

られしさや。いさしくめでたく、此身の、いみじき獲得しにも彌勝りて、嬉しくなん。されど、いまだ、學びの業の、卒りしにもあらで、尙此上に、さはなれば、さながら、秀でゝ色香をかしき、花を開きし、頭なるべし。尙、嵐、旱、霖、雨、蝗、蒡にもたぐふべき、千辛萬苦の、さはなれば、小成に安じて、爭でかはよき實を結ぶべき。取わけ、卒業の上は、雨、雲、空、定めなき、東の洋の敎の庭に、撫子を培ひ育する、重き務めにも、當る身にしあれば、女子なりさて、爭でかは、あだにすごしてよかるべき。必らず其心して、願はしうなむ。御許のこのほぎごさを、ものするに臨み、嗚呼がましくも、皇御國のため、一言をすゝめまゐらするになむ、あなかしこ。

中村洵子

庭の梅が枝一つ手折りて、瓶に挿さんさ、庭に降りたち、あまりに花の美しさに、手折らむ術もなく、御許樣の訪はせ給はむには、庭逍遙もいかに心ゆくらむさ思ふ折しも、はしための郵便をさ持來りけるを、取る手忙はしく、封押切り拜しまゐらすれば、御許君には、雨の朝月の夕の學屋通ひも、今や光をあらはして、這度の試驗も、滯りなう、殊に同じ學の友さちに打まさりて、第四學を卒へさせられぬさか。蒔かぬ種は生ひ出つべきよすがなく、培はぬ草木は色香床しき花を開き馨き實を結ぶべき事やはある。さがいみじく日頃の物學びにいそしましかば、いさ秀てられし、香ばしき名を久方の雲井までもあげられしは、いさしく嬉しく芽出たきことになん。されど、學の道は遠くして限りなく、文の林は深くしていさ高く、そを究むことは容易きわざに侍らず。小成に安じて爭てか深き道き山に達すべき。取りわけて業卒へし上は、敎の庭に撫子を培ひ育つる重き務めにも當る身にしあれば、女子なりさてあだに過してよかるべき。今より益〻心をふり起して、いや勉め勉め勵みて、行を愼み學を修めて、御兩親、さては國家の惠に報いまつらむをを、はねある御許君の今日を祝ふさ共に、切に祈るも、陥てぬ中の心しらびにこそ。尙遣からすさふらひて、萬きこゆあけ寄ひ申すべくなむ。かしこ。

廣田さめ子

開け行く學のにはに、生立ち、師の君の敎を守り、常〻怠りなくいそしみ給ひしかひありて、試驗も、あまたの人に、すくれて、御及第遊はされ、たらちれの親の君の御よろこびはいかばかりかさ、思ひやるさへうれしければ、拙き事もかへりみす、祝ひまゐらするになん。かしこ。

さしくに枝もさかゆて色かさへ
　御代にまれなる花やさくらん

纐木香芽子

螢雪の軒近く、開ねて、片山里もやゝ春知り初むる朝の霞立ちこめて、眺むる方も覚束なきに、何處の空よりかけてきつる、雁金の玉章にやさ、うち披けば、都の君の花の便りに添へて、試驗及第を知らせ越されしにて、嬉しさ、たさへん方もなく、御許樣にも、如何許り御悅ひの事さ、遙に祝ひあけ奉り候、誠に、大方の人は、都の塵に交りて、學の道は怠り勝ち成るさ聞くにも係らず、君には常に玉鉾の道一筋に、いそしみ給ふ故にこそさ、いさうれしく候。今よりも、其御志を遂へず、勉め學びて、早く業を終へさせ給ふ日をのみ、一向に待ち念じ候。扨て亦飛鳥山墨田堤さやら、花盛云々さの御事、實に豫て聞及びたる事にて、其樂くしさ賑はしさ、さこそさ思ひ知られ

侍るものから、未だ見ぬ都の花よりも、朝日に匂ふと詠まれたりし、我山櫻の、一重に潔きに如くはなしと、都戀しさは思ひ斷ちても、思ひ斷ちがたきは、物學ぶわざにて、よろづに便りよきは、又花の都にあらではとのみ、常に鄙の片邊りに、わびくらす身は、東の都に物學ふ人々たゞ、いと、うらやましく、おぼゆ候。かゝる身に引かへて、誠に世にも幸多く生ひ出てられし君は、必らず御撓みなく、螢に雪に、いそしみ給ふ樣、かへすがへすも念じ上げ候。先ば右御悦び聞ゆ上げたく、御返しを遅れてかくなん、猶々御身を大切に、御自愛遊ばさるべく候、かしこ。

香川穎子

睦みし友を鄙に殘して、花の都に趣かせ給ひ、名にしおふ高等女學校の學の園に入り立ち給ひしより、春毎に美はしき花を咲かせ給ふと承りしが、過ぎにし月には、殊に色香めでたく、五學年の課程を終へさせ給ひしとの御文、承はる身にも嬉しさのつゝみあへずて、只一言聞ゆさせんとてなん。あはれ、君、六年の春秋を、學の庭に送りて螢雪の功を積みてんと、雄々しくおもひ立ち給ひしも、早五とせの昔となりて、殘る一年をもて、いよ〱實を結ばせ給ふらんとおもひまつるにも、いと〱樂しく、父母の君の御心さへ推し斗らるゝかし。愚なる身の、何事も至り深き君に、申さん樣もなけれど、今よりは、一志ほみ心せさせ給ひて、御身に恙あらせ給はず、いやます〱に勉めいそしみ給ひ、來ん年は、必〱今年の花に恥ぢざる樣、勝れし實りを期し給ひてよ。乘り得ても心許すなの歌は、露も忘れ給はで、遂には桂の枝も手折らせ給へと、海山隔たるこなたより、祈りまつるになん。あなかしこ。

河原よし子

野かさばかり咲き揃ひし櫻にうかれ、菜の花さかれる野邊にさまよひつ、長閑なる空に、あらむかぎりの聲はなちて、まひ登りまひ下れる雲雀にも、心やらるゝ頃となれるに、貴女には、いかゞ此日を送りたまへる。わらはは、花にうかれ、香にまよひ、あたらたふとき日を、あだにすごしはべり、こよなううたてきかぎりにて候。近き日、人の言葉にほのきけば、貴女には、こたびの試驗も、あまたの友垣に秀でゝ、及第し給ひしとよ。父母の君達のうれしみ喜ばるゝさまさへ目のあたり見奉る心地せられ、數ならぬわらはは迄肩身廣くあゆまれ、よろこばしく、思ひ候。花はうるはしく咲けども、ちりなんものを、月は清くすめれど、かげなんものを、此の花、この月に、たふとき月日をあだにせず、花も月もよそに見て、學の窓に身を沈めて、まことの身に添ふ學の花を錦とかざり、故郷にかへりきまさん、貴女の御心ばへ、何にたとふるものかあるべき。されど、寒さ厳しき冬、暑さ烈しき夏には、御身を重んじ、すこしの恙もいとひ給ひ、すこやかにまし〱て、かざる錦のきらびやかにさきの御目もじを、まちたてまつるになむ。つたなき筆もて祝ひまをすも、なごりおしきかぎりなれど、心のまゝなかきつられはべるなれば、御笑をしのびて、御見下されよかし。かしこ。

岸田はつ子

かねてまちきこえつるわこさま、御試驗御滑りなうすませられ、専修科第四學年へ御編入あらせ給ひし、よしいと〱めでたき御事になん。御年も人よりはをさなうおはしますに、いつも御首席をしめ

給ひ、こたびも又優等のしるしをさへ得給ひしとかや。日頃の御しこみゆゑとは申しながら、御さかしさには、ほと〳〵かんじ侍り。御兩親樣の御よろこびは、さることながらわきて御祖父君さまの御心のうちおしはかられてなん。私妹も、つれに御うらやみなりしが、やうやう學齡になりたれば、日がらをゑらび、入校致さすべければ、あはれ和子樣にあやかり侍らんやう、導かせ給ひてよ。この品そまつながら、御祝ひのしるしにさてなん。よろづは、みづからさふらひてこそ。かしこ。

山崎しつ子

さる輩もあやしう、をどるばかりに、うれしくよろこばしきけふを、そこには、いかばかりかおぼすらん。まろはさしごろ、螢に雪につとめたまひしいさをましく、けふしも、いや高き月のかつらを手折り、卒業の證書をうけたまひ、まして首席にさへおはすとか、よそにだにうれしさ限りなきを、父上母君の御よろこび、いかばかりかとおしはかり侍りぬ。さてはうれしさのあまり、御よろこびきこえあげんとて、かくなん。あなかしこ。

秋元檜衛子

こたひ、學ひの庭に、入るへき、試驗なものせられしむれに、立ちたまひて、大かたの人の、わきかたき、文の林も、やすらにしなりしたまひしは、世のちりはらふ、文の机に、よるひるとなく、螢雪の、つもるいさをは、目のあたりに、かゝやきて、すくれさせたまふは、學ひの道に、おくれたる、人のしるへをも、なりたまふ行末も、おもひやられて、御祝ひのあまり、おのれのつたなき、言の葉を、わすれて、かくは、ものし侍るになん。

大友倫子

かれて試驗前にて、いそがはしくおはするよし、さきのたよりに承りはべりつるを、こたび三年の科を終へ玉ひ、組のうちにて、首のくらゐになり給ひぬ、ときゝはべるこそ、いと〳〵めでたけれ。かれて、功みにものし侍ひし、文作るわざには、師の君にもかまけ玉ひしとなん、あはれ、紫のおもとのほこりかならで、いよゝ文の林わけ入り玉ひてし如く、來ん年の試みにも、こたひに劣らで、卒へ給ひねと、姉のつとめにかましめはへるになん。

山内眞子

住み馴れし我が故里を後に見て、我友垣は、去年の春、東の都に物し給はんと出て行かれ給ひしが、其時我も亦程遠からぬ東海道の或る停車迄見おくりて、共につゆおく袖を、東西に別ち、其後は、友のおはする都の空のみながめ、賤が伏せやに、一人むなしく、一年の光陰を過ごしたるこそかなしけれ。さるにはや、春つけ草も、昨日さすき、降りつもりたる、六花の形ちも失せて、やゝ春風に、きのふけふ、園生の花、二ツ三ツ笑み初め、かすみもゐる、百千鳥の、千代をことぶく聲、いとゆたかに、聞こゆる時節とはなりぬ。折しも、東の友より、初花の便と供に、花ばなしき、事のみ游き列れおこせたり。其文意は、目出たく、此の程の試驗に、及第せられ。殊に優等にて、其の賞として、新撰女子大學一部、賞與せられし由を申越され、讀み終へては、已れらの羨みの種ならさるはなけれとも、内にも去る名譽の友ありときゝては、何となくかたみの嬉き心地のせらる。たとへば、金銀山なしても、得らるゝ實ならず、思へば目出度事限りなし、幾久しく千代迄も、女子のかゞみともならん、父

母兄弟の滿足は、さこそと察せらる。且つ又、御國の御爲に、なほ〳〵、御力つくされん事を祈り、併せて祝意を表せんとて、拙筆を取り、白紙を染めて、いさゝか悅びの言の葉をまゐらするになん。

藤原菫子

日頃より、こたびの御入學試驗、さぞ天晴なる御事ならんと、待ち渡り侍りしに、早くも今朝の新聞紙上に、緣の君には、御芽出度及第あらせ玉ひ、加ふるに、御成蹟またなくすぐれさせ玉ひし由、かゞげ侍りき。うれしさ何にかはたとへ侍らん。賢敏なる御性とはいへ、且つは日頃螢雪の御いそしみ書しくあらせ玉ひしなればこそ。末頼母しき御きんたちになんある。御父君母君の、御よろこびもさこそと、御うらやましく、存じ侍る、此草紙おかしがられど、御祝のしるしまでとてまゐらす、なほ〳〵學びの港はまだ遠かなれば、波濤を衝き針路をすゝめさせ玉ふ君よ、いやますく〳〵御勵みつとめ玉ひよ。

今福いま子

春の寒さ、いまださりあへずはへるに、いよゝ事なう、學ひの道に、いそしまるゝと、きくうれしさゝへあるを、こたびの學期試驗には、さゝこほるふしもなく及第せられ、優等の成蹟を、得たまひつとか、家なる御兩親の喜びは更なり、同じき友たちさいはるゝ、妾まで、面目をほどこしはへり、これひとへに、つとめはけまるゝ、踏のしるしのあらはれたるにてこそ、巾合ひ居り、さていろ〳〵まうしたき事あれど、たいめの折にと、ことほき言をのみまうす、あなかしこや。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。書式に違ひたるはすべて沒書とす。

○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

孝明天皇御遺德

全一册

定價　金二十五錢
郵稅　金　四　錢

此書は　先帝の逸事遺聞を網羅したるものにして先づ●御一代の章を掲げ編年體を以て御降誕より崩御に至るまでの事迹を示し尙●聰明●夙成●慷慨●孤憤●撫御●豁達●忍耐●仁愛●雜事の諸項に詳叙し以て　先帝の聖德を頌し奉る國民として必讀すべき良書なり

文科大學敎授兼陸軍敎授從六位內藤恥叟先生序
文科大學敎授從五位栗田寬先生著

天朝正學

全一册

定價　金三十五錢
郵稅　金　四　錢

本書は皇道の淵源より水戶烈義二公が闡明の功業を逃べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ぶ所を知らしむ

題辭東久世伯、勝伯●序文松方伯、品川子、野村子、渡邊子、川田男、富田、金子、平田の諸氏
獨逸國大博士ウヰルヘム、ロッシエル氏著
子爵品川彌二郞君校閱
平田東助君、平塚定次郞君、武內常太郞君、湯川寬吉君、共譯

商工經濟論

再版　全二册

定價金二圓六十錢（上編金一圓四十錢　下編金一圓二十錢）
郵稅
第四種郵便送り金三十八錢
小包郵便送り●十里迄九錢●百里迄十六錢●百里以外卅二錢

ロッシェル先生の經濟學に於ける固より天下の定評あり敢て贅言を要せず本書上下二編二千頁に及ぶ大部のものにして其全文飜譯の精到なる一字を漏省せし處なし戰後の經濟に處して大に商工業發達進歩の點に心を致し力を盡くさんとするの君子此書を讀まずして何の書をか讀まむ

品川彌二郎、平田東助合著

信用組合提要

全一冊　定價金五錢　郵稅金二錢

商業家の道德を進むるは商業の發達を計る所以の基本なり信用組合は今後殖產興業の上に於いて大に普及せしめざるべからず信用薄弱なる商工業は完全なる結果を收むること甚難し是兩氏が此書を著されたる主旨なり商工業發達進步の心を致し力を盡くさんとする諸士の樞要の書なり

副島伯題辭●富田鐵之助君序文
文學士濱田健次郎君校閲●岡勇次郎君著

日本米穀之將來
及米價變動の源因

全一冊　定價金三十錢　郵稅金六錢

本書は內外經濟社會の參考となるべきは勿論農商業者必携の良書にして米穀需用供給增減の理由價格の變動及び既に來りつゝある現象將に來らんとする現象等一讀知悉するを得べし

三輪田眞佐子著

女子の本分

第七版　全一冊　定價金二十五錢　郵稅金六錢

本書は●總論●女德●女子特別の身分●女子の藝業●女子の容裝●女子の人に接する道●女子の生活及人物●結論の八章に大別し尙之れを百十余項に別ちて女子の本分を盡くすに樞要の事項を詳叙せり今や第七版を發行す本書の如何に有益なるかは世間既に定評あり敢て贅言せず

生田目經德編

標註 雅文消息集

全一冊　定價金二十五錢　郵稅金四錢

本書は專ら心を用ゐて古人の消息文中より高尙にして雅馴なるものを採り春、夏、秋、冬、雜の各部に分

ち參考者の便よからん事をはかれり國文を修めんと欲するもの一本を坐側におきて模範となさむ益を得ること必らず大なり

三輪田眞佐子著

女子處世論

第四版　菊版美本　全一冊　定價金二十錢　郵稅金四錢

本書は『女子の本分』の續編として大に好評を博せり今や茲に第四版を發行す未だ見ざる人至急繙て以て其如何に良書なるかを知られんことを

●定期刊行雜誌之部

毎月一回　十五日發行

國光

定價	一冊　金十三錢　●六冊(半ヶ年分)金七十五錢　●十二冊(一ヶ年分)金一圓五十錢
	郵稅一冊に付金一錢五厘
廣告料	五號活字　二十七字詰　一行　金二十錢

毎月二回　五日廿日發行

女鑑

定價	一冊　金十錢　●六冊(三ヶ月分)金五十五錢　●十二冊(半ヶ年分)金一圓
	全國無遞送料
廣告料	五號活字　二十三字詰　一行　金二十錢

毎月一回　一日發行

國光叢誌

定價	一冊　金五錢五厘　●六冊(半ヶ年分)金三十錢　●十二冊(一ヶ年分)金六十錢
	全國無遞送料
廣告料	五號活字　二十三字詰　一行　金二十錢

稟告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本致可候

一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必ず御拂濟可被下候

一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割增に申受候

一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らされは返信不仕候

一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候

一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らされは往々行違を生じ相互の不便免れ難く候

一未納税の來書は一切受取不申候

發行所

東京京橋區築地二丁目二十一番地 （電話番號 本局八八）

國光社

月刊

第四卷第五

國學院雜誌

三月廿日發行

定價一册金十五錢

目次

發行所 國學院
東京麴町區飯田町五丁目八番地

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別證書郵送料添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑　每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年四月十九日印刷
同年四月二十日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木亘雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 （電話番號本局八八） 國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）
（印刷所　東京國光社印刷所）